仙台市文化財調査報告書第62集

燕　沢　遺　跡

1984年3月

仙台市教育委員会
仙台市山崎東土地区画整理組合

仙台市文化財調査報告書第62集

燕　沢　遺　跡

1984年3月

仙台市教育委員会
仙台市山崎東土地区画整理組合

序

日頃、文化財行政に対しましては多大の御協力をいただき担当する仙台市教育委員会にとりましては誠に感謝にたえません。

さて、この度の燕沢・山崎西地区の区画整理事業に先だって実施してまいりました燕沢遺跡の発掘調査は関係機関並び市民各位の御協力のもとで無事完了の運びとなりました。本書はその調査の成果を大成したものであります。

もともと古代にあっては、陸奥国分寺跡と国府多賀城の中間地点にあって、古瓦の散布するところでもあって、古くから平安時代の寺院あるいは関連する施設があったのではないかとの見解も示されていた所であります。今回の調査では多量の古代遺物と遺構が発見され、また仙台市域では初めての発見となった漆紙文書は特筆すべきことがらであります。

比丘尼坂、善応寺にある横穴古墳群、蒙古の碑、古街道のあった所など、原始～中世まで連綿と展開された歴史を偲ぶ所として親しまれている所でもあります。こうした、文化遺産は市民の宝として永く後世に継承して行くことが、これからの「まちづくり」に大切なことと考えます。市民各位の絶大な御協力を念願して序といたします。

昭和59年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤井　黎

例　　言

1．本書は、仙台市山崎東土地区画整理事業に伴う燕沢（つばめさわ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書の執筆はⅠ～Ⅴ(3)を佐藤裕が、Ⅴ(4)～Ⅸを渡部弘美が分担した。また、吉沢幹夫氏・庄子貞雄氏・山田一郎氏から玉稿を賜わった。編集は渡部が担当した。

3．本書の文章・図版の方位は真北で統一してある。

4．本書に掲載した地図は国土地理院発行の５万分の１「仙台」を使用したものである。

5．本書中の土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原1973）を使用した。

6．出土遺物のうち、縄文土器・弥生土器・石製品・瓦は別項で一括して取りあつかった。

7．本調査の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

調 査 要 項

遺 跡 名 称：燕沢遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－101）

所　在　地：仙台市岩切字山崎西地内

調 査 主 体：仙台市教育委員会

調 査 担 当：仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

担 当 職 員：主事　渡部弘美　　教諭　佐藤　裕

調 査 期 間：昭和57年８月２日～12月４日

調査対象面積：約16,000㎡

調 査 面 積：約3,750㎡

調 査 協 力：仙台市山崎東土地区画整理組合　株式会社三洋設計

調査参加者：渡辺泰伸（仙台育英高等学校教諭）　森剛男　遠藤真　永野次郎　小野寺庄三郎
高野盛孝　高野襲蔵　遠藤長吉　郷家栄一　陣場峰男　永田禎之　相沢林三郎
石森留吉　大泉林造　佐藤徳右ェ門　但木吉蔵　永野正　（故）横田要七
真中信三　本郷英俊　高橋幸宏　那須祐二　芳賀信行　森浩芳　但木はな子
本橋憲子　山田さつ子　山田ふさ子　小畑京子　前田芳枝　山田みよ
山田和子　松本寿一　只野宗一　宮本昌俊　岩渕信博　伊藤司　山田晃弘
吉田秀享　斎藤三重子　高橋明美　大和田晶子　鈴木和子　笹平克子
阿部多津子　平照子　菅原恵美子　吉田康子

目　　次

序文
例言
調査要項
Ⅰ．調査に至る経過……1
Ⅱ．遺跡の位置と周辺の環境……1
Ⅲ．調査の方法と経過……7
Ⅳ．基本層位および発見遺構……8
Ⅴ．発見遺構と出土遺物……11
1）住居跡……11
2）掘立柱建物跡……31
3）方形周溝遺構……34
4）土壙……36
5）溝跡・溝状遺構……40
6）ピット……42
7）その他……44
Ⅵ．出土遺物について……48
〈縄文土器〉……48
〈弥生土器〉……48
〈土師器〉……49
〈赤焼土器〉……52
〈須恵器〉……52
〈出土土器の組み合わせと年代について〉……53
〈瓦〉……55
〈石製品〉……65
〈陶硯〉……67
〈施釉陶器〉……67
〈金属製品〉……67
Ⅶ．発見遺構について……67
1．住居跡……67
2．建物跡……70

3．方形周溝遺構……71
4．土壙……71
Ⅷ．墨書文字について……71
Ⅸ．まとめ……72
Ⅹ．付章……74
1．10号住居跡出土の漆紙文書について……74
2．燕沢遺跡の灰白色火山灰……75

図・表目次

図1　燕沢遺跡と周辺の遺跡……2
図2　遺跡周辺の地形……4
図3　遺構全体図……5・6
図4　調査区基本層位……9・10
図5　1号住居跡……12
図6　4号住居跡……13
図7　4号住居跡出土土器……14
図8　5号住居跡……15
図9　5号住居跡出土土器Ⅰ……17
図10　5号住居跡出土土器Ⅱ……18
図11　6号住居跡……19
図12　7号住居跡……20
図13　7号住居跡出土土器……21
図14　8号住居跡……21
図15　9号住居跡……22
図16　10号住居跡……23
図17　10号住居跡出土土器Ⅰ……24
図18　10号住居跡出土土器・硯Ⅱ……25
図19　11号住居跡……26
図20　11号住居跡出土土器Ⅰ……26
図21　11号住居跡出土土器Ⅱ……27
図22　12号住居跡……28
図23　12号住居跡出土土器Ⅰ・Ⅱ……28
図24　14号住居跡……30
図25　14号住居跡出土土器……30
図26　1号建物跡……31
図27　1号建物跡出土土器……32
図28　2号建物跡……32
図29　3号建物跡……33
図30　4号建物跡……33
図31　5号建物跡出土土器……34
図32　5号建物跡……34
図33　方形周溝遺構……35
図34　方形周溝遺構出土土器・鉄釘……36
図35　各土壙平面図……37
図36　48号・55号土壙出土土器Ⅰ……39
図37　55号・58号土壙出土土器Ⅱ……40
図38　溝跡・溝状遺構断面図……41
図39　21号溝状遺構断面図……42
図40　21号溝状遺構出土土器・陶器……42
図41　ピット232出土土器……43
図42　ピット134出土土器……44
図43　包含層出土土器Ⅰ……45
図44　包含層出土土器Ⅱ……46
図45　各調査区・表採等土器……47
図46　出土縄文土器拓影……48
図47　出土弥生土器拓影……48
図48　軒平瓦・平瓦(1類)……59
図49　平瓦（1・2類）……60
図50　平瓦（2類）……61
図51　平瓦（4類）……62
図52　平瓦（4類）・丸瓦（2類）……63
図53　丸瓦（2・3・4類）……64
図54　出土石製品（石鏃・剝片）……65
図55　出土石製品（剝片・石斧・敲石・砥石）……66
図56　住居跡・建物跡・方形周溝遺構配置……69
図57　墨書文字書体……72
表1　周辺の遺跡地名表……3
表2　土壙一覧……38
表3　溝跡・溝状遺構一覧……41

Ⅰ．調査に至る経過

燕沢遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－101）は仙台市の北部を東西に延びる台ノ原・小田原丘陵の東端部に位置する縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡である。特に、布目瓦が出土する所として古くから知られており、寺院又は官衙の存在が考えられてきた遺跡でもある。遺跡の立地する当丘陵は近年急速に宅地化が進み当遺跡地内にも及んできている。昭和56年、遺跡の中央部分にあたる地域で宅地造成に伴う発掘調査が行なわれ、掘立柱建物跡・土壙・溝跡が確認され、布目瓦や土器類が出土し、上記の性格をもつ遺跡である可能性が指適されている。（註1）（註2）

昭和54年、仙台市岩切字山崎西地内において土地区画整理が計画され、地権者　仙台市山崎東土地区画整理組合設立準備委員会　代表遠藤真氏（現仙台市山崎東土地区画整理組合）より土地区画整理計画案が提出された。開発申請地は昭和56年度発掘調査地点の北側丘陵部一帯で、瓦や土器類が散布しており、地形的な面からも掘立柱建物跡などの遺構の存在が予想された地点である。仙台市教育委員会はこれらの調査成果をふまえ同組合との協議により、開発部分の事前調査を行なうことにし昭和57年８月２日より記録保存を目的とした発掘調査を実施するに至った。

Ⅱ．遺跡の位置と周辺の環境

１．地理的環境

燕沢遺跡は東北本線東仙台駅より北東約２kmの地点、仙台市燕沢東三丁目・岩切字山崎西に所在する。

遺跡周辺の地形を概観すると、奥羽山脈から分岐して延びる富谷・七北田（仙台市東部においては台ノ原・小田原丘陵の呼称がある）丘陵が東へ張り出しており、両丘陵を七北田川が東流しながら開折し、平野部において梅田川を合流して太平洋に注いでいる。七北田川は中流域の両岸に河岸段丘を発達させ、丘陵面には要害地形が見られる。また、丘陵端より太平洋に向けて広大な沖積平野を形成せしめ、当河川の周辺には自然堤防の地形もみられる。

遺跡は台ノ原・小田原丘陵の東端部、七北田川右岸の標高20～30ｍ程の段丘面に立地する。平野部との比高差は15～20ｍ程である。この段丘面は南側で急傾斜の要害地形、北側は小河川が開析した谷地形がみられる緩斜面となっている。このように遺跡の立地として、平坦面が少ないため緩斜面に遺跡の広がりがみられる特徴がある。

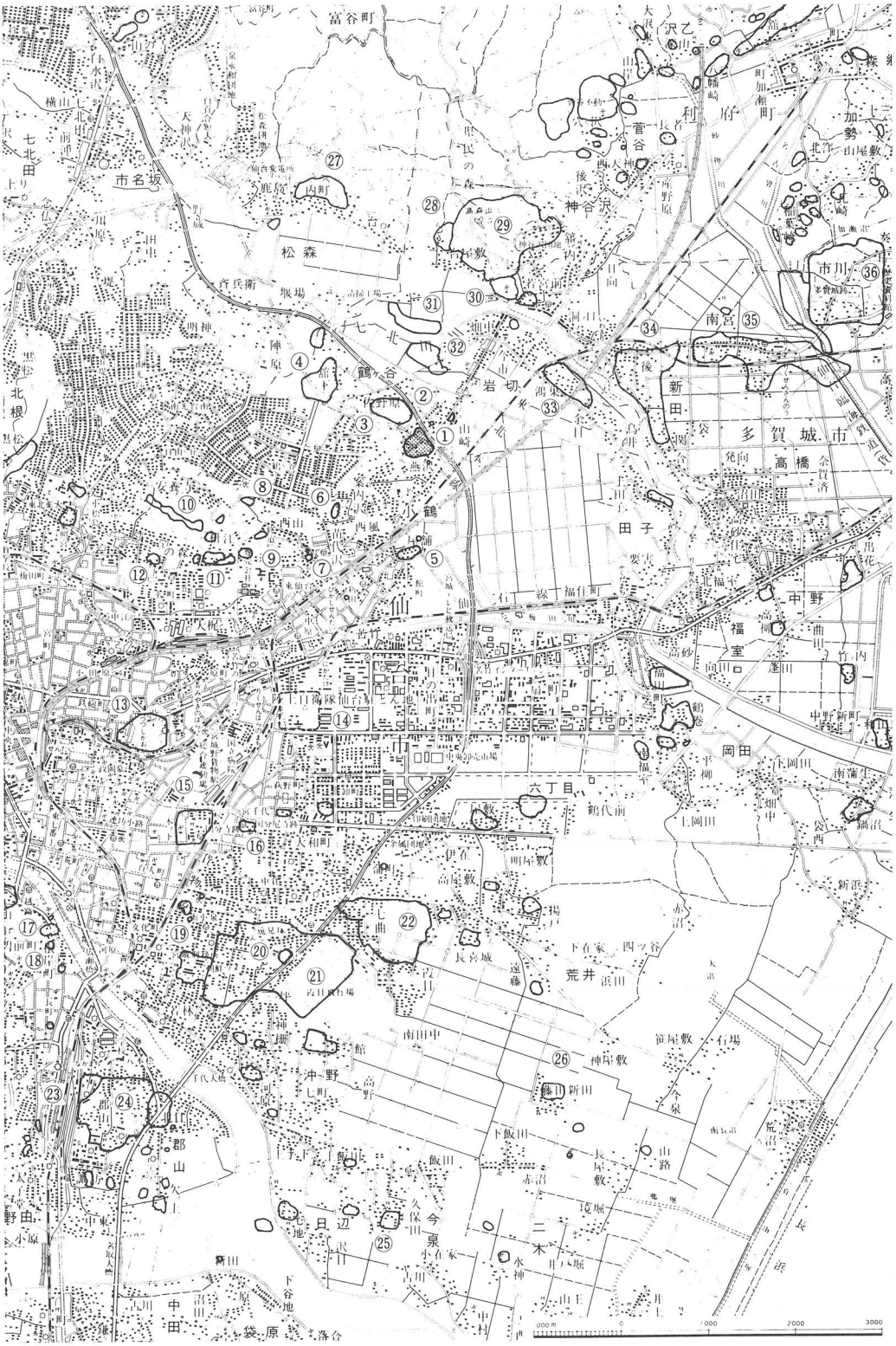


図１　燕沢遺跡と周辺の遺跡

2．歴史的環境

燕沢遺跡周辺は良好な地理的環境から数多くの遺跡が分布している。特に、七北田川両岸の丘陵面と同河川が形成した自然堤防上に集中している。弥生時代以前の遺物は発見されているが、遺構は現在のところ確認されておらず不明な点が多いが、古墳時代以後の遺跡は種類・数とも多くみられる。

古墳時代の遺跡としては、七北田川の自然堤防上に鴻ノ巣遺跡、岩切畑中遺跡、新田遺跡などがある。鴻ノ巣遺跡からは古墳時代前期(塩釜式)の遺物が出土しており、中期(南小泉式期)の住居跡も発見されている。また、岩切畑中遺跡からは後期(栗囲式期)の住居跡が発見されている。当遺跡周辺は、七北田川が丘陵部から平野部へ流れ出る位置にあたり、交通の要所でもあることから、人々の往来も盛んであったと推定され、古墳時代でも早い時期から集落が存在していたものと考えられる。古墳は当遺跡と同一丘陵上に千人塚古墳がある。周囲からの削平を受け墳丘は原形をとどめていないが円墳であったと推定される。また、新田遺跡では円筒埴輪が出土しており、周辺に高塚の古墳が存在していた可能性を示唆している。このほか、台ノ原・小田原丘陵の東部においては初期須恵器生産窯の大蓮寺窯跡がみられる。古墳時代終末から奈良時代にかけての遺跡には、両丘陵の麓に善応寺・東光寺・入生沢・台屋敷の横穴墳群がみられ、このうち善応寺横穴墳群は推定で100基を超えるものといわれている。

奈良時代になると、当遺跡東北東約5kmの位置に陸奥国府である多賀城が、つづいて南南西約5kmの位置に陸奥国分寺・同尼寺が建立されている。これらに供給される瓦・土器等の生産が台ノ原・小田原丘陵上で開始され、現在確認されている窯跡の数は18群にものぼり、一大窯跡群が形成されていたことがうかがわれる。

平安時代の遺跡には岩切畑中遺跡、鴻ノ巣遺跡などがある。このうち、岩切畑中遺跡では住

番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	燕沢遺跡	官衙?・集落	丘陵	縄文～平安	19	若林城跡	城館	自然堤防	中世・近世
2	千人塚古墳	円墳	丘陵	古墳	20	遠兄塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳（中期）
3	菖蒲沢遺跡	包含地	丘陵	平安	21	南小泉遺跡	集落	自然堤防	弥生～中世
4	笹森城跡	城館	丘陵	中世	22	仙台東郊条理跡	条理跡	沖積平野	奈良
5	小鶴城跡	城館	丘陵	中世	23	西台畑遺跡	包含地	自然堤防	弥生・古墳
6	善応寺横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳～平安	24	郡山遺跡	官衙	自然堤防	古墳・奈良
7	大蓮寺窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳(中期)	25	今泉城跡	集落・城館	自然堤防	弥生・古墳・平安～近世
8	安養寺中囲窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安	26	藤田新田遺跡	包含地	浜堤	弥生
9	安養寺下窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良	27	松森城跡	城館	丘陵	中世
10	与兵衛沼窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安	28	台屋敷横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
11	神明社窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安	29	岩切城跡	城館	丘陵	中世
12	庚申前窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良	30	東光寺横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
13	国分鞭館跡	城館	丘陵	平安	31	大正囲遺跡	包含地	自然堤防	平安
14	南日城跡	城館	自然堤防	中世	32	岩切畑中遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安～近世
15	陸奥国分寺跡	寺院	沖積平野	奈良・平安	33	鴻ノ巣遺跡	包含地	自然堤防	古墳・平安・中世
16	陸奥国分尼寺跡	寺院	自然堤防	奈良・平安	34	新田遺跡	包含地	自然堤防	古墳・中世
17	宗禅寺横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳・奈良	35	山王遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
18	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳(中期)	36	多賀城跡	官衙(国府)	丘陵	奈良～中世

表1　周辺の遺跡地名表

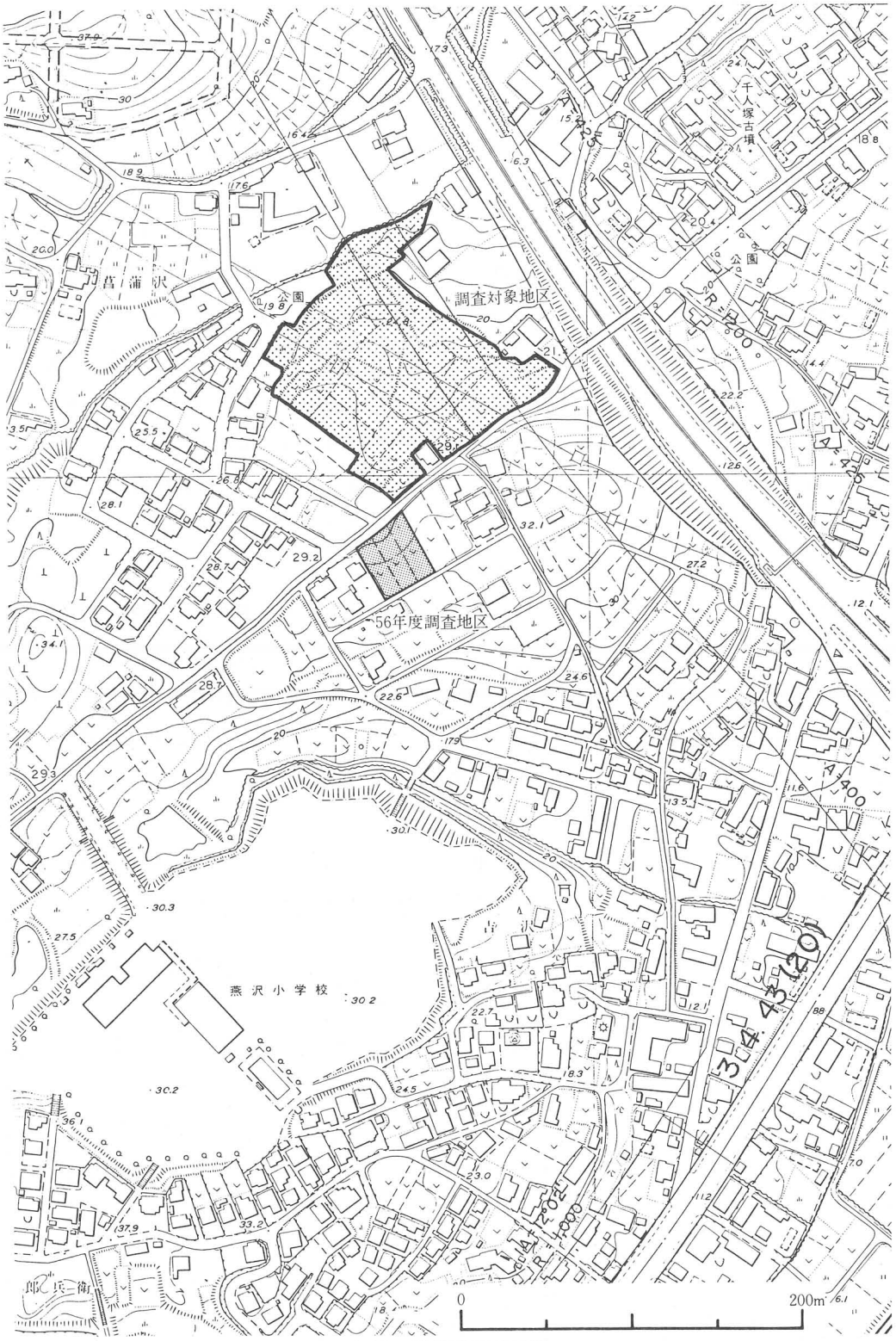


図２　遺跡周辺の地形

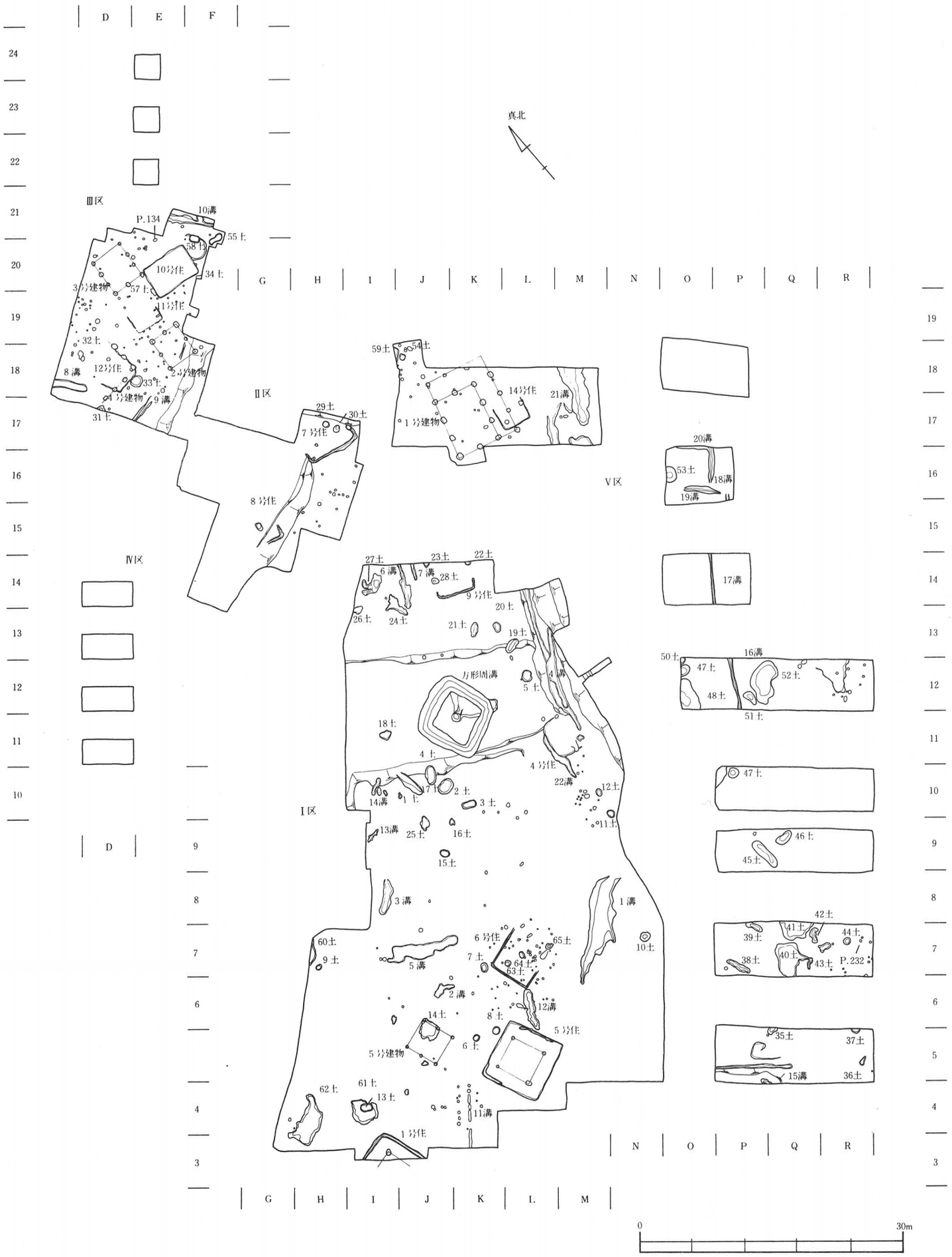

真北
Ⅰ区
Ⅱ区
Ⅲ区
Ⅳ区
Ⅴ区
10溝
P.134
55土
58土
10号住
34土
3号建物
57土
11号住
32土
8溝
12号住
33土
2号建物
4号建物
9溝
31土
29土
30土
7号住
8号住
59土
54土
14号住
21溝
1号建物
20溝
53土
18溝
19溝
17溝
27土
23土
22土
6溝
7溝
28土
9号住
20土
26土
24土
21土
19土
方形周溝
5土
4溝
18土
4土
4号住
22溝
12土
14溝
1土
17土
2土
3土
11土
13溝
25土
16土
15土
50土
16溝
47土
52土
48土
51土
47土
46土
45土
42土
41土
44土
39土
40土
38土
43土
P.232
35土
37土
15溝
36土
3溝
1溝
60土
9土
6号住
65土
7土
64土
63土
10土
5溝
2溝
12溝
14土
8土
5号住
6土
5号建物
62土
61土
13土
11溝
1号住
0
30m

図3　遺構全体図

居跡１軒が、鴻ノ巣遺跡からは溝跡・土壙が確認されている。この他、周辺の遺跡からは平安期の土師器・須恵器・瓦が多数発見されている。

中世の遺跡では、七北田川左岸丘陵上に国指定史跡である岩切城（高森城・鴻ノ巣館）がみられる。これは、源頼朝によって陸奥国府の留守職に補任された伊沢(留守)家景が構えた館で、麓には留守氏の菩提寺である東光寺には磨崖仏や板碑が多数みられる。その他、小鶴城や笹森城など、いくつかの中世の館跡が知られており、当地は鎌倉時代から戦国時代末期にかけて要衝の地であったことがうかがわれる。留守家文書によると、当時「冠川」と呼ばれていた七北田川に「今市橋」が架けられており、冠屋市場、河原宿五日市場、在家などの地名がみられ、国府へ通じる道に沿って七北田川流域に集落が発達しており、すでに商業活動も盛んに営まれていたと思われる。

以上のように、燕沢遺跡周辺は古くは古墳時代から連綿と続く多くの遺跡群で構成されており、特に中世においては政治・経済・文化の一大中心地であったと考えられる。

Ⅲ．調査の方法と経過

今回、提出された開発予定地は遺跡の北東部分、台ノ原・小田原丘陵から分岐した舌状台地およびその周縁部にあたる。標高は16～28ｍ程で全体的に北東側へ傾斜しており、階段状の畑地として利用されていた所である。

調査区は土地境界杭を基準とし、南北（真北線から東へ約40°偏する）に基準線を設け６ｍを単位としたグリッドを設定した。グリッド名は南北軸にアラビア文字、東西軸にアルファベット文字を用いた名称を使用した。調査区は急斜面や削平の著しい地点を除いて地形に合わせて五つの区を設定した。

Ⅰ区：舌状台地上全体に広がる馬背上の平坦面

Ⅱ区：舌状台地の北側周縁部中段の緩斜面

Ⅲ区：舌状台地の北側周縁部下段の緩斜面

Ⅳ区：舌状台地の北西側周縁中段の緩斜面

Ⅴ区：舌状台地の東側・小谷地形部分の凹面と緩斜面

調査は表土全面を重機で排除し遺構確認をすすめていったが、区によっては部分的な調査で終了したものもある。全体的に表土層は薄く、遺構の状態は不良であった。遺構は特にⅠ・Ⅱ・Ⅲ区で多く確認され、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡などが検出されている。

調査も終了に近づいた11月20日には現地で説明会を開催し、調査は12月４日に終了した。最終発掘面積は約3,750㎡である。

Ⅳ．基本層位および発見遺構

調査区内堆積土は、Ⅰ区などの標高の高い地点では全体的に薄く10～15cm程で地山面に達するが、Ⅱ～Ⅴ区などは傾斜地ということもあり10～80cm程の堆積層が観察される。調査区が広範囲にわたるため、基本的な層位の区ごとの関係を把えることは出来なかった。調査区の一部に限られるが灰白色の火山灰が確認されており、火山灰層を堆積するものやそれを切る形の遺構が確認されている。遺構は一部のものを除きほとんどのものが地山面で確認されている。区ごとの状況を下記に略述する。

〈Ⅰ区〉

Ⅰ区は北東方向に舌状に延びる平坦部分であるが周縁は傾斜面となっており、地形的な条件により堆積土は全体的に薄い。全体が耕作面となっており、細分は可能であるが地山まで大きく１層として把えられる。Ⅰ層中からは石鏃・土師器・須恵器・瓦などが出土しており、遺構は１号・４号・５号・６号・９号住居跡をはじめ方形周溝遺構・溝状遺構・土壙・ピットが確認されている。

〈Ⅱ区〉

Ⅱ区はⅣ区から続く舌状台地の北側周縁部にあたり、畑地となっていた所である。堆積土は耕作土の１層のみである。遺構は７号・８号住居跡をはじめ土壙・ピットが確認されている。

〈Ⅲ区〉

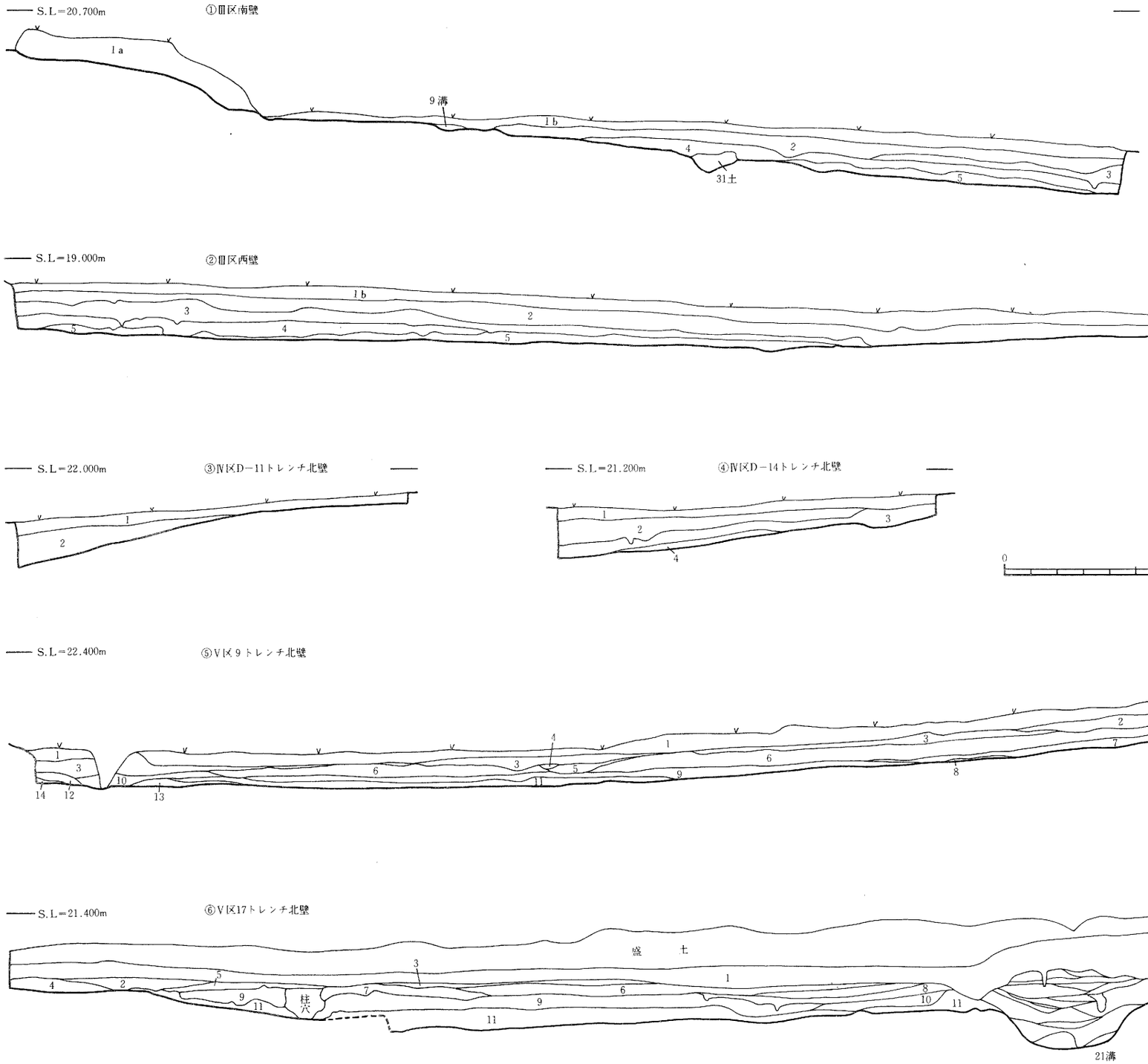
Ⅲ区はⅡ区から更に一段低い舌状台地の裾部分にあたり、北西側に位置する谷へゆるやかな傾斜をみせる地点である。堆積土は北西側にかけて徐々に厚くなっており、６層の堆積土を確認している。第１層は耕作土で、第２層以下は暗褐色土と黒褐色土が互層となるもので縄文時代から平安時代までの遺物が包含されている。遺構は10号・11号・12号住居跡、２号・３号・４号掘立柱建物跡をはじめ土壙・溝状遺構・ピットが確認されている。

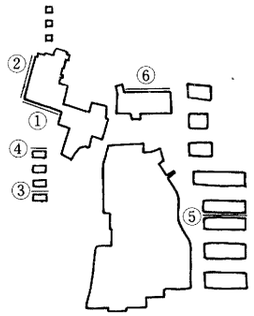
〈Ⅳ区〉

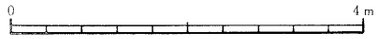
Ⅳ区はⅠ区舌状台地北西側周縁部の傾斜面に位置し、耕作のため階段状に削平を受けていた地点である。堆積土は耕作時の攪乱を受けていたが大きく３層まで確認され、北西側の谷部へ傾斜している。遺構は確認されず、堆積土中より土器片が若干出土したのみである。

〈Ⅴ区〉

Ⅴ区はⅠ区東側の谷地形を中心とした調査区で、全体的に凹面となっており南東から北西にゆるやかな傾斜をみる地点である。９トレンチでは堆積土を14層確認している。堆積土は水平に近いレンズ状堆積を示している。17トレンチでは11層の堆積土を確認しており、ほぼ水平堆積を示している。灰白色火山灰が層中に検出され、それを切る形で掘立柱の柱穴が確認されて







①・②

層	土色	土性	備考
1a	黄褐色 10YR 5/6	シルト	耕作土
1b	にぶい黄褐色 10YR 5/4	シルト	耕作土
2	暗褐色 10YR 3/4	シルト	
3	暗褐色 10YR 3/3	粘土質シルト	土器片を含む
4	褐色 7.5YR 3/3	粘土質シルト	炭化物・土器片を含む
5	暗褐色 7.5YR 3/3	粘土質シルト	

③

層	土色	土性	備考
1	黄褐色 10YR 5/6	シルト	耕作土
2	橙色 5YR 6/6	粘土質シルト	耕作土(積土)
3	褐色 10YR 4/4	シルト	
4	赤褐色 5YR 4/6	粘土質シルト	

④

層	土色	土性	備考
1	褐色 10YR 4/6	シルト	耕作土
2	暗褐色 10YR 3/3	シルト	土器片を含む

⑤

層	土色	土性	備考
1	暗褐色 10YR 3/3	粘土質シルト	耕作土
2	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	
3	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	
4	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	
5	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	
6	黒褐色 10YR 3/3	粘土質シルト	
7	黒褐色 10YR 3/3	粘土質シルト	
8	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	
9	暗褐色 10YR 3/4	砂質シルト	
10	暗褐色 10YR 3/3	粘土質シルト	
11	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	
12	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	炭化物を含む
13	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	小礫を含む
14	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	炭化物を含む

⑥

層	土色	土性	備考
1	暗褐色 10YR 3/4	砂質シルト	耕作土
2	褐色 7.5YR 4/4	砂質シルト	小礫を含む
3	黒褐色 10YR 2/3	砂質シルト	
4	褐色 7.5YR 4/3	砂質シルト	小礫を含む
5	暗褐色 7.5YR 3/3	砂質シルト	
6	褐色 7.5YR 3/4	砂質シルト	小礫・土器片を含む
7	褐色 7.5YR 4/4	粘土質シルト	炭化物・土器片を含む
8	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	小礫を含む
9	褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	灰白色火山灰・炭化物・焼土を含む
10	暗褐色 7.5YR 3/4	粘土質シルト	小礫を含む
11	褐色 7.5YR 4/6	粘土質シルト	マンガン粒を含む

図4　調査区基本層位

いる。遺構には14号住居跡・１号掘立柱建物跡をはじめ土壙・溝状遺構・ピットが確認されている。掘立柱建物跡を除いて全て地山面で検出されている。遺物には土師器・須恵器片が出土しており、瓦片は他の区に較べて多く出土している。

Ⅴ．発見遺構と出土遺物

発見された遺構には住居跡・掘立柱建物跡・方形周溝遺構・土壙・溝跡・溝状遺構・ピット等がある。遺構の遺存状態は耕作などのため全体に不良であった。

遺物は整理箱にして60箱程の出土量である。種類としては縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・陶器・硯・瓦・石製品・鉄製品・漆紙文書などがある。土器類が出土品の大半を占め、土師器坏の中には墨書をもつものがみられた。また、漆紙文書は断片ではあるが文字が判読されている。

（1）住居跡

住居跡は11軒確認された。これらは全て竪穴式住居跡である。住居跡は調査区全体に散在するかのように分布するが、所属年代・軸方向の違いから大きく２グループに分かれる。また、精査時点で住居と認定しがたいものがあり欠番となっているものがある。

１号住居跡

調査区Ⅰ区の南西端、Ⅰ・Ｊ－３グリッドを中心に確認された。Ⅰ区の中で最も標高の高い地点にあたる。一部後世の土壙によって削平された部分がある。

平面形は大部分が調査区外へ延びるためプランは不明であるが、プラン北東部で屈曲がみられ遺存状況から隅丸方形を呈するものと考えられる。確認長は北辺で約3.85ｍ・東辺で約5.35ｍまで計れた。東辺の軸方向はＮ－16°－Ｗである。

堆積土は周溝部まで含めて７層確認した。褐色系のシルト層で構成されている。

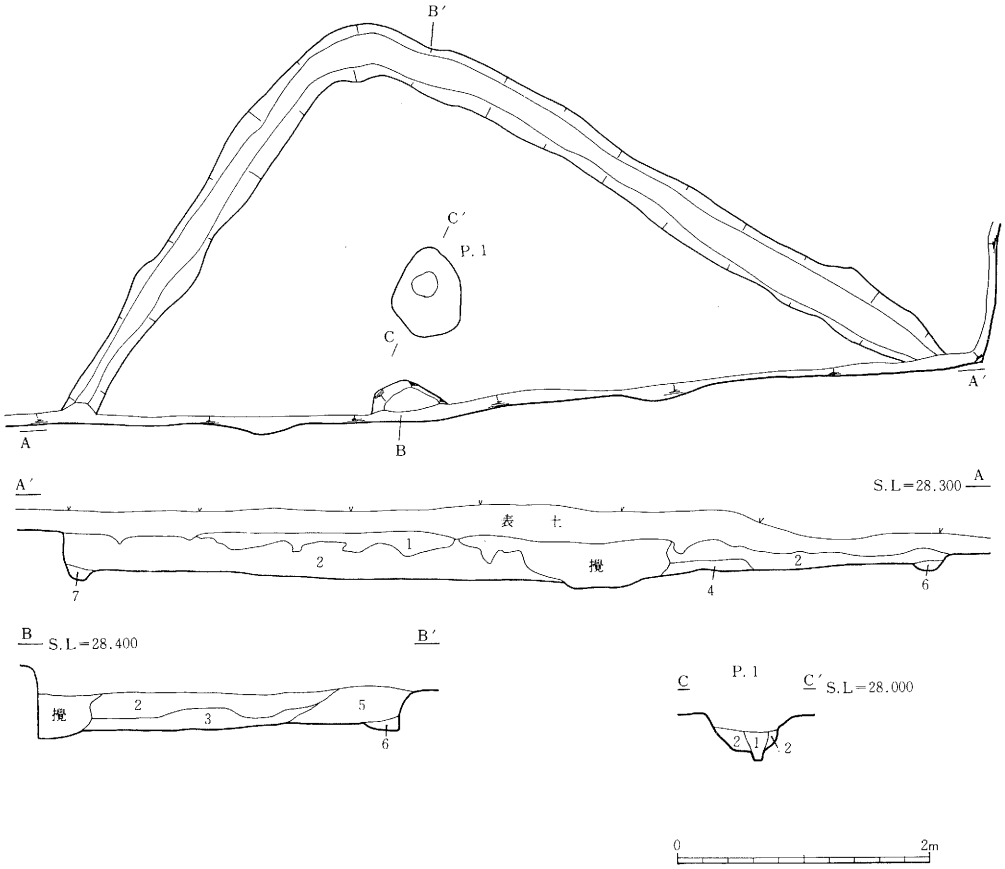
壁は北側と東側の確認のみであるが、周溝底面から急角度で立ち上がる。壁高は15～40cm程である。周溝も壁直下にめぐっており、幅20～40cm程で深さは８～12cm程と全体に浅い。

床面はほぼ平坦で地山を床としている。

柱穴は床面北東部に１基確認した。柱穴掘り方は不整円形を呈しており、長軸80cm・短軸60cmを計る。柱痕跡が検出され径20cm程の円形で深さは40cm程のものである。

確認範囲が狭いこともあり住居に伴う上記以外のものは検出されなかった。

遺物は全て破片資料で堆積土中からの出土である。種類としては縄文土器・土師器・赤焼土器・瓦があるが量的には少ない。



層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色　10YR 3/4	粘土質シルト	耕作土
2	褐　色　10YR 5/6	粘土質シルト	炭化物・土器・小礫・黒褐色土を含む
3	褐　色　10YR 5/4	粘土質シルト	炭化物・砂粒・小礫を含む
4	褐　色　7.5YR 5/4	シルト質粘土	炭化物を含む
5	褐　色　7.5YR 5/4	粘土質シルト	炭化物・小礫を含む
6	褐　色　10YR 5/6	粘土質シルト	小礫を含む
7	褐　色　10YR 5/6	粘土質シルト	炭化物・小礫を含む

P. 1

層	土　　色	土　性
1	黄褐色　10YR 5/6	粘土質シルト
2	明黄褐色　10YR 6/6	砂質シルト

図5　1号住居跡

4号住居跡

調査区Ⅰ区東側斜面、L・M－11グリッドで確認された。住居東側部は斜面下方にあたり削平が著しく遺存していない。

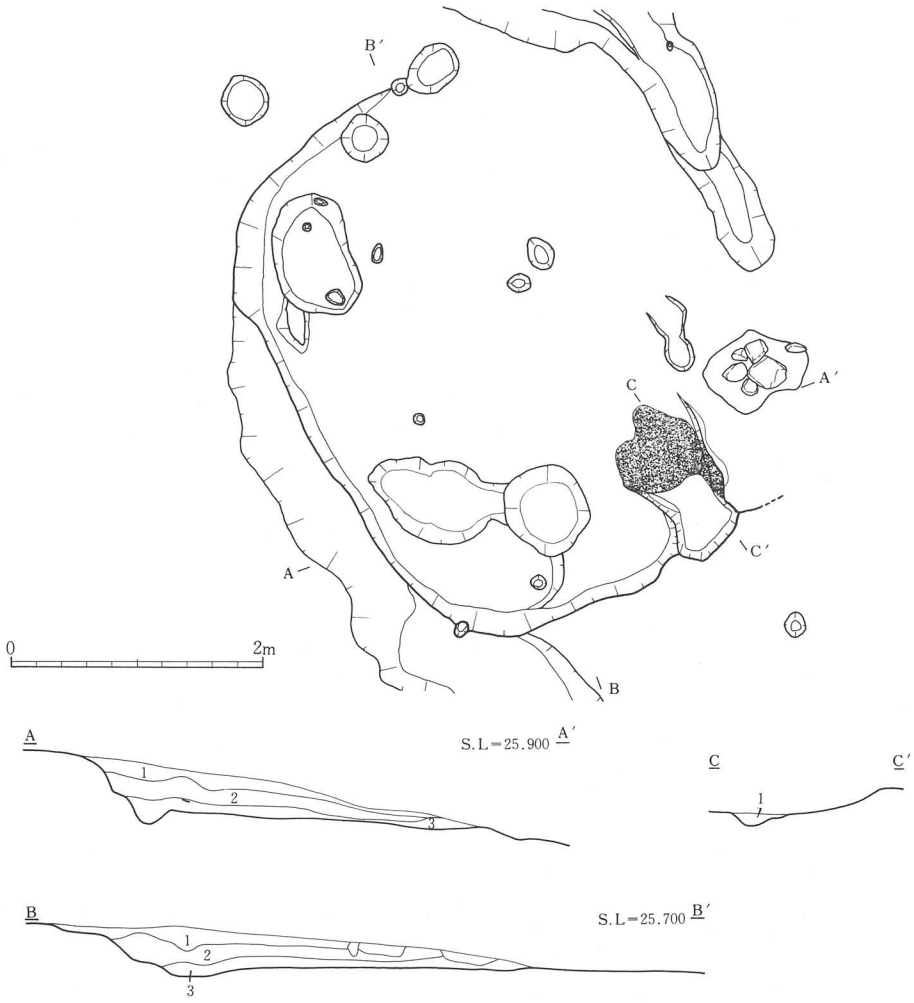
平面形は削平のため不明部分はあるが、残存状況から隅丸方形を呈すると考えられる。規模は西辺で約4 mを計り、北辺と南辺の確認長はそれぞれ約1.60 m・2.60 mまで計れた。西辺の軸方向はN－10°－Eである。22号溝状遺構と重複関係にあり溝状遺構を切っている。

堆積土は大きく3層に分かれる。堆積土は南西側から北東側にかけて厚さが減じている。褐

色系のシルト層で構成されている。

壁は全体的にゆるやかな立ち上がりをみる。斜面に立地するための壁崩壊が理由と考えられる。壁高は西壁側で30cm強を計る。周溝は確認されなかった。

床面はほぼ平坦であるが、わずかながら東側へ傾斜をみる。地山を床面としている。床面上において大小のピットを10基検出したが、柱穴となるものは確認されなかった。



層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色　10YR 3/4	シ ル ト	土師器・炭化物を含む
2	褐　色　10YR 5/4	シ ル ト	土師器片・焼土を含む
3	褐　色　7.5YR 5/4	シ ル ト	炭化物を多量に含む

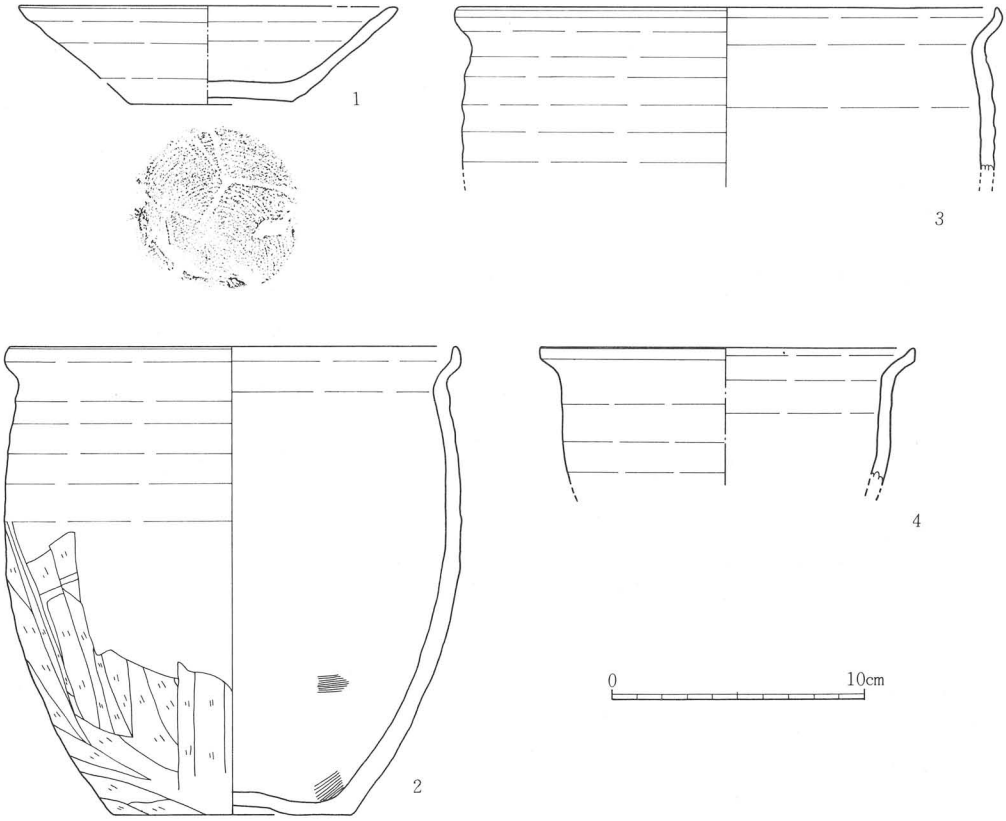
カマド部

層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色　10YR 3/3	粘土質シルト	炭化物・焼土

図6　4 号 住 居 跡

カマドが住居南壁に附設されている。燃焼部のみの確認で煙道部は不明である。地山を削り出して構築しており、赤変した両袖がかすかに残在するのみである。燃焼部は焚口部から奥壁に向けてかすかに立ち上がりをみせる。規模は焼土・炭化物の範囲から長軸は130 cm程で、最小幅は30cmを計る。

遺物は床面でのものはなく全て堆積土中の出土である。多くのものは細片となっているが、種類としては土師器坏・甕、須恵器甕、瓦がある。



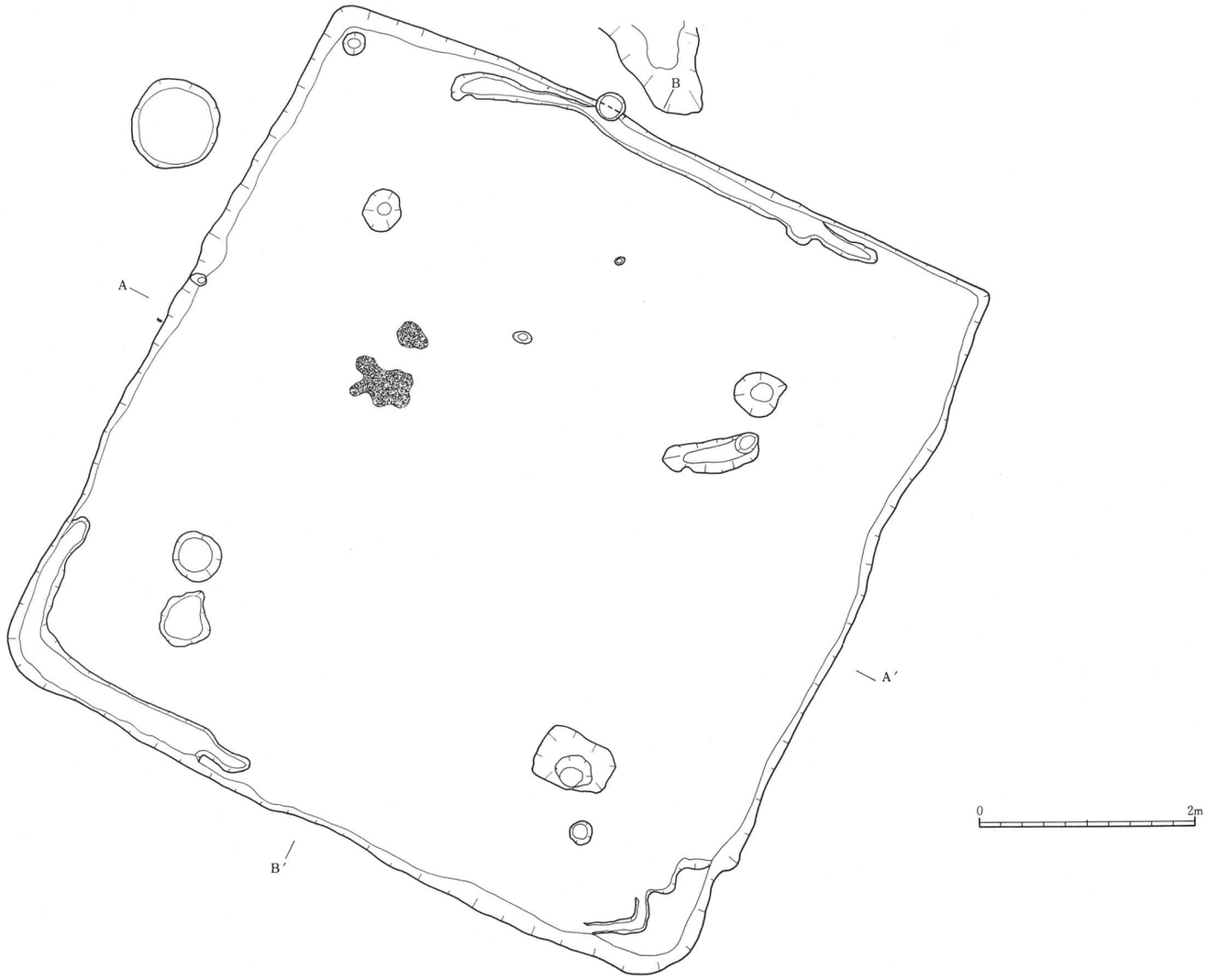
図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
7－1	赤焼土器	坏	埋土	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整・底部付近にナデ？	(150)	(63)	(39)	b	
－2	土師器	甕	埋土	ロクロ調整・体部下端一ヘラケズリ	ロクロ調整・一部にナデ？	179	——	——	a	
－3	土師器	甕	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	214	——	——	a	
－4	土師器	甕	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	(148)	——	——	a	

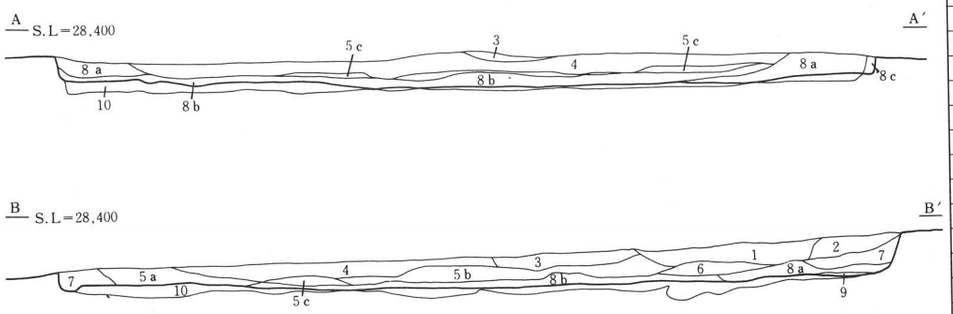
図7　4号住居跡出土土器　(単位：mm)

5号住居跡

調査区Ⅰ区、K・L－5グリッドを中心に確認された。

平面形は方形を基調とする隅丸方形である。規模は長軸が約7.20 m・短軸が約7 mを計りほ





層	土色	土性	備考
1	暗褐色 10YR 3/4	シルト	土師器片・炭化物を含む
2	にぶい黄褐色 10YR 5/4	シルト	
3	暗褐色 10YR 3/4	シルト	炭化物を含む、1層より若干暗い
4	褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	土師器片・炭化物を含む
5a	褐色 10YR 5/4	シルト	土師器片を含む
5b	暗褐色 10YR 3/3	粘土質シルト	土師器片・炭化物を含む
5c	褐色 10YR 5/4	シルト	灰白色火山灰を含む
6	褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	
7	褐色 10YR 5/6	シルト質粘土	
8a	暗褐色 10YR 3/4	シルト質粘土	
8b	褐色 10YR 5/6	粘土質シルト	しまりが強い
8c	褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	
9	褐色 10YR 5/4	粘土	
10	褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	炭化物を含む（貼床）

図8　5号住居跡

ぼ正方形を呈している。東辺の軸方向はN－25°－Wである。面積約50.4㎡を有する。

堆積土は８層確認されたが、大きく３層に大別できる。土層はシルト層、中間層は灰白色火山灰を含むシルト層、下層は粘土質のシルト層である。中間の層をはさんで上層と下層では出土遺物に大きな年代差が確認されている。

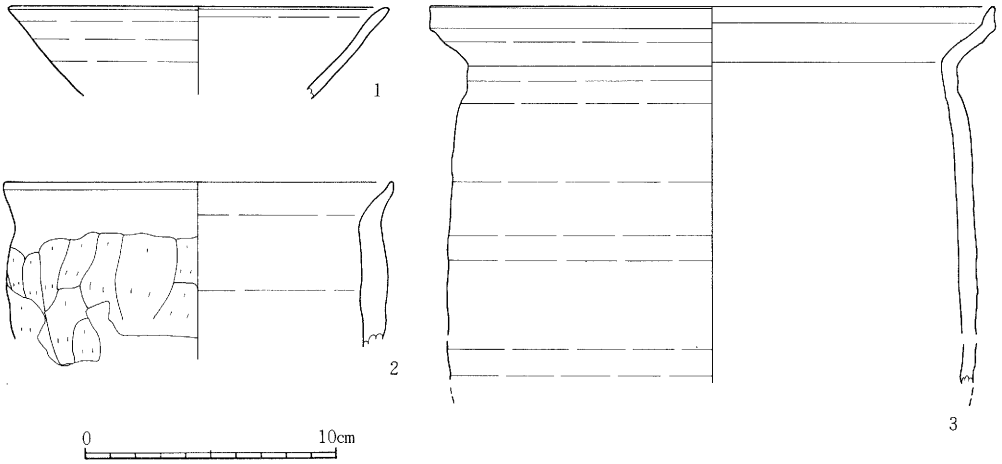
壁面は周溝底面から急角度で立ち上がる。壁高は８～30cm程である。周溝は北西・南西隅と東壁中央部のみに確認された。幅は10～30cm程で深さは５～10cm程を計る。断面は皿状を呈する。

床面はほぼ全面に貼床が確認された。貼床は褐色のしまりの強い粘土質シルトで、厚さは１～10cm程でかたくつきかためられている。

柱穴は住居対角線上に４基確認した。柱穴掘り方は円形を基調としており径40～70cm程のものである。柱痕跡が検出されるものもあり、径18cm程の円形である。

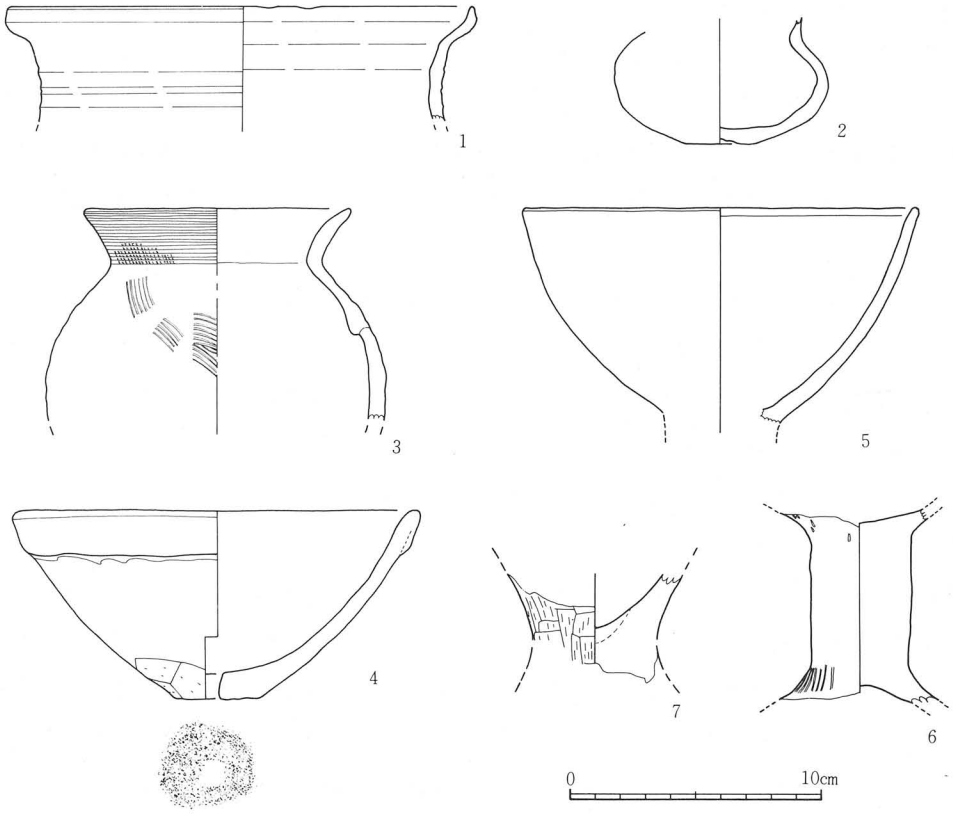
炉跡は住居中央部北側で検出した。径60cm程の焼土塊が残在し、周辺に焼土がみられるのみのものである。地床炉と考えられる。

遺物の出土状況として、堆積土上層でロクロ使用の土師器・赤焼土器・瓦が、下層ではロクロ不使用の土師器が確認されている。上層出土のものはほとんどが細片となっており散乱状態での出土であった。状況から廃棄としての性格を考えうるものである。下層出土の土師器も全て堆積土中のものであるが一括の状態で出土している。種類として上層では土師器坏・甕、赤焼土器坏・平瓦があり、下層では土師器高坏・壺・甑・台付甕・台付鉢・石器がある。



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
9－1	赤焼土器	坏	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	151	——	——		
－2	土師器	甕	埋土	ロクロ調整・体部ーヘラケズリ	ロクロ調整	155	——	——	b	
－3	土師器	甕	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	224	——	——	a	

図９　５号住居出土土器Ⅰ　（単位：mm）



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
10－1	土師器	甕	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	185	―	―	a	
－2	土師器	壺	埋土	不明	不明	―	26	―		
－3	土師器	甕	埋土	口縁－ハケ目・ヨコナデ 体部－ハケ目	不明	(106)	―	―		
－4	土師器	甑	埋土	体部下端－ヘラケズリ	不明	162	33	75		複合口縁 単孔
－5	土師器	台付鉢	埋土	不明	不明	158	―	―		
－6	土師器	高坏	埋土	ハケ目	不明	―	―	―	b	
－7	土師器	台付甕	埋土	ヘラケズリ	不明	―	―	―		

図10　5号住居出土土器Ⅱ

(単位：mm)

6号住居跡

調査区Ⅰ区、L－7グリッドを中心に確認された。

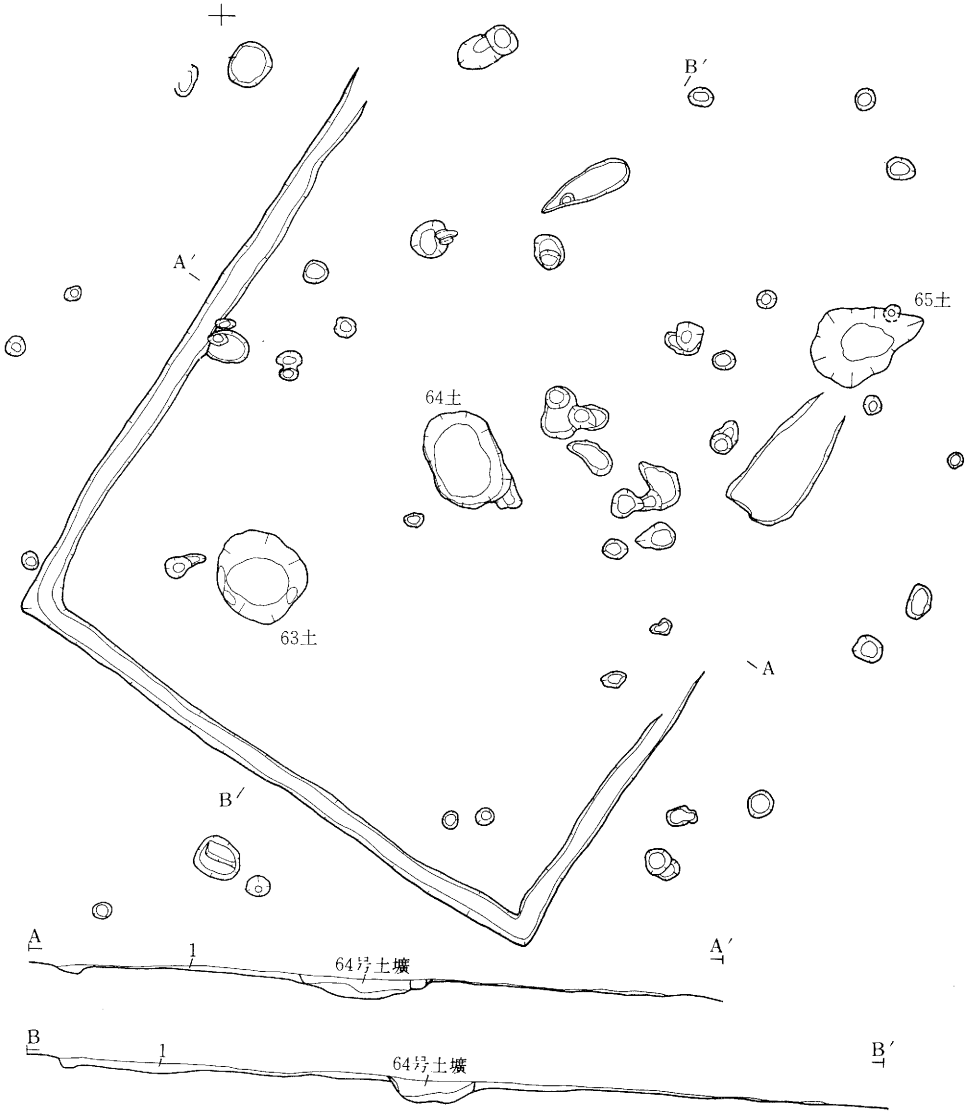
平面形は住居東壁部が削平されているが遺存状況から方形を呈すると考えられる。規模は西辺で約4.9mを計る。北辺と南辺は周溝確認長がそれぞれ約5.1m・2.6mまで計れたが、住居確認時においては北辺で5.9mを計っている。西辺の軸方向はN－17°－Wである。63号・64号・65号土壙と重複関係にあり全てに切られている。

堆積土は褐色の粘土質シルト層を１層確認したのみである。

壁は急な立ち上がりをみせるが、ほとんどが削平を受け周溝のみの残存となっている。周溝幅は約20cmを計り、深さ４～８cmと全体的に浅い。

床面はほぼ平坦でゆるやかに東側へ傾斜をみせる。住居南東部において部分的な貼床がみられたが、全体としては地山を床としている。床面上において多数のピットが検出されたが、柱穴となりうるものは確認されなかった。

遺物は堆積土１層から土師器の破片が少量出土したのみである。図示しえるものはない。



堆積土層観察表

層	土　色	土　性	備　考
1	褐　色　10YR 5/4	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状にふくむ

図11　６号住居跡

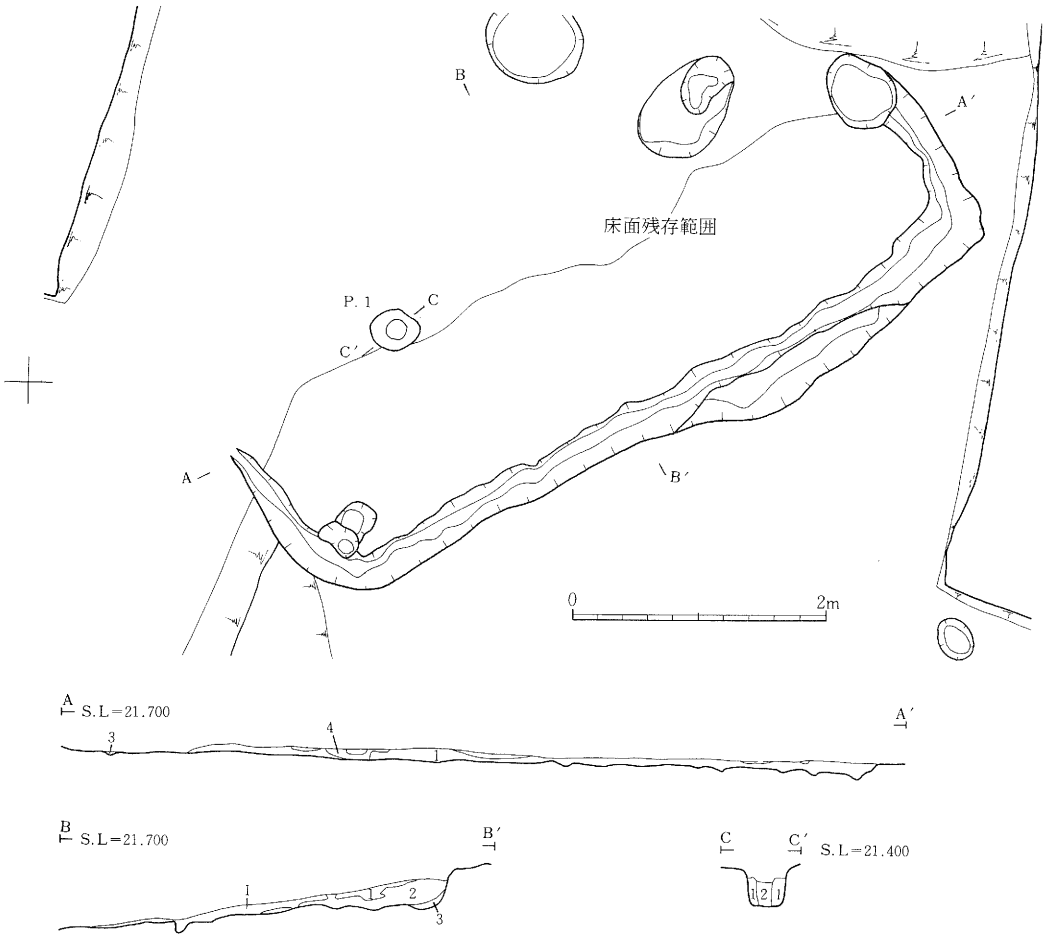
7号住居跡

調査区Ⅱ区、H・I－16・17グリッドで確認した。当箇所は北側へ傾斜をみる地点で、削平のため住居南側部のみの確認である。プラン全体に灰白色の火山灰が検出されている。

平面形は削平のため不明であるが、遺存状況から方形を呈するものと考えられる。規模は南辺で約6mを計る。南辺を基準とした西辺の軸方向はN－9°－Eである。

堆積土は周溝部まで含めて3層確認された。褐色系のシルト層で構成され、全体に細礫がみられる。灰白色の火山灰は1層目にあたる。

壁は周溝底面から急角度で立ち上がり、残存壁高は30cm程である。周溝は壁直下にめぐって



堆積土観察表

層	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色 10YR 5/3	砂質シルト	白色火山灰を含む
2	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	炭化物若干混入
3	褐色 7.5YR 4/4	粘土質シルト	焼土粒若干混入

柱穴埋土観察表（P_1）

層	土色	土性	備考
1	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	
2	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	炭化物若干混入

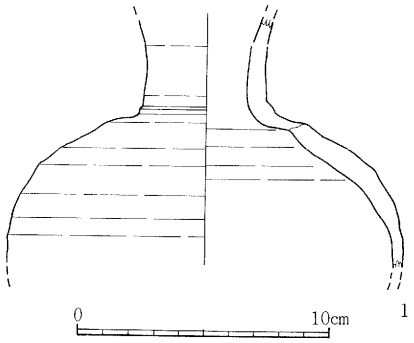
図12　7号住居跡

おり、幅は30cm程で深さは２～９cmと浅い。断面は皿状である。

床面は一部分の残存であるが、床は地山（岩盤）でほぼ平坦であるが凹凸もみられる。貼床の施設は検出されなかった。

柱穴は床面において１基（P.１）確認した。径40cm程の円形の掘り方がみられ、径15cm程の円形の柱痕跡が検出されており深さは30cm程のものである。床面において３個のピットを検出しているが規模・配置から柱穴には断定され得なかった。性格は不明である。

遺物は堆積土中より土師器・須恵器が出土しているが多くは細片となっている。床面より須恵器壺が一点出土している。



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
13－1	須恵器	壺	床面	ロクロ調整	ロクロ調整	——	——	——		

図13　７号住居跡出土土器　（単位：mm）

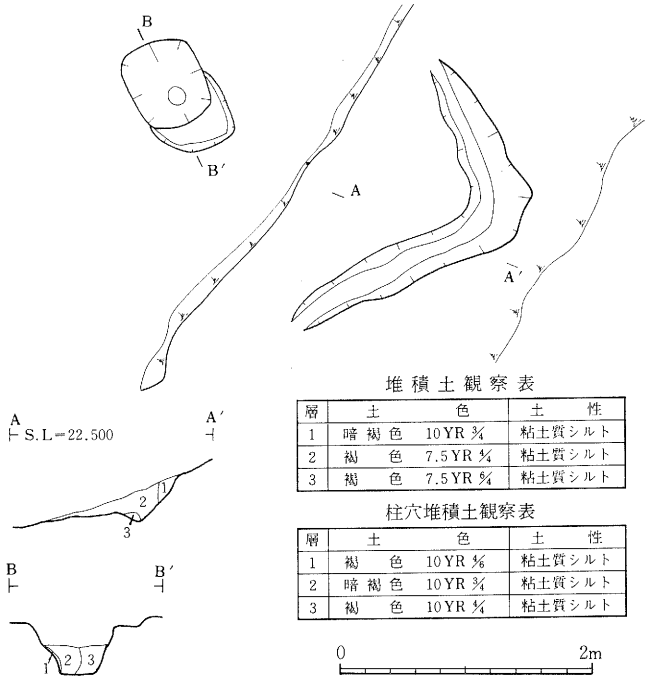
８号住居跡

調査区Ⅱ区、G－15グリッドで確認された。北側へ傾斜をみる位置にあり住居南東部隅のみの残存である。

平面形は遺存状況から方形を呈すると考えられるが規模は不明である。東辺の軸方向はN－10°－Eである。

堆積土は３層まで確認された。褐色系の粘土質シルト層である。

壁はゆるやかな立ち上がりをみせる。壁高は最大で40cm程を計る。周溝は壁残存部のみにみられ深さ８cm程と浅い。



堆積土観察表

層	土色	土性
1	暗褐色 10YR ¾	粘土質シルト
2	褐色 7.5YR ¾	粘土質シルト
3	褐色 7.5YR ⅝	粘土質シルト

柱穴堆積土観察表

層	土色	土性
1	褐色 10YR ⅝	粘土質シルト
2	暗褐色 10YR ¾	粘土質シルト
3	褐色 10YR ¾	粘土質シルト

図14　８号住居跡

床面は削平のため一部分のみの残存である。地山を床としている。

柱穴は１基確認されている。住居南東部隅から北西側約2.5ｍの地点に位置する。柱穴掘り

方は70×60cm程の長方形を呈し、径15cm程の円形の柱痕跡がみられる。深さは50cm程である。

遺物は出土していない。

9号住居跡

調査区Ⅰ区北端部、J・K－14グリッドで確認された。削平を受けており住居南側部の周溝のみの確認にとどまっている。

平面形は遺存状況から方形を呈するものと考えられる。規模は南辺で約4.1mを計る。南辺の軸方向はN－68°－Wである。

堆積土は周溝部のみで暗褐色のシルト層である。

層	土色	土性	備考
1	暗褐色 10YR 3/4	シルト	礫粒を多量に含む

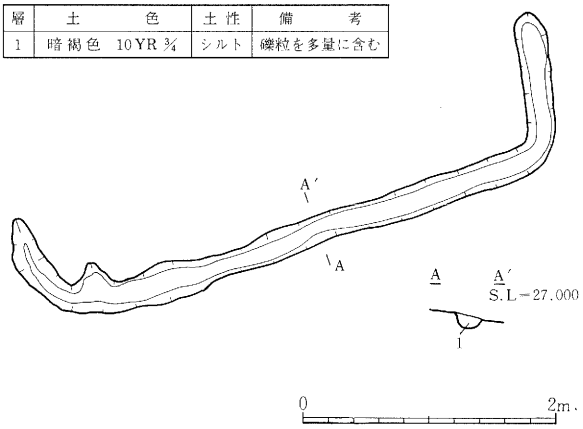


図15　9号住居跡

床面はほぼ平坦であるが北側にゆるやかな傾斜をみる。地山（礫を多く含むシルト層）が床となっており凹凸がみられる。

周溝は幅約20cm、深さ10cm程である。断面形は逆台形を呈している。

遺物は出土していない。

10号住居跡

調査区Ⅲ区、E－20グリッドを中心に確認された。

平面形は東西方向に長い隅丸方形を呈する。規模は長軸で約5.56m・短軸で約3.74mを計る。面積約20.8㎡を有する。東辺の軸方向はN－8°－Eである。57号土壙・58号土壙と重複関係がみられ、両者を切っている。

堆積土は6層確認された。褐色系のシルト層である。

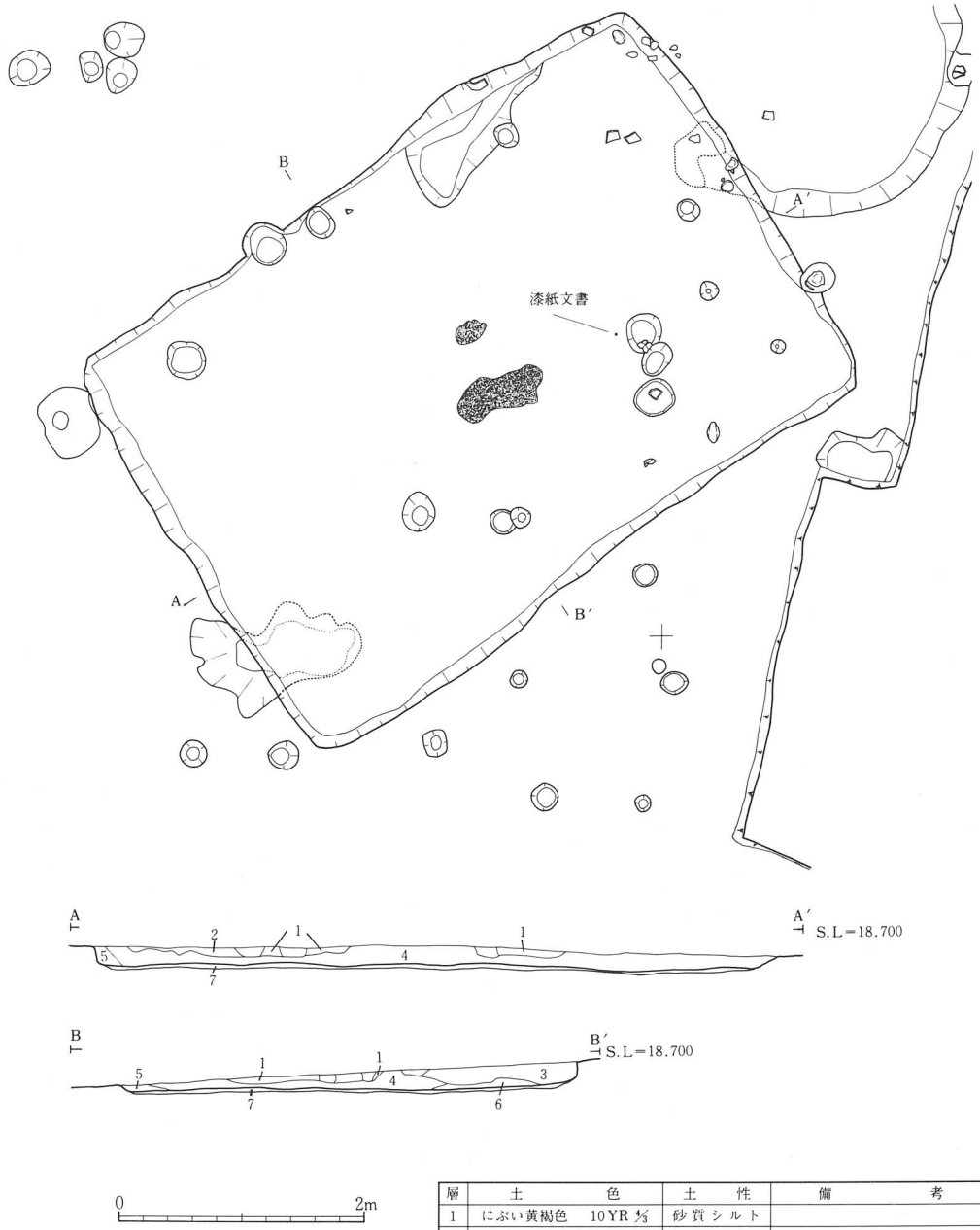
壁は西壁と南壁では急角度で立ち上がるが、東壁と北壁ではなだらかとなっている。壁高は全体的に低く5～10cm程である。周溝は確認されなかった。

床面はほぼ平坦である。床全面に黄褐色土の貼床が2～8cmの厚さで検出されている。住居中央部で床が赤変した箇所を確認している。二ヶ所あり、大きなもので80×30cm程、小さなもので30×20cm程のものである。炉跡とも考えられたが遺存状況もわるく積極的な確証は得られなかった。

ピットは13個検出したが規模・位置関係から柱穴と考えられるものはなかった。性格は不明である。

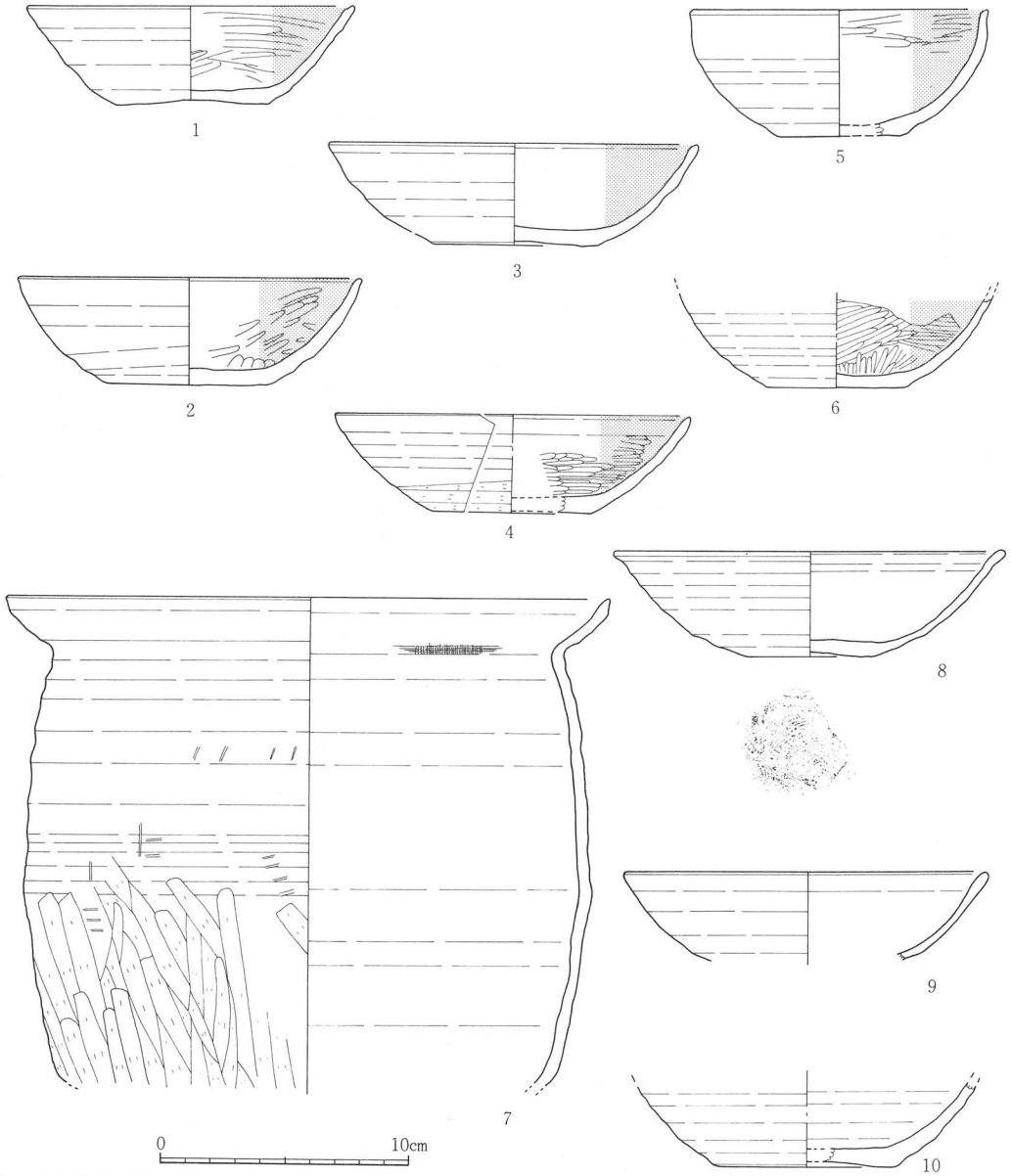
遺物には土師器坏・甕、須恵器坏・甕、平瓦・丸瓦、硯、漆紙文書がある。多くのものは堆

積土中の出土であるが、漆紙文書は土師器坏片内面に付着した状態で床面から出土している。



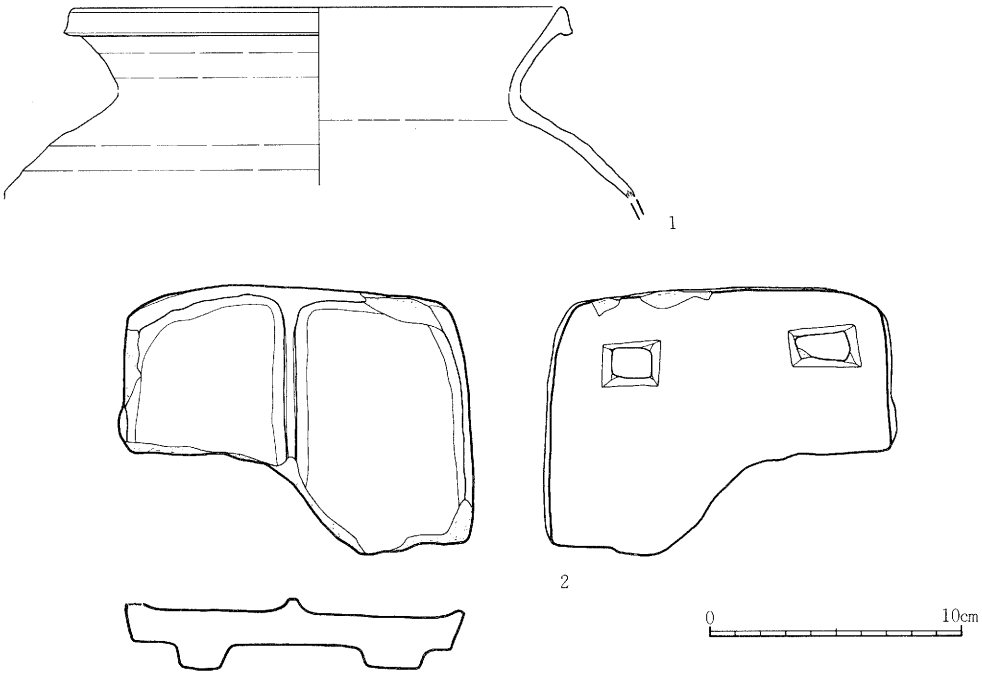
層	土色		土性	備考
1	にぶい黄褐色	10YR 4/3	砂質シルト	
2	灰黄褐色	10YR 4/2	粘土質シルト	
3	にぶい黄褐色	10YR 5/4	砂質シルト	
4	暗褐色	10YR 3/3	粘土質シルト	遺物・炭化物・焼土を含む
5	褐色	10YR 4/4	シルト	
6	灰黄褐色	10YR 4/2	砂質シルト	
7	黄褐色	10YR 5/6	粘土質シルト	(貼床)

図16　10号住居跡



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
17－1	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部－回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	131	60	38	b	
－2	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部－ヘラケズリ？	ヘラミガキ・黒色処理	138	64	44	c	
－3	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部－回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	148	65	42	c	
－4	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部下端～底部－回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	143	63	40	b	
－5	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部－回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	120	49	51	a	
－6	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部－回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	——	56	——		
－7	土師器	甕	埋土	ロクロ調整・タタキ目・体部－ヘラケズリ	ロクロ調整・ナデ	243	——	——	a	
－8	須恵器	坏	埋土	ロクロ調整・底部－回転糸切り	ロクロ調整	157	50	43	b	
－9	須恵器	坏	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	146	——	——		
－10	須恵器	坏	埋土	ロクロ調整・底部－回転糸切り	ロクロ調整	——	71	——		

図17　10号住居跡出土土器Ⅰ　（単位：mm）



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
18－1	須恵器	甕	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	201	――	――		
－2	硯	二面硯	埋土	欠損品・中央部に稜がみられ二面硯と考えられる・裏面には脚が二ヶ残存(貼付)・裏面はケズリが主体						

図18　10号住居跡出土土器・硯Ⅱ　(単位：mm)

11号住居跡

調査区Ⅲ区、D－19グリッドを中心に確認された。

平面形は削平が著しく不明であるが、住居東南部と西辺の一部が残存しており、遺存状況から方形を呈するものと考えられる。規模は不明であるが、残在部分から一辺間約3.4ｍを計ることが可能である。西辺の軸方向はN－1°－Eである。

堆積土は3層確認された。褐色系のシルト層である。

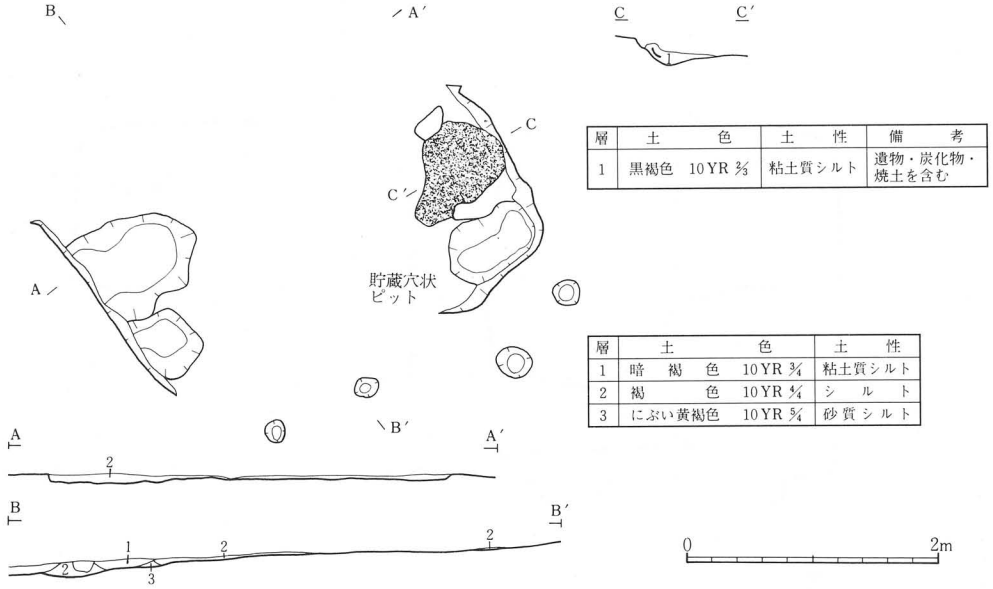
壁は南東部隅と西辺の一部の確認である。壁高は西辺で5～12cm程で南東部で8cm程を計る。ほぼ急角度で立ち上がっている。

床面は削平を受け東壁と西壁にはさまれた部分のみの残存である。ほぼ平坦で地山を床としている。周溝・柱穴は確認されなかった。

住居南東部においてカマドと貯蔵穴状ピットを確認している。カマドは燃焼部のみの確認で煙道部については不明である。地山を削り出して構築されており、わずかに両袖がみられる。底面は焚口部から奥壁に向けて下方に傾斜をみせ壁で急な立ち上がりをみせる。規模は袖部内側で60cmを計り、焼土と炭化物の範囲は90×60cm程を計る。貯蔵穴状ピットはカマド東側に位

置しており、東側と南側は住居壁となっている。平面形は東西に長い不整方形で底面に近づくにつれて長円形を呈する。規模は長軸約 140 cm・短軸約80cmを計る。深さは30cm程である。

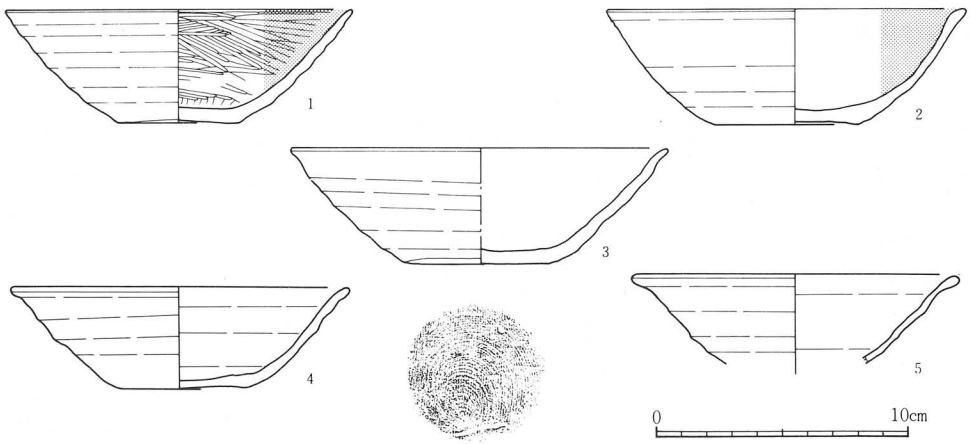
遺物はカマド内より土師器坏・甕、赤焼土器坏、丸瓦が出土しており、貯蔵穴状ピットからも土師器坏が出土している。



層	土色	土性	備考
1	黒褐色 10YR 2/3	粘土質シルト	遺物・炭化物・焼土を含む

層	土色	土性
1	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト
2	褐色 10YR 4/4	シルト
3	にぶい黄褐色 10YR 5/4	砂質シルト

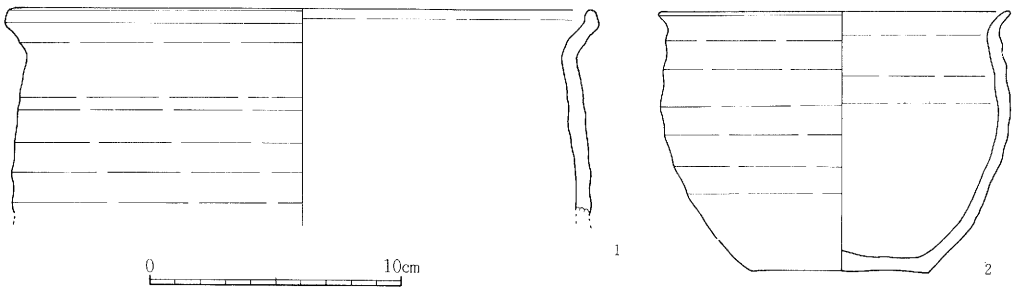
図19 11号住居跡



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
20－1	土師器	坏	貯蔵穴	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	137	48	45	b	
－2	土師器	坏	カマド	ロクロ調整・底部一回転糸切り	(摩滅) 黒色処理	142	55	46	c	
－3	赤焼土器	坏	カマド	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整	(149)	(58)	(46)	b	
－4	赤焼土器	坏	カマド	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整	134	51	41	b	
－5	赤焼土器	坏	カマド	ロクロ調整	ロクロ調整	130	——	——	b?	

図20 11号住居跡出土土器Ⅰ

(単位：mm)



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
21－1	土師器	甕	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	235	——	——	a	
－2	土師器	甕	カマド貯蔵穴	ロクロ調整	ロクロ調整	139	69	103	b	

図21　11号住居跡出土土器Ⅱ　（単位：mm）

12号住居跡

調査区Ⅲ区、D－18グリッドで確認された。北側に傾斜をみる地点にあたる。

平面形は南辺から東西辺が北側へ向けて開き気味になっているが、遺存状態から方形を呈すると考えられる。規模は南辺で約3.4ｍを計り、南北軸で約3.4ｍを計る。西辺の軸方向はN－10°－Wである。4号掘立柱建物跡・33号土壙と重複関係にあり、前者に切られ後者を切っている。

堆積土はカマド部まで含めて16層確認した。褐色系のシルト層で構成されている。

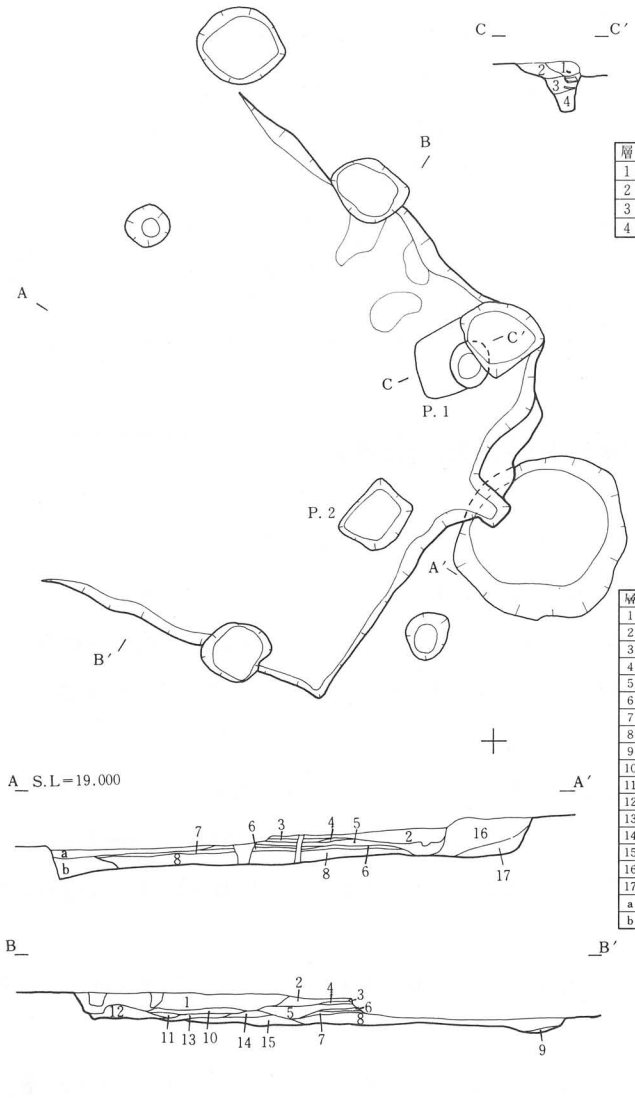
壁は北側を除いて地山が壁となっている。南辺部の残りが一番よく壁高は25cm程を計る。立ち上がりは全体的にゆるい。北側壁は断面観察時に確認されたものでⅢ区遺物包含層を壁面としている。

床面はやや凹凸がみられるがほぼ平坦面である。地山を床としている。周溝・柱穴は確認されなかった。

住居東辺部においてカマドを一基確認した。ほとんど残存しておらず炭化物・焼面の範囲からカマド燃焼部と推定した。煙道部は確認されなかった。カマド部底面はほぼ平坦で奥壁で急な立ち上がりをみせる。

遺物はカマド部・堆積土からの出土で土師器坏・甕、須恵器坏・甕、瓦がある。土師器坏の中には墨書のみられるものがある。

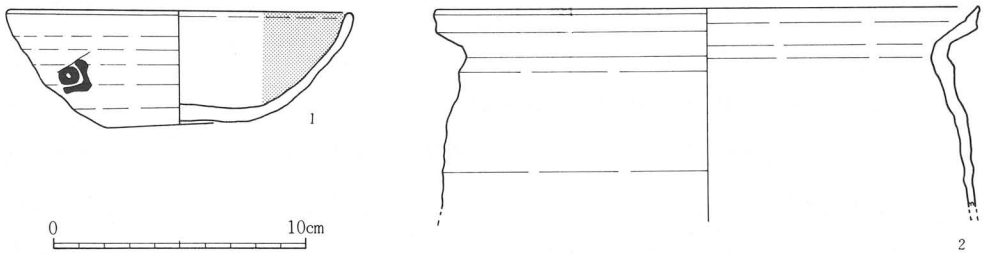
床面においてピット（P.1・P.2）を二基確認している。ピット内よりロクロ不使用の壺が出土している。住居堆積土からはロクロ使用・不使用の土器が混在しているが、カマド部よりはロクロ使用土器片が出土しており住居とピットには時期差が認められる。住居南側堆積土には堆積状況に不整合とも考えられる層理面があり二時期の住居が存在していた可能性も考えられる。規模等は不明である。



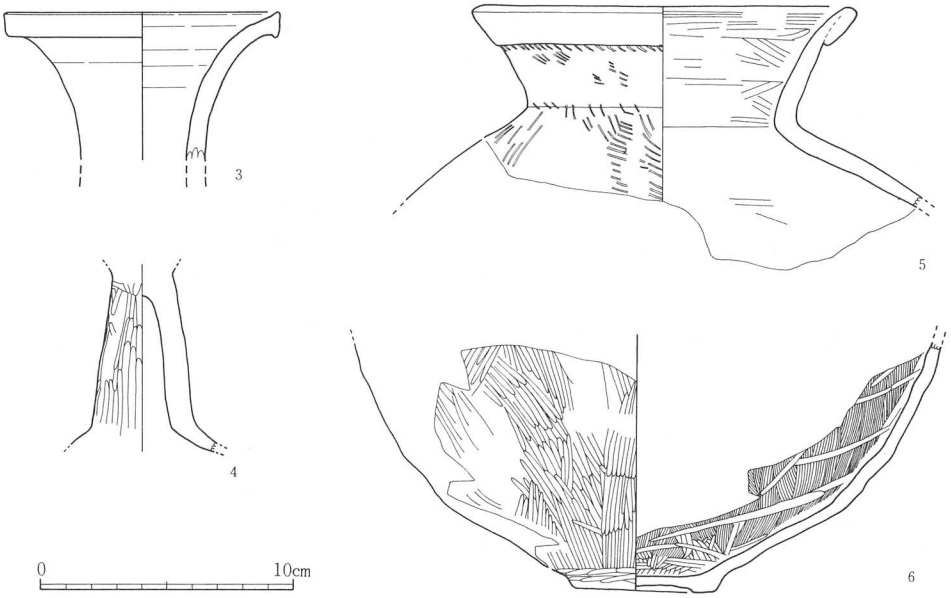
層	土色	土性	備考
1	褐色 7.5YR4/4	シルト	古式土師器片を含む
2	暗褐色 10YR3/3	シルト	〃
3	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	〃
4	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト質粘土	〃

層	土色	土性	備考
1	褐色 7.5YR4/4	シルト	炭化物・焼土を含む
2	暗褐色 10YR3/4	砂質シルト	炭化物を含む
3	褐色 7.5YR5/3	砂質シルト	
4	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	
5	褐色 7.5YR4/4	シルト	
6	暗褐色 7.5YR3/4	砂質シルト	炭化物を含む
7	褐色 10YR4/4	砂質シルト	
8	褐色 7.5YR5/6	砂質シルト	炭化物を含む
9	褐色 10YR4/4	砂質シルト	
10	暗褐色 7.5YR3/4	シルト	炭化物・焼土を含む
11	赤褐色 2.5YR4/6	シルト	炭化物を含む
12	褐色 7.5YR4/4	シルト	炭化物・焼土・土器片を含む
13	褐色 10YR4/6	シルト	焼土を含む
14	暗褐色 10YR3/4	シルト	炭化物・焼土を含む
15	褐色 10YR4/4	シルト	炭化物を含む
16	褐色 10YR4/4	砂質シルト	
17	褐色 10YR4/4	砂質シルト	黄褐色土を含む
a	暗褐色 10YR3/4	シルト	包含層堆積土
b	暗褐色 10YR3/4	シルト	〃

図22 12号住居跡



12号住居跡出土土器Ⅰ



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
23－1	土師器	坏	埋土	ロクロ調整	(磨滅)　黒色処理	138	56	45	c	
－2	土師器	甕	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	216	―	―	a	
－3	須恵器	壺	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	109	―	―		
－4	土師器	高坏	埋土	ヘラミガキ	不明	―	―	―	b	
－5	土師器	壺	埋土	ハケ目・浅いヘラミガキ？	ハケ目	151	―	―		複合口縁
－6	土師器	壺	Pit	ヘラミガキ	ナデ・ミガキ	―	57	―		pit.1

図23　12号住居跡出土土器Ⅰ・Ⅱ　(単位：mm)

14号住居跡

調査区Ⅴ区17トレンチ、K・L－17グリッドで確認された。北側へ傾斜がみられ、住居北壁部は遺存しない。

平面形は住居北側部が失なわれているが遺存状況から方形を呈すると考えられる。規模は南辺で約3.1ｍを計り、東辺と西辺はそれぞれ約2.7ｍ・2.8ｍまで計れた。西辺の軸方向はN－8°－Eである。1号掘立柱建物跡と重複関係にあり切られている。プラン全体に灰白色の火山灰が検出された。

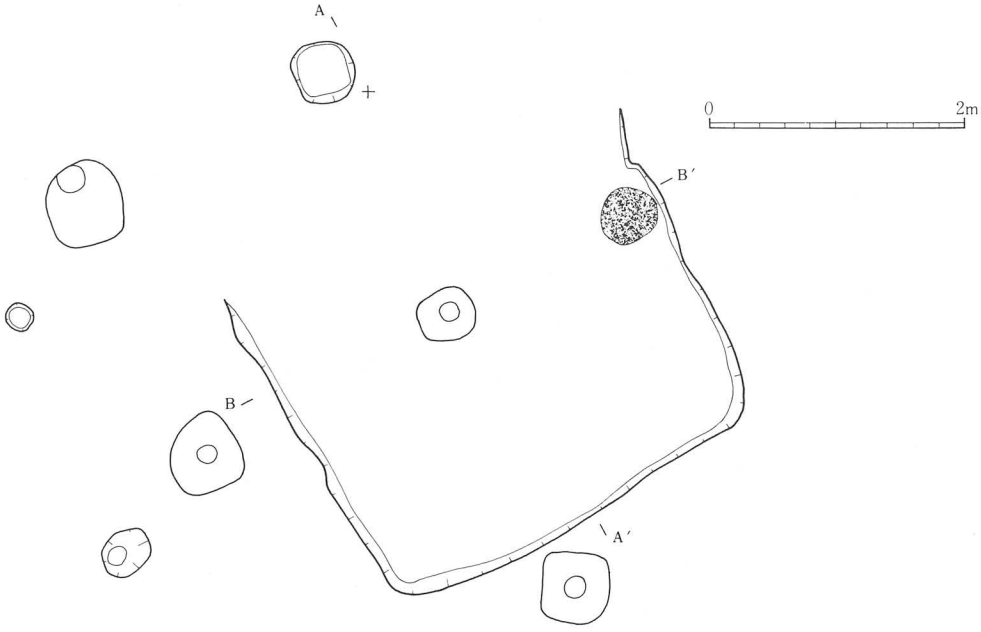
堆積土はカマド部まで含めて6層確認されている。暗褐色系のシルト層で構成されており、全体に細礫が含まれている。灰白色の火山灰は1層目にあたる。

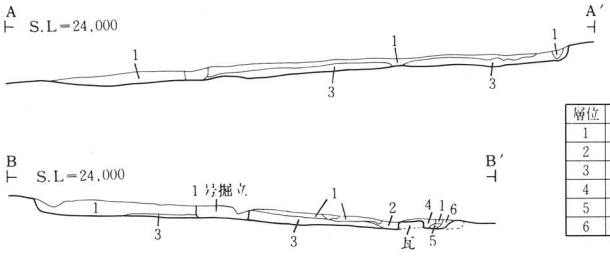
壁は急な立ち上がりをみせる。壁高は10～20cm程の残存である。周溝は確認されなかった。

床面は全体に平坦で、かすかに北側へ傾斜をみる。地山を床としている。柱穴は確認されなかった。

住居東壁部においてカマドと考えられる施設を１基確認した。壁直下において40×50cm程の円形を呈する赤褐色土が残存していた。袖部等は遺存していないが底面は壁に向かって皿状に立ち上がっている。赤褐色土上面において瓦が出土している。

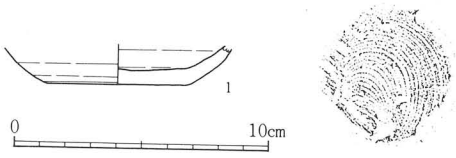
遺物には土師器坏、赤焼土器、平瓦がある。瓦を除いて全て堆積土中の出土で、ほとんどが細片となっている。





層位	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色　10YR3/4	シルト	火山灰・礫粒・炭化物を含む
2	黒褐色　10YR2/2	シルト	炭・焼土を含む
3	褐　色　10YR4/4	砂質シルト	径1～2cm大の礫・炭化物を含む
4	暗褐色　10YR3/3	シルト	礫粒・炭・焼土を含む
5	赤褐色　5YR5/8	シルト	
6	暗赤褐色　5YR3/4	シルト	礫粒を含む

図24　14号住居跡



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
25－1	赤焼土器	坏	埋土	ロクロ調整・底部－ヘラ切り	ロクロ調整	——	55	——		

図25　14号住居跡出土土器

（単位：mm）

（2）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡（以下、建物跡）は5棟確認されている。Ⅰ区の台地上に1棟、Ⅴ区の台地東側周縁部に1棟、Ⅲ区の台地北側周縁部に3棟である。ほとんどの建物跡が傾斜面に位置しており、建物跡間の規則性のみられるものもある。

1号建物跡

調査区Ⅴ区17トレンチ、K－17グリッドを中心に確認された。当箇所は北側へ傾斜をみる地点で北側へ厚く堆積土が覆っている。確認面は北側で凝灰岩の岩盤（地山）であるが、南側は堆積土9層（灰白色の火山灰を含む褐色土層）上面となっている。柱穴の北側部と南側部での

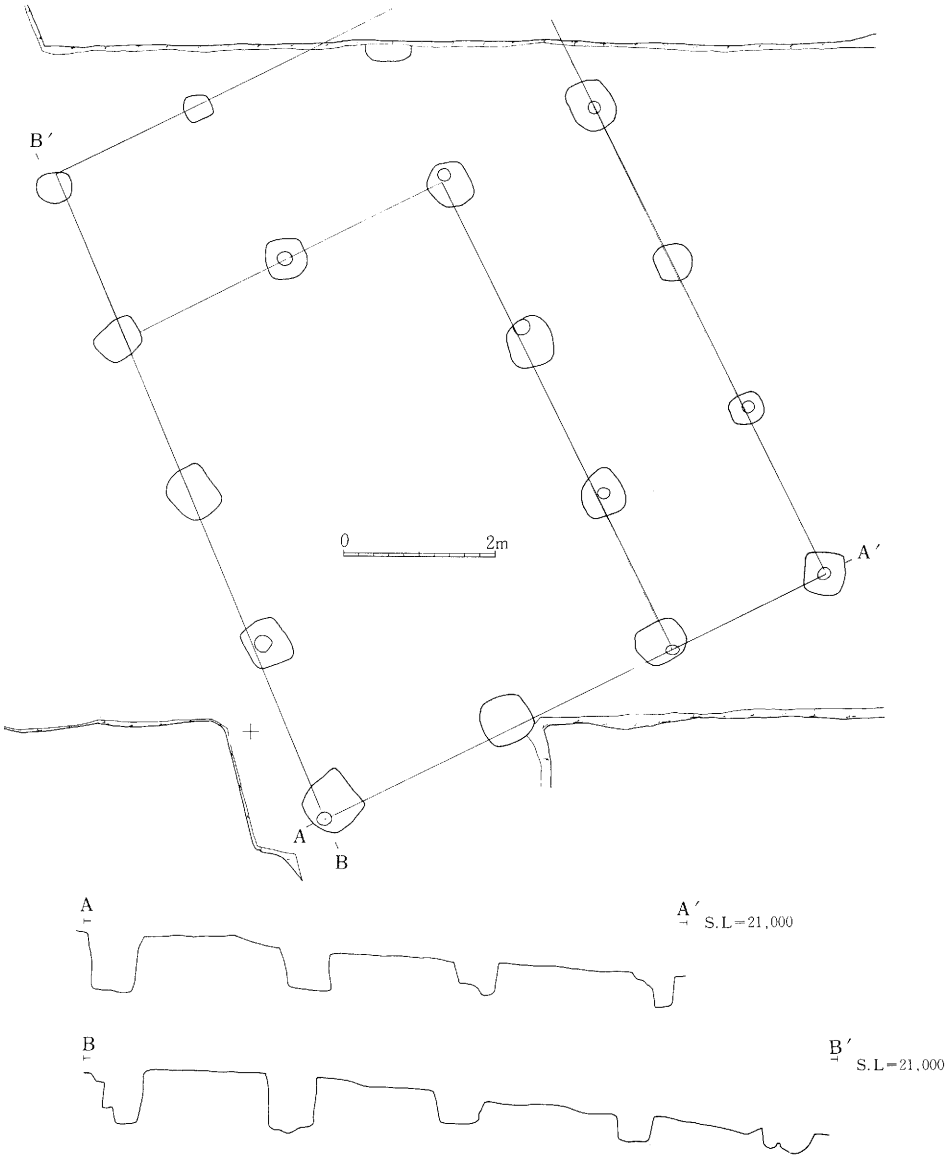


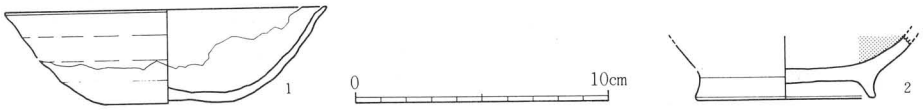
図26　1号建物跡

標高差は１ｍ程ある。14号住居跡と重複関係にあり切っている。

全ての柱穴は確認されなかったが、桁行４間・梁行３間の北側と東側に間仕切りまたは廂をもつ南北棟の建物跡である。建物方向は桁東側でＮ－14°－Ｅである。

柱穴掘り方は方形を基調としており、径35～70cmとさまざまである。柱痕跡は10個確認され、径15～22cm程の円形を呈する。深さは北側妻部分で70cm程を計るものがある。柱間寸法は桁西側で北から670（３間分）＋245 cmで総長915 cmを計り、梁南妻で西から510（２間分）＋225 cmで総長735 cmを計る。

遺物は柱穴埋土より土師器片・須恵器片・赤焼土器坏が出土している。



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
27－1	赤焼土器	坏	P.4	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整	127	50	37	b	
－2	土師器	高台付坏	P.13	ロクロ調整	(摩滅)　黒色処理	——	(高台)71	——		

図27　11号建物跡出土土器　(単位：mm)

２号建物跡

調査区Ⅲ区、Ｅ－18グリッドを中心に確認された。北西側へ傾斜をみる位置に所在しており、柱穴北側部と南側部では40cm程の標高差がある。

梁南妻中央部の柱穴が検出されなかったが、桁行２間・梁行２間の南北棟の建物跡である。建物方向は桁東側でＮ－５°－Ｅである。

柱穴掘り方は方形を基調とするが、ややくずれ気味の円形を呈している。径40～70cm程のものである。柱痕跡は６個確認され、径10～15cmの円形である。遺存状態の良好なもので深さ30cmを計る。柱間寸法は桁東側で北から198＋182cmで総長380 cmを計り、梁北妻で西から174＋170cmで総長344 cmを計る。土師器片が若干出土している。

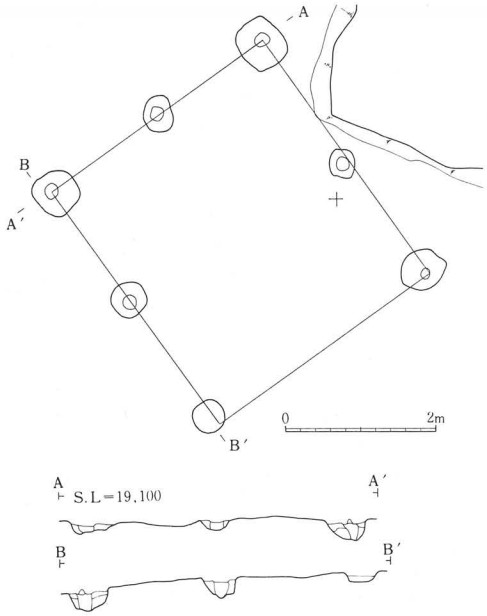


図28　２号建物跡

３号建物跡

調査区Ⅲ区、Ｄ－20グリッドを中心に確認された。北西側へ傾斜をみる地点にあたり、柱穴北側部と南側部では60cm程の標高差がみられる。

梁北妻中央部の柱穴が検出されなかったが、桁行３間・梁行２間の南北棟の建物跡である。建物方向は桁東側でN－５°－Eである。

柱穴掘り方は方形を基調とするが、不整方形を呈し円形気味である。径35～55cm程で小形のものである。柱痕跡は全てにみられ、径10～20cmの円形である。深さは遺存状態の良好なもので40cmを計る。柱間寸法は桁東側で北から150＋130＋150cmで総長430cm、西側では北から148＋140＋144cmで総長432cm、梁南妻で西から182＋187cmで総長369cm、北妻では総長376cmを計る。

遺物は柱穴埋土より土師器片が出土している。

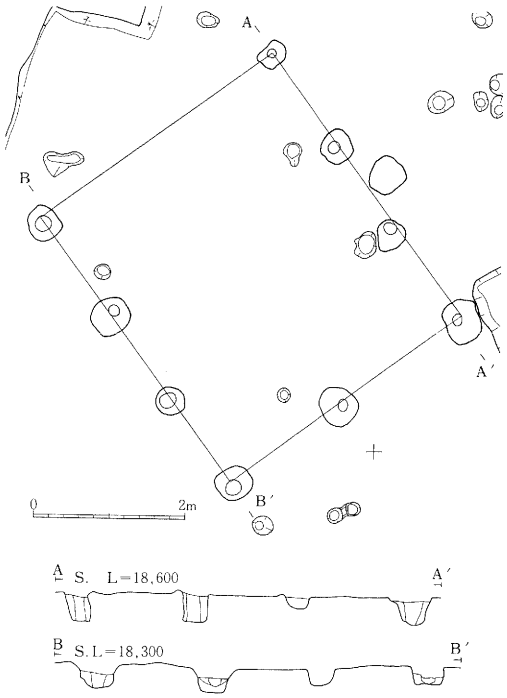


図29　３号建物跡

４号建物跡

調査区Ⅲ区、D－18グリッドを中心に確認された。北側部を中心として削平を受けており、東側南北列で２間、南側東西列で３間を確認したのみで全体的規模は不明である。建物方向はN－２°～７°－Wの範囲と考えられる。12号住居跡と重複関係にあり切っている。

柱穴掘り方は方形を基調としている。最大のもので63×62cm、最小のもので48×45cmを計る。柱痕跡は確認されなかった。柱穴中心部間の寸法は東側南北列で北から155cm＋155cmを計り、南側東西列は西より145＋155＋180cmを計る。

遺物は柱穴埋土より土師器の細片が出土している。

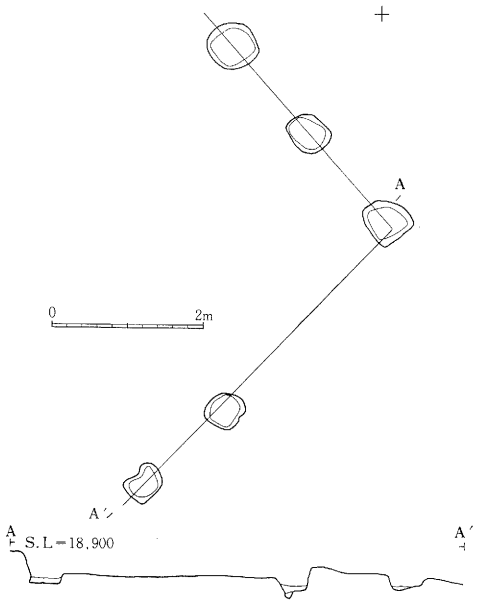


図30　４号建物跡

５号建物跡

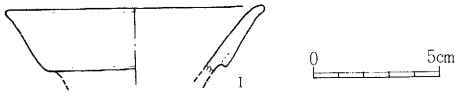
調査区Ⅰ区、J－５・６グリッドで確認された。

桁行２間・梁行１間の南北棟の建物跡である。建物方向は桁西側でN－19°－Wである。

柱穴掘り方は円形を基調としている。径40cm程の小形のものである。柱痕跡は２個確認され

径10～15cmの円形で深さ25cm程を計る。柱間寸法は桁西側の北半のみが計測され193 cmを計る。柱穴中心部間の寸法でみると、桁西側で193＋162cm、梁北妻で368cmを計る。

遺物は柱穴埋土より土師器壺が出土している。



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
31－1	土師器	壺	柱穴	不明	不明	(101)	—	—		複合口縁

図31　5号建物跡出土土器　（単位：mm）

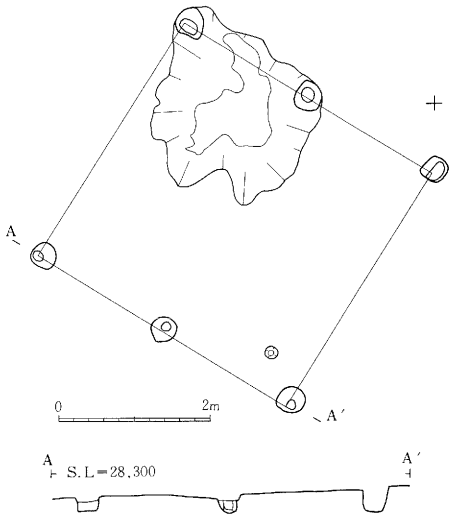


図32　5号建物跡

（3）方形周溝遺構

調査区Ⅰ区、J・K－11・12グリッドで確認された。四方に巡ぐる溝部と溝内側の台状部と台状部内の土壙で構成されている。

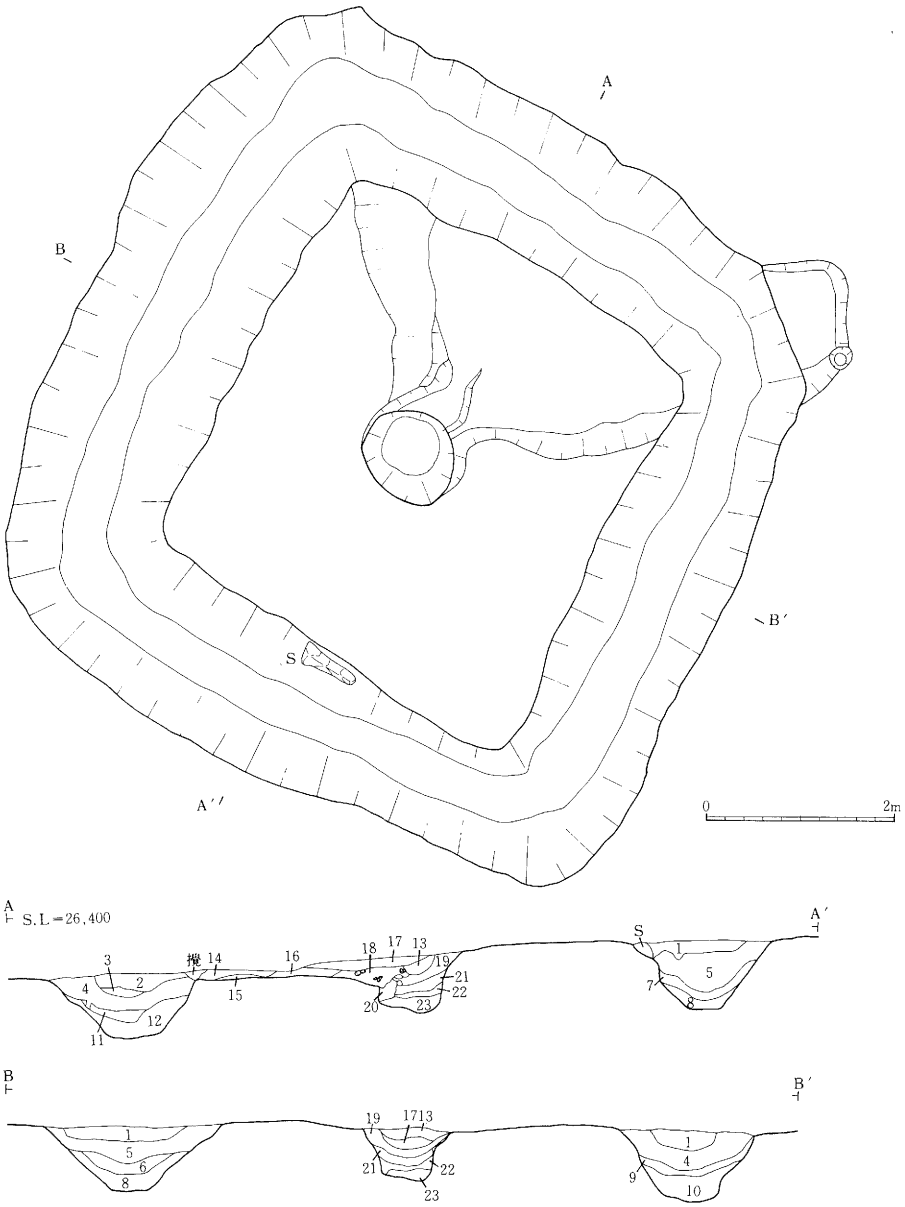
平面形は全体として隅丸方形を呈する。長軸は東－西ラインで約7.65 m、短軸は南－北ラインで約7.5 mを計る。溝東辺の方向はN－20°－Eである。

溝部の各辺の規模は、北辺約7.7 m・南辺約7.2 m・東辺約7.0 m・西辺約7.0 mを計る。幅は1.1～1.8 mで、深さは50～70cmを計る。断面形は逆台形を呈する。堆積土は12層に分かれ、上層部は黒褐色系の粘土質シルト層、下層部は褐色系の砂質シルト層である。レンズ状堆積を呈している。溝底面はほぼ平坦であるが、西側から東側へ傾斜がみられ北高差は約40cmを計る。

台状部の平面も隅丸方形を呈しており、長軸（東－西ライン）で約4.7 m・短軸（北－南ライン）で約4.3 mを計る。台状部面積は約20.2㎡を有する。台状部面は平坦であるが、土壙東側のみ扇形の凹面となっている。

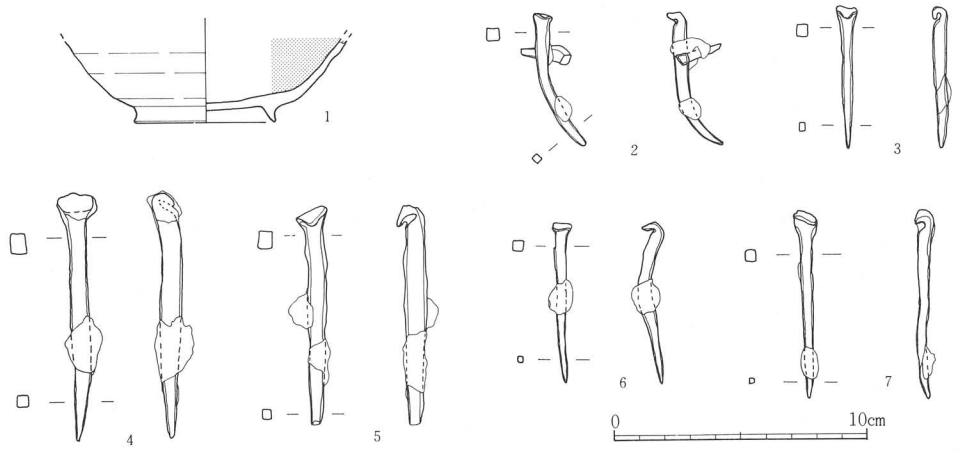
土壙は台状部中央に位置している。平面形は径90cm程の不整円形を呈する。断面形は逆台形を呈するが土壙東側は凹面のため30cm程の段差がみられる。底面は若干北側に傾斜をみるがほぼ平坦となっている。深さは最大で65cmを計る。堆積土は周溝部接点までで11層確認したが、周溝部との前後関係は明らかに出来なかった。

遺物は周溝部のみの出土で全て堆積土中からのものである。種類として土師器、須恵器、瓦、鉄釘があり、多くのものは細片となって出土している。



層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	黒褐色 10YR 2/3	粘土質シルト	遺物若干混入	13	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	小石若干混入
2	暗褐色 10YR 3/3	粘土質シルト	石若干混入	14	褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	
3	褐色 10YR 5/4	粘土質シルト		15	褐色 10YR 5/4	砂質シルト	凝灰岩を粒状に含む
4	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	石若干混入・暗褐色7.5YRをブロック状に含む	16	褐色 10YR 5/4	砂質シルト	4cm大の小石を含む
5	褐色 10YR 5/6	砂質シルト	極小石を多く含む・炭若干混入・遺物若干混入	17	褐色 10YR 5/6	砂質シルト	小石若干混入
6	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	小石混入	18	褐色 10YR 5/4	砂質シルト	礫を含む
7	褐色 7.5YR5/6	砂質シルト	極小石混入	19	褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	
8	褐色 10YR 5/6	砂質シルト	4cm前後の石混入	20	褐色 10YR 5/4	砂質シルト	礫粒を少量含む
9	黄褐色 10YR 5/6	砂質シルト		21	黄褐色 10YR 5/8	シルト質砂	礫片・礫粒を多く含む
10	褐色 10YR 5/6	砂質シルト	遺物若干混入	22	褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	
11	褐色 10YR 5/6	砂質シルト	遺物若干混入	23	褐色 10YR 5/4	砂	多量の礫を含む
12	黄褐色 10YR 5/6	砂質シルト	石若干混入				

図33　方形周溝遺構



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
34－1	土師器	高台付坏	埋土	ロクロ調整	(摩滅)　黒色処理	——	(高台)55	——		
2～7	鉄製品	釘	埋土	長さ65～95mm程・断面は方形・釘の頂部を屈曲させ頭としている						

図34　方形周溝遺構出土土器・鉄釘

(単位：mm)

(4) 土壙

調査区全体で計65基の土壙が確認された。土壙底面に焼け面がみられるものや一括遺物を出土したものなどがあるが、全体的に出土遺物も少なく、性格が判明されたものはない。便宜的に形状から円形・楕円形・方形・不整形に分けた。検出状況・出土遺物に特徴の認められるものについて記述する。

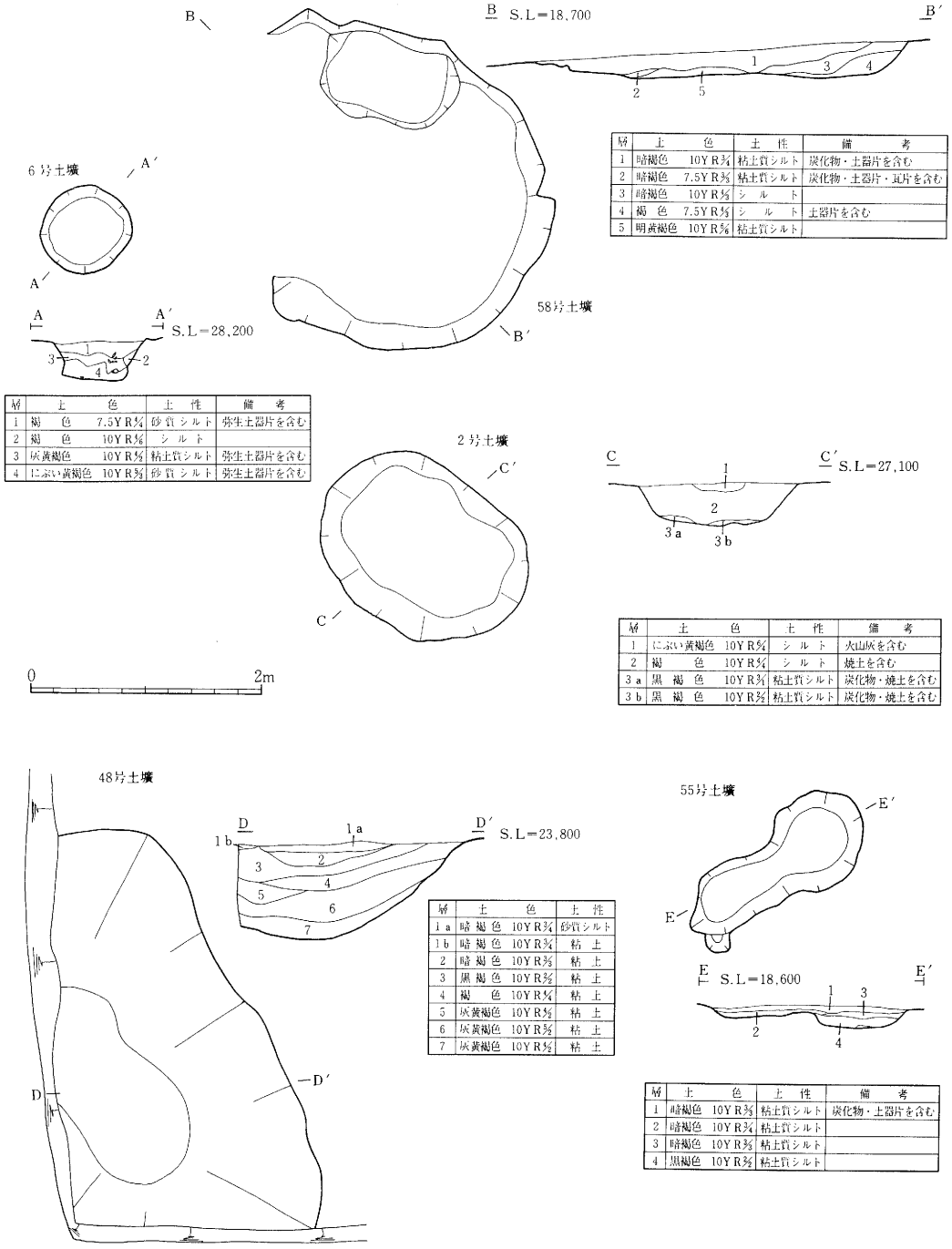
2号土壙：J・K－10グリッドで確認した。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸170 cm、短軸100 cm、深さ38cmを計る。断面は大きくU字形を呈するが、底面と壁面の境が鋭角になっている。底面は隅丸の長方形を呈する。堆積土は3層確認され、褐色のシルト層である。上層で灰白色火山灰が検出されている。下層では炭化物・焼土がみられ、底面は全面に焼け面がみられた。

6号土壙：K－5グリッドで確認された。平面形はやや歪んだ円形を呈する。径78cm、深さ35cmを計る。断面は壁中段がせり出しており、フラスコ形を呈する。堆積土は4層確認され、褐色系のシルト層である。遺物として弥生土器片・炭化物が出土している。

55号土壙：F－20・21グリッドで確認した。平面形は円形と方形の合体形をしており不整形を呈している。規模は長軸で178 cm、深さ20cmを計る。円形部と方形部では底面で段が形成されている。断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は4層確認され、暗褐色系の粘土質シルト層である。堆積土・底面より土師器坏・甕、須恵器片が出土している。

58号土壙：F－20・21グリッドで確認した。10号住居跡と重複関係にあり切られている。平

面形は円形を呈する。規模は径 280 cm、深さ30cm程を計る。壁はゆるい立ち上がりをみせ、北壁部に接して 120 ×75cm程の方形の落ち込みがみられる。堆積土は 5 層確認され褐色系のシルト層である。焼土・炭化物粒が全ての層にみられる。出土遺物には土師器・瓦片がある。



層	土色	土性	備考
1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	炭化物・土器片を含む
2	暗褐色 7.5YR3/3	粘土質シルト	炭化物・土器片・瓦片を含む
3	暗褐色 10YR3/3	シルト	
4	褐色 7.5YR3/3	シルト	土器片を含む
5	明黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	

層	土色	土性	備考
1	褐色 7.5YR4/4	砂質シルト	弥生土器片を含む
2	褐色 10YR5/6	シルト	
3	灰黄褐色 10YR5/3	粘土質シルト	弥生土器片を含む
4	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	弥生土器片を含む

層	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	火山灰を含む
2	褐色 10YR4/4	シルト	焼土を含む
3a	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	炭化物・焼土を含む
3b	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	炭化物・焼土を含む

層	土色	土性
1a	暗褐色 10YR3/4	砂質シルト
1b	暗褐色 10YR3/4	粘土
2	暗褐色 10YR3/3	粘土
3	黒褐色 10YR3/2	粘土
4	褐色 10YR4/4	粘土
5	灰黄褐色 10YR5/2	粘土
6	灰黄褐色 10YR5/2	粘土
7	灰黄褐色 10YR5/2	粘土

層	土色	土性	備考
1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	炭化物・土器片を含む
2	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	
3	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	
4	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	

図35 各土壌平面図

円形を呈する土壙

	地　区	規　　模	備　　考		地　区	規　　模	備　　考
4号	J－11	160 × 14		33号	E－18	130 × 45	
5号	L－12	130 × 19	炭化物・焼土	37号	R－6	100 × 11	
6号	K－5	78 × 35	弥生土器・礫・炭化物	44号	R－7	80 × 30	
8号	K－6	80 × 32	炭化物	47号	P－10	140 × 35	
9号	H－7	70 × 12	炭化物	53号	O－16	85 × 52	
10号	N－7	170 × 30	炭化物	56号	I－3	――	
12号	M－10	88 × 25		58号	F－20	280 × 30	土師器
29号	H－17	80 × 14		63号	L－7	76 × 20	焼土・炭化物

楕円形を呈する土壙

	地　区	規　　模	備　　考		地　区	規　　模	備　　考
1号	J－10	350×107×12		30号	H－17	90× 60×28	
2号	J－10	170×100×38	灰白色火山灰・焼面	34号	F－19	――	
15号	J－9	114× 75× 6	炭化物	35号	Q－6	――	
16号	K－10	70× 50×15		36号	R－5	100× 50×20	
17号	J－10	205× 75×30	炭化物	45号	P－9	380×100×26	
19号	L－13	185× 50×35		46号	Q－9	210×100×29	
20号	K－13	105× 70×20		48号	Q－12	―― ×85	灰白色火山灰・土器
21号	K－13	140× 75×25		49号	O－12	――	
23号	J－14	――		65号	L－7	98× 60×18	
28号	J－14	90× 70×20					

方形を呈する土壙

	地　区	規　　模	備　　考		地　区	規　　模	備　　考
3号	K－10	150× 60×24		31号	D－17	――	
7号	K－7	90× 70×25	灰白色火山灰・焼土	50号	O－12	――	
11号	N－10	80× 65×10	炭化物	54号	J－18	70× 60×20	炭化物・焼土
13号	I－4	122× 85×14	炭化物・焼土	59号	I－18	――	
22号	K－14	――		60号	H－7	――	

不整形を呈する土壙

	地　区	規　　模	備　　考		地　区	規　　模	備　　考
14号	J－6	220×220×35		41号	Q－7	――	
18号	I－11	130× 90×22	炭化物	42号	Q－7	180× 80×21	
24号	I－14	280× 60×40		43号	R－7	130× 60×20	
25号	J－9	170×110×10		51号	P－12	90× 40×20	
26号	I－14	―― ×11		52号	P－12	250×115×22	
27号	I－14	290×100×35		55号	F－20	180× 50×20	土師器・須恵器
32号	D－18	100× 60×33		57号	E－19	140× 70×34	
38号	P－7	280× 60×12		61号	I－4	280×270×20	
39号	P－7	200× 60×19		62号	H－4	450×230×25	
40号	Q－7	――		64号	L－7	80× 55×24	

表2　発見土壙一覧　　(単位：cm)

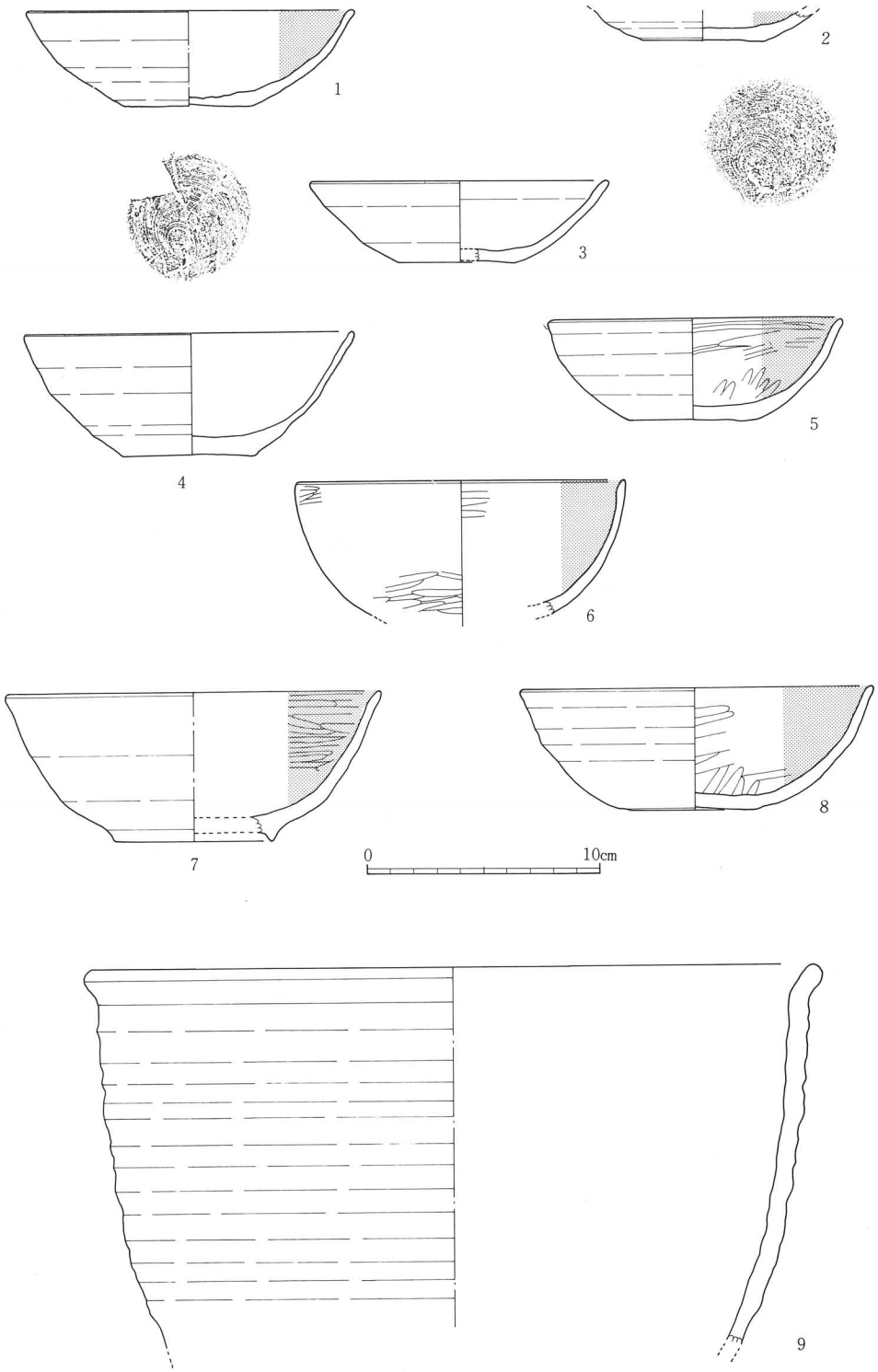
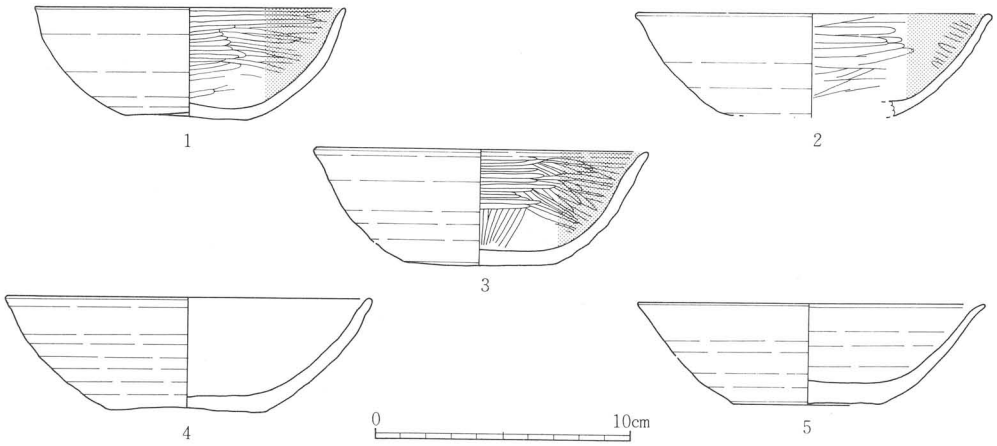


図36　48号・55号土壙出土土器Ⅰ



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
36－1	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部－回転糸切り	(摩滅)　黒色処理	(141)	(55)	(41)	c	48号土壙
－2	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部－回転糸切り	(摩滅)　黒色処理	——	52	——		48号土壙
－3	赤焼土器	坏	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	128	49	35	b	48号土壙
－4	赤焼土器	坏	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	141	58	53	c	48号土壙
－5	土師器	坏	埋土	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	126	56	43	a	55号土壙
－6	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	141	——	——		55号土壙
－7	土師器	高台付坏	埋土	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	(162)	(高台)(68)	64		55号土壙
－8	土師器	高台付坏	埋土	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	151	57	53	c	55号土壙
－9	土師器	鉢	底面	ロクロ調整	ロクロ調整	315	——	——		55号土壙
37－1	土師器	坏	埋土	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	122	48	43	a	55号土壙
－2	土師器	坏	埋土	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	140	——	——		55号土壙
－3	土師器	坏	埋土	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	131	60	46	a	58号土壙
－4	赤焼土器	坏	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	144	63	44	c	58号土壙
－5	赤焼土器	坏	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	136	59	40	b	58号土壙

図37　55号・58号土壙出土土器Ⅱ　(単位：mm)

(5) 溝跡・溝状遺構

調査区全体で合計22条の溝跡・溝状遺構を確認した。これらの中で溝跡は8条、溝状遺構は14条をかぞえる。

溝跡としたものは幅等がある程度一定しているものにした。全体的に規模も小さく、確認長の短かいものが多い。溝跡間の関連はみられない。遺物の出土も少なく、住居跡・建物跡との関連性もみられなく時期・性格は不明となっている。

溝状遺構は上記以外のもので、平面形・断面形は不整形を呈している。他の遺構との関連はみられない。出土遺物は全体的に少ないが、緑釉陶器が出土する遺構もある。

溝　跡

	地　区	長　さ	幅	深　さ	断　面	備　　考
9 号	E－17	300	50	10	Ⅲ	
11 号	K－4	800	26	6	U　字	
15 号	P－5	900	40	6	Ⅲ	
16 号	O－16	630	48	7	U　字	
17 号	O－14	600	36	8	U　字	
18 号	P－14	80	40	8	U　字	
19 号	P－14	500	68	8	U　字	
20 号	P－14	400	56	17	U　字	

溝状遺構

	地　区	長　さ	幅	深　さ	断　面	備　　考
1 号	M－7	1,320	244	30	Ⅲ	
2 号	J－6	260	92	12	逆台形	
3 号	I－8	400	84	35	Ⅲ	
4 号	L－12	1,800	120	30	逆台形	
5 号	J－7	900	170	7	Ⅲ	
6 号	J－14	530	96	40	逆台形	
7 号	J－14	200	34	10	U　字	
8 号	C－18	430	84	12	Ⅲ	
10 号	F－21	530	75	20	Ⅲ	
12 号	L－6	500	106	30	Ⅲ	
13 号	I－9	200	30	16	U　字	
14 号	I－10	200	40	23	U　字	
21 号	M－18	700	400	120	U　字	灰白色火山灰を含む
22 号	M－11	660	90	8	Ⅲ	

表3　溝跡・溝状遺構一覧　　(単位：cm)

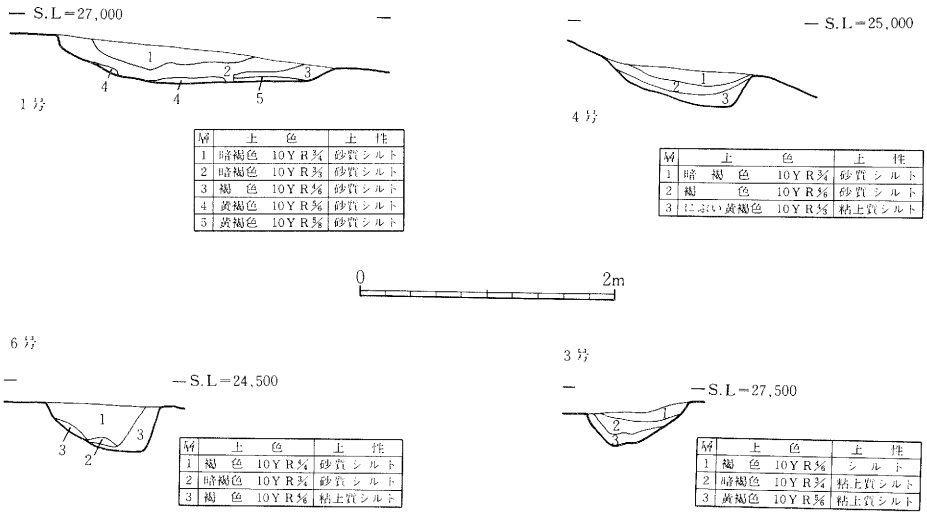
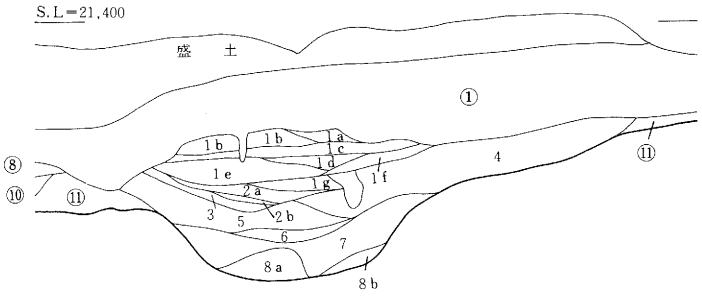


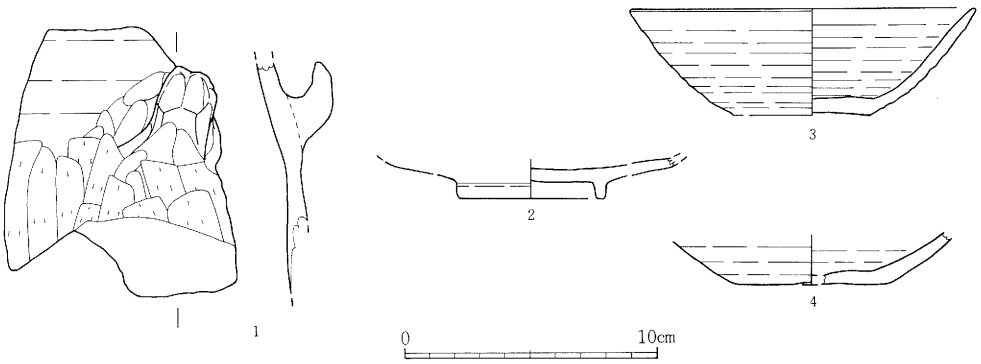
図38　溝跡・溝状遺構断面図



層	土色		土性
1a	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト
1b	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト
1c	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト
1d	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト
1e	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト
1f	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト
1g	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト
2a	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト
2b	黒褐色	7.5YR3/2	粘土質シルト
3	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト
4	褐色	10YR4/6	粘土質シルト
5	褐色	7.5YR4/4	粘土質シルト
6	褐色	7.5YR4/6	砂質シルト
7	にぶい黄褐色	10YR5/4	粘土質シルト
8a	褐色	10YR4/6	砂質シルト
8b	褐色	10YR4/4	粘土質シルト

0　2m

図39　21号溝跡断面図



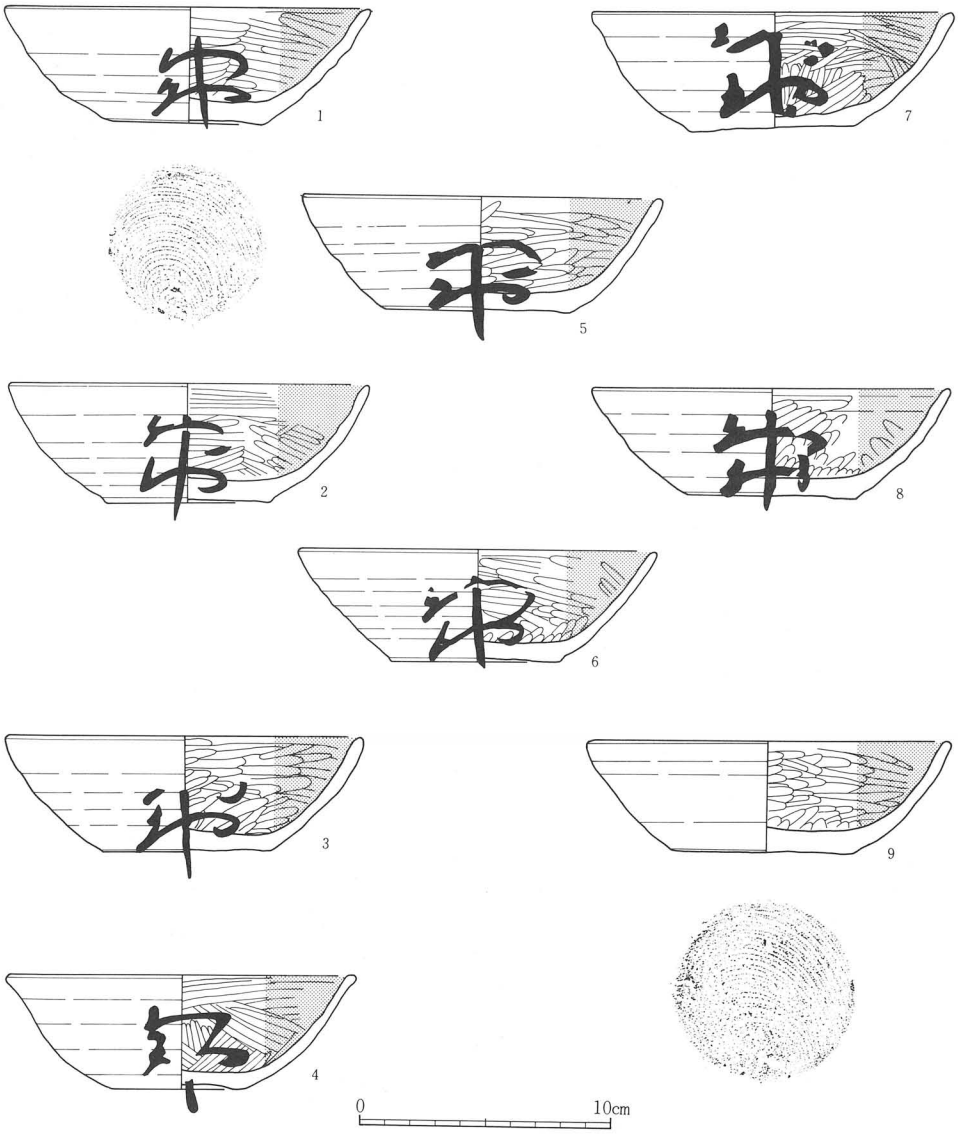
図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	金類	備考
40－1	土師器	甑？	埋土	ロクロ調整・ナデ・ケズリ	ロクロ調整	——	——	——		把手付
－2	緑釉陶器	皿	埋土	ロクロ調整・緑系のオリーブ色の釉	ロクロ調整・緑系のオリーブ色の釉	——	(高台)5.9	——		
－3	須恵器	坏	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	136	54	42	c	
－4	赤焼土器	坏	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	——	61	——		

図40　21号溝跡出土土器・陶器　(単位：mm)

(4) ピット

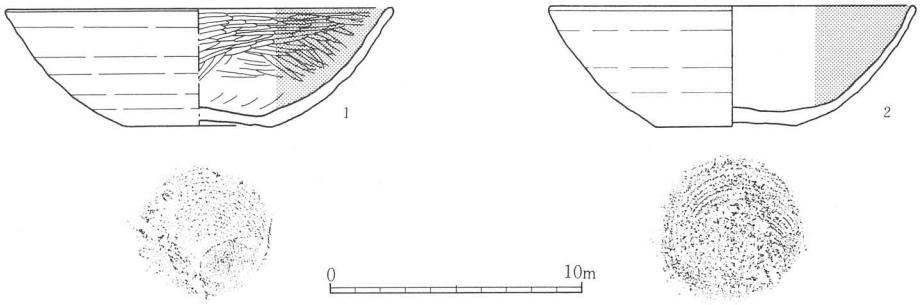
調査区全体で大小295個のピットを検出している。小穴としてのピット間の組み合わせが確認されたものは3号・5号掘立柱建物跡のみで、ほとんどのピットは時期・性格については不明となっている。これらの中で検出状況・出土遺物において特色のみられるP.232について述べてみる。

調査区V区の7トレンチ、R－7グリッド地山面で確認された。規模は径25cm・深さ25cm程の円形のものである。ピット確認時において埋土内で土師器坏を確認している。10個体分の坏が出土しており、9個体は完形品であった。また、そのうち8個体の坏の体部外面には「 宋 」の墨書がみられた。出土状況は完形品の坏が南東向きに横倒しの密着状態で出土している。残る1個体の坏は口縁部のみの残存で、完形品の坏の上面で確認されている。残存状況から蓋状に伏せてあったものとも考えられる。



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
41－1	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整	144	59	46	c	墨書
－2	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整	142	64	48	c	墨書
－3	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整	141	66	46	c	墨書
－4	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整	138	51	46	c	墨書
－5	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整	142	72	46	c	墨書
－6	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整	142	67	45	c	墨書
－7	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整	142	64	46	c	墨書
－8	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整	141	66	43	c	墨書
－9	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整	143	70	45	c	

図41　ピット232出土土器　（単位：mm）



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
42－1	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部－回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	(153)	(57)	(47)	c	
－2	土師器	坏	埋土	ロクロ調整・底部－回転糸切り	(摩耗)　黒色処理	145	54、	48	c	

図42　ピット134出土土器　(単位：mm)

(7) その他

a) 遺物包含層

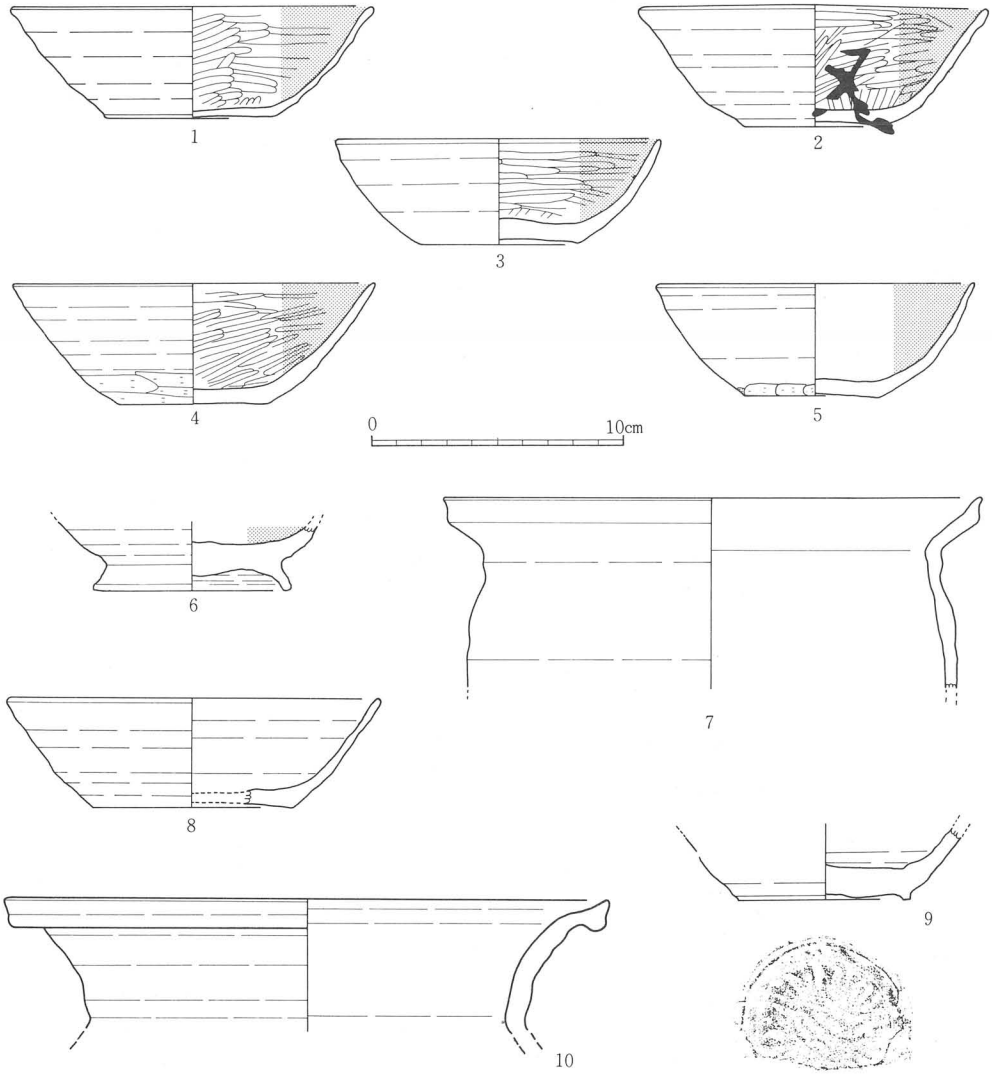
Ⅲ区北西側において確認された。調査区Ⅰ区の台地部から続く傾斜面に位置しており、なだらかな傾斜をみせながら遺跡北西側に位置する沢へと向かっている。表土層を含めて地山面まで5枚の堆積層を確認している。大きくみて褐色土と暗褐色土が互層となる堆積状況を示している。3・4層から遺物が多く出土しており、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・瓦がみられる。各遺物が混在しており、層としての遺物のまとまりはみられない。

b) 道跡？

Ⅴ区17トレ東側、14号住居跡と21号溝状遺構との間で検出した。17トレ東側は挙大の礫層が地山となっており、地山表面は凹凸となっている。その礫面の中に幅120～140cm程で南北方向に延びる、地山面に較べれば礫表面が平坦となっている部分を確認した。これは礫面の状況から人為的なものと考えられ、部分的にみれば礫上面が平坦となるものや凹凸となるものがあり、踏みつけられてできたものではないかと考えるにいたった。礫に混じって須恵器片・軒平瓦・平瓦が出土している。部分的な確認であるため積極的な確証にはとぼしいが、道的な性格をもつものではないかと考えられる。他の遺構との関連は明らかに出来なかった。

c) 遺構外の出土遺物

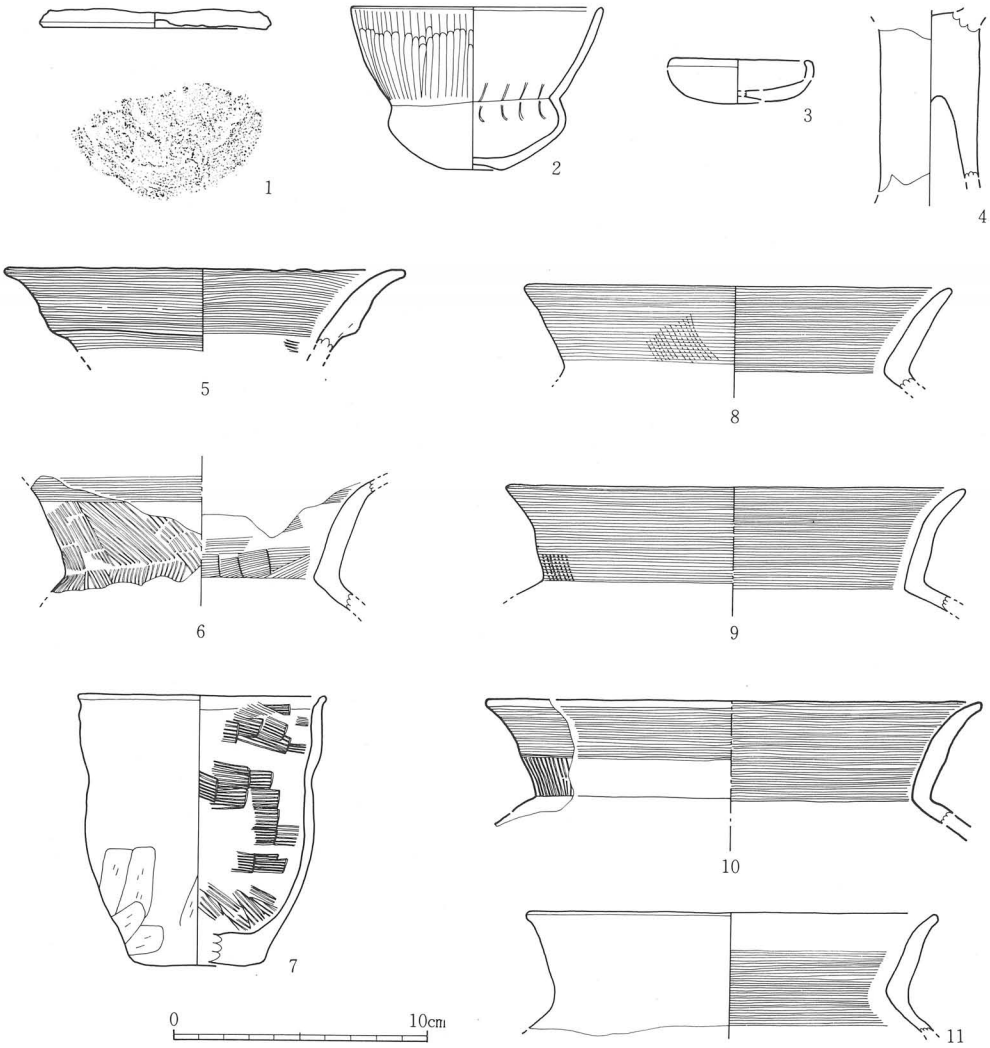
表採や耕作土中出土の資料である。種類としては縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器がある。図示可能なものについて以下掲載する。



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
43－1	土師器	坏		ロクロ調整・底部－回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	143	66	45	b	
－2	土師器	坏		ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	138	56	49	b	
－3	土師器	坏		ロクロ調整・底部－回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	129	63	42	b	
－4	土師器	坏		ロクロ調整・体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	143	59	48	b	
－5	土師器	坏		ロクロ調整・体部下端～底部－手持ヘラケズリ	(摩耗)　黒色処理	125	53	45	c	
－6	土師器	高台付坏		ロクロ調整	(摩耗)　黒色処理	——	(高台)78	——		付高台
－7	土師器	甕		ロクロ調整	ロクロ調整	213	——	——	a	
－8	須恵器	坏		ロクロ調整・底部－回転糸切り	ロクロ調整	148	79	44	a	
－9	須恵器	壺		ロクロ調整・底部－ナデツケ	ロクロ調整	——	(高台)68	——		
－10	須恵器	甕		ロクロ調整	ロクロ調整	239	——	——		

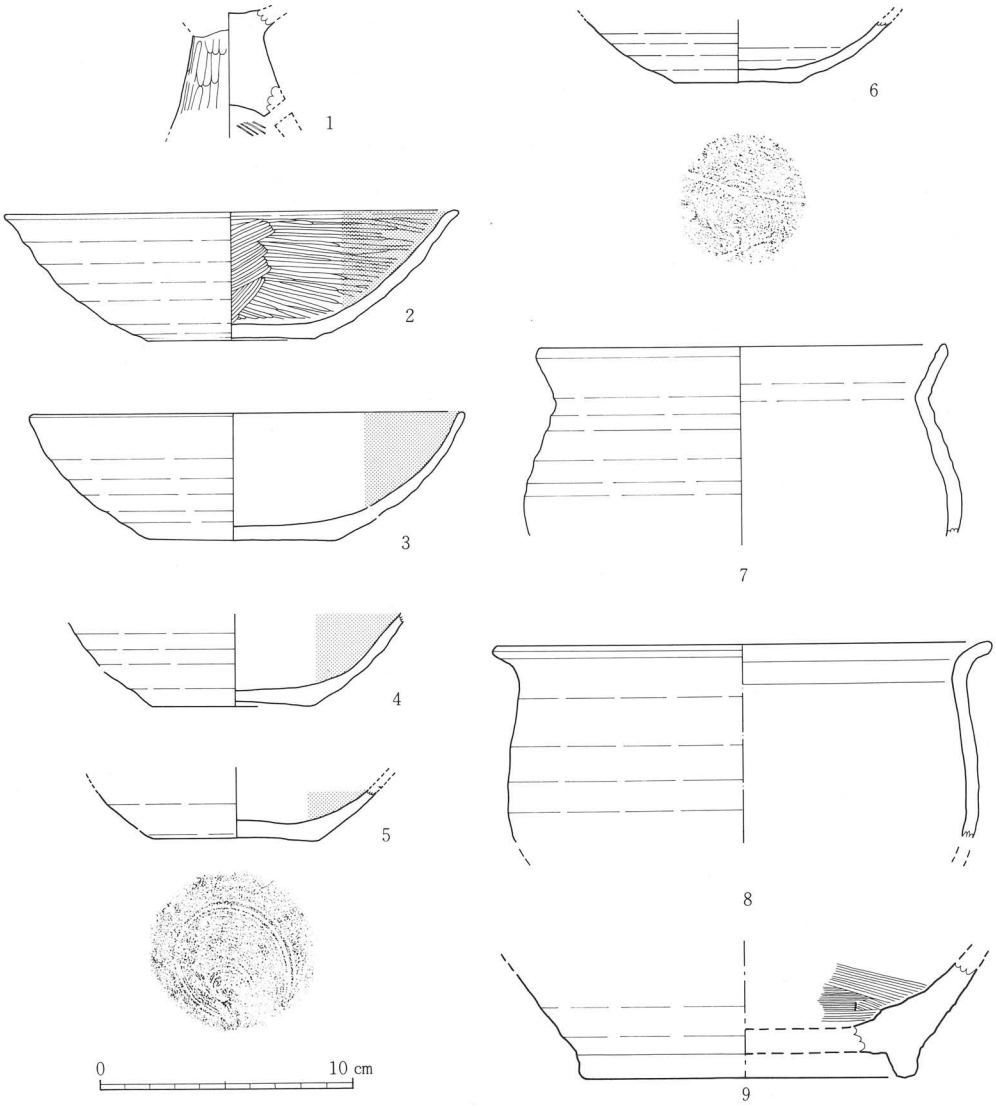
図43　包含層出土土器Ⅰ

(単位：mm)



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
44－1	土師器	蓋？		ロクロ調整・回転糸切り痕	ロクロ調整	91	——	8		
－2	土師器	坏		口縁部－ヘラミガキ・底部－凹面	(摩耗)　ヘラナデ	99	22	65		坩型
－3	土師器	手捏ね土器		(摩耗)	(摩耗)	56	18	18		
－4	土師器	高坏		(摩耗)	(摩耗)	——	——	——		
－5	土師器	壺		ヨコナデ	ハケ目・ヨコナデ	158	——	——		複合口縁
－6	土師器	甕		ハケ目・ヨコナデ	ヘラナデ	——	——	——		
－7	土師器	鉢		(摩耗)　ヘラケズリ	ヘラナデ	99	54	107		
－8	土師器	甕		ハケ目・ヨコナデ	ヨコナデ	168	——	——		
－9	土師器	甕		ハケ目・ヨコナデ	ヨコナデ	(181)	——	——		
－10	土師器	甕		ハケ目・ヨコナデ	ヨコナデ	(195)	——	——		
－11	土師器	甕		(摩耗)	ヨコナデ	162	——	——		

図44　包含層出土土器Ⅱ　(単位：mm)



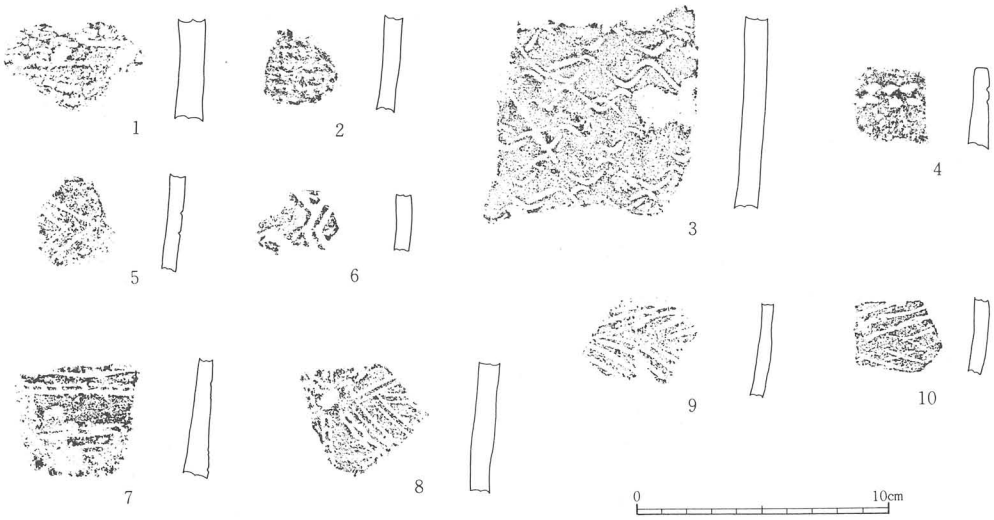
図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
45－1	土師器	高坏	5トレ	ヘラミガキ	ハケ目	——	——	——	a	三孔有り
－2	土師器	坏	17トレ	ロクロ調整・底部一回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	178	65	51	b	
－3	土師器	坏	Ⅲ区	ロクロ調整・底部一回転ヘラケズリ	(摩耗)　黒色処理	171	74	51	c	
－4	土師器	坏	表採	ロクロ調整	(摩耗)　黒色処理	——	64	——		
－5	土師器	坏	表採	ロクロ調整・底部一回転糸切り	(摩耗)　黒色処理	——	65	——		
－6	赤焼土器	坏	表採	ロクロ調整・底部一回転糸切り	ロクロ調整	——	49	——		
－7	土師器	甕	17トレ	ロクロ調整	ロクロ調整	161	——	——	b	
－8	土師器	甕	Ⅰ区	ロクロ調整	ロクロ調整	(191)	——	——	b	
－9	須恵器？	壺	表採	ロクロ調整	ロクロ調整・ナデ	——	(高台)134	——		

図45　各調査区・表採土器

(単位：mm)

Ⅳ．出土遺物について

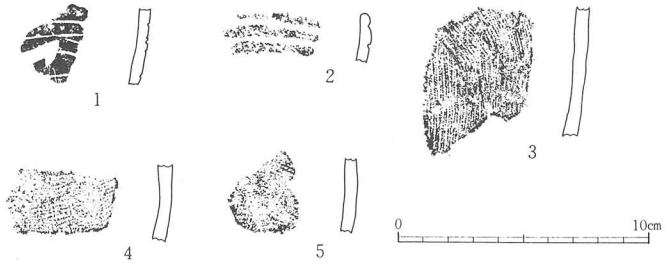
〈縄文土器〉



図・番	地区	器種	特徴	
46 － 1	Ⅲ区		胎土中に植物繊維を含む	早期末～前期初頭
－ 2	Ⅲ区		胎土中に植物繊維を含む	早期末～前期初頭
－ 3	Ⅲ区		外―Ｓ字状連鎖沈文	大木２a
－ 4	Ⅲ区		外―連続刺突文	大木３？
－ 5	Ⅲ区		外―平行鋸歯状沈線文	前期中葉
－ 6	Ⅲ区		外―平行鋸歯状沈線文	前期中葉
－ 7	Ⅲ区		外―沈線文・連続押引刺突文	大木６
－ 8	Ⅱ区		外―沈線文・連続押引刺突文・盲孔	大木６
－ 9	Ⅲ区		外―撚糸文	
－ 10	１号住		外―撚糸文	

図46　出土縄文土器拓影

〈弥生土器〉



図・番	地区	器種	特徴	
47 － 1	表採		外―平行沈線文・平行鋸歯状沈線文・磨削縄文	桝形囲
－ 2	６号土壙		外―平行沈線文・丹塗り	中期
－ 3	Ⅲ区		外―付加縄文　LR ＋ LR	
－ 4	Ⅲ区		外―単節・LR 横位回転	
－ 5	Ⅲ区		外―単節・L　R 横位回転	

図47　出土弥生土器拓影

〈土師器〉

器種には坏・高台付坏・高坏・壺・甕・台付甕・甑・鉢・台付鉢・手捏ね土器等がある。製作に際しロクロを使用しないものとロクロを使用するものがある。便宜的にロクロ不使用をA類、ロクロ使用をB類とする。

（A類）

出土量が少なく多くは破片資料であり、図示し得えたものは17点である。器種には坏・高坏・壺・甕・台付甕・甑・鉢・台付鉢・手捏ね土器がある。以下、器種ごとに特徴を述べる。

坏

所謂坩形土器である。口縁部はやや内弯気味に外傾し立ち上がる。口縁部高が器高の約⅔を占める。体部は上半部が外方へ強く張り出し底部へおさまる。算盤形を呈している。底部には浅い凹面がみられる。器面調整は一部摩耗のため不明な点はあるが、口縁部外面には縦位方向のヘラミガキが施こされる。体部も同様と考えられるが判然としない。内面の体部～底面にはヘラナデがみられるが口縁部は不明である。薄手で端正な作りである。(図44－２)

高坏

脚部のみで全容を知り得るものはない。脚部形態から三つに分けられる。

ａ－脚部全体が外方へ開く、裾広がりのものである。脚部中央に円孔が三ヶ穿たれている。円孔付近まで中実となっている。器面調整は外面がヘラミガキ、内面にはハケメ調整がみられる。(図45－１)

ｂ－脚部が外方へかるく開き、下部で強く外方へ屈曲し裾部となるものである。脚部はほぼ中空である。器面調整として外面にヘラミガキがみられる。(図23－４)

ｃ－脚部は柱状で下部で外方に強く屈曲し裾部がつくものである。柱状部は中実である。器画は摩耗のため判然としないが外面にハケ目が観察される。(図10－６)

壺

口縁部・体部の破片資料で全容は知り得ない。口縁部資料のものには大形と小形がありともに複合口縁である。口縁部が外傾し立ち上がるもの（ａ)、口唇部で外反するもの（ｂ)がある。ａの器面調整は外面で口唇部がヨコナデ、頸部から体部にかけてハケ目が施こされる。全体にナデ状のミガキがみられる。内面にはハケ目がみられる。ｂは口縁部内外面ともヨコナデがみられる。（図23－５、44－５、31－１）体部資料のものには小形と大形がある。小形のものは体部中央部が外方へ張り出す算盤形を呈する。底面には凹面がみられる。器面調整は摩耗のため不明である（図10－２)。 大形のものは体部が球形を呈し、底部に凹面がみられる。器面調整は外面がハケ目後ヘラミガキ、内面はハケ目が全面にみられ、横位方向にヘラミガキが数条観察される。甕とも考えうるがここでは壺とした（図23－６)。

甕

口縁部を中心とした資料で全容は知り得ない。口縁部径から大形と中形に分けられる。大形のものは全て単純口縁である。外傾気味に立ち上がり口唇部で外反するものが多い。器面調整は内外面ともヨコナデが施こされ、外面にハケ目のみられるものもある。（図44－８・９・10 11）小形のものも単純口縁である。体部まで確認されるものは口縁が外傾気味に立ち上がり体部は球形を呈する。器面調整は外面にハケ目、口縁部にヨコナデが観察される。口縁部のみのものは外傾気味に立ち上がり口唇部で外反する。器面調整は外面にハケ目、内面にはヘラナデがみられ、外面口唇部付近でヨコナデが観察される。（図10－３、44－６）

台付甕

甕部と台部の接合点の破片資料である。円錐台状に上・下方に開く。外面の器面調整はハケ目後縦位方向のヘラケズリである。内面は不明である。（図10－７）

甑

底部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。口縁は複合口縁である。底部は平底で中央部に径１cm程の円孔が１ヶ穿たれている。器面調整は摩耗のためほとんど不明であるが、外面下端にヘラケズリが一部みられる。（図10－４）

鉢

体部下端に脹みがみられるが、底部から口縁部にかけて急な立ち上がりをみせ、口縁部でわずかに外反する器形をもつ。器面調整は摩耗のため判然としないが、外面体部下端にナデ状のミガキがみられ、内面上部にはヘラナデ、下部にはナデがみられる。（図44－７）

台付鉢

台部が欠損しており鉢部のみの残在である。高坏の坏部とも考えられたが、器形・調整から高坏とは認めがたく台付鉢と呼称した。鉢部は台部との接合点から内弯気味に外傾し立ち上がる。器面調整は外面下端にハケ目、内面にヘラナデ調整がみられる。（図10－５）

手捏ね土器

口径 5.5cm・器高２cm程の小形のものである。体部は底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部は内弯気味である。底部は円形の凹面となっている。器面調整は摩耗のため不明であるが全体的に端正な作りである。（図44－３）

以上が土師器Ａ類の各器種ごとの特徴である。多くのものは住居跡・包含層からの出土であり、群として把えられるものもある。次にこれらの土師器の年代について検討してみる。

高坏ｃ、小形壺、小形甕、台付甕、甑、台付鉢が５号住居より出土している。これらは全て堆積土中のものであるが、床面に近く一括資料もみられ、広義での共伴関係として把えられるものと考えられる。甑や台付甕は中田畑中・留沼・宮前遺跡に類例がみられ「塩釜式」の範疇

に属しており、これらから上記の土器群は大きく塩釜式期に属すると考えられる。その他の土器は単体で出土しており共伴関係等はみられないが、坏・高坏a・高坏b・壺a・壺bは上述の遺跡や清水遺跡に類例がみられ、塩釜式のものと考えられる。また、大形壺・大形甕・鉢・手捏ね土器は破片資料であったり、類似をみない器形であるため時期を明らかにすることが出来ないが、A類の多くが塩釜式に属していることや、他の型式に類例がみられないことなどから同様な時期が考えられる。

（B類）

遺物の中で出土量が最っとも多い。器種には坏・高台付坏・甕・鉢等がある。以下、器種ごとに特徴を述べる。

坏

外面にロクロ目が観察され、内面に黒色処理・ヘラミガキが施こされる。底部切り離しの判明するものは全て回転糸切りである。図示したものは総数38点であるが、法量・細部の特徴を知り得るものは32点にのぼる。器形の特徴から下記の3グループに分けられる。

a－口径に対する底径の割合が35～45%、口径に対する器高が30～45%、底径に対する器高が90～100%を示す。器高の割合が大きく全体的に底径が小さく深めの器形、椀状を呈する。体部は内弯気味に立ち上がり、口唇部はかるく外反する。無調整である。

b－口径に対する底径の割合が35～45%、口径に対する器高が25～30%、底径に対する器高が60～75%を示す。器高の割合が小さく全体的に浅めの器形、皿または鉢状を呈する。体部の立ち上がりは内弯気味のもの外傾気味のものがあり、口唇部でかるく外反するものもある。無調整が多いが体部から底部にかけて回転ヘラケズリが施こされるものもある。

c－口径に対する底径の割合が35～50%、口径に対する器高が30～40%、底径に対する器高が60～90%である。法量の割合からa・bの中間的様相を示す。体部の立ち上がりは内弯気味と外傾気味のものがあり、口唇部が外反するものもある。多くは無調整であるが体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施こされるものがある。

高台付坏

全容を知り得る資料はない。外面にロクロ目、内面に黒色処理・ヘラミガキ調整が施こされる。坏部の判明するものは高台部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。高台はハの字状に外方へ張り出している。付高台である。

甕

口縁部の形態から2グループに分けられる。

a－口縁部が体部からくの字状に外傾し口唇部が直立気味に立つものである。大形と小形がみられ、大形は長胴形を呈する。体部下半には縦位方向のヘラケズリがみられ、体部外面に叩

き圧痕が観察されるものがある。

b－口縁部が体部からくの字状に外傾または外反するものである。外面にヘラケズリが施こされるものもあるが、多くはロクロ調整のみである。底部の確認できるものは平底で、切り離しは回転糸切りである。

鉢

底部が欠損している。体部はやや内弯気味に外傾し立ち上がる。上端でかるく外反し口縁部となる。再調整等はみられない。他の器種に較べてやや器厚がある。

その他の土器

把手の付く土器で甑と考えられたが小破片であるため器種は断定し得なかった。把手は上方を向き、長さ3cm・幅2.5cm程を計る。ナデ・ケズリ調整で成形されている。周辺部もナデ・ケズリ調整がみられる。（図40－1）

蓋状の土器で円盤形を呈する。上面に回転糸切り痕、下面にロクロ調整痕が認められる。上面は下面に較べて滑らかになっており、側部上面も丸みをおびている。蓋としての積極的な確証は得られなかった。（図44－1）

以上が土師器B類の各器種ごとの特徴であるが、住居跡で赤焼土器や須恵器との共伴関係がみられるため、年代等については赤焼土器・須恵器を含めた中で考える必要があり、別項で記したい。

〈赤焼土器〉

赤焼土器としたものは酸化炎焼成のもので、黒色処理・ヘラミガキの施こされない土器をさす。内面調整・焼成状態・色調から土師器・須恵器と一応区別する。坏のみに限定している。

図示し得たものは12点であるが、法量・細分の特徴を確認できるものは7点のみである。切り離しの判明するものは全て回転糸切りである。再調整はみられない。法量の割合をみると、土師器坏a・b・cに類似する。体部が外傾し立ち上がるもの、口唇部で外反するものがみられる。

〈須恵器〉

器種には坏・壺・甕がある。

坏

図示し得たものは5点であるが、器形の全容を知り得るものは3点のみである。底部切り離しの判明するものは回転糸切りである。器形の特徴から下記に分けられる。

a－口径に対する底径の割合が大きく、やや深めの器形をもつ。体部から口縁部にかけて外

傾し立ち上がる。無調整である。（図43－８）

ｂ－口径に対する底径の割合が小さく、やや浅めの器形をもつ。体部から口縁部にかけて内弯気味に外傾し立ち上がり、口唇部でかるく外反する。無調整である。（図17－８）

ｃ－口径に対する底径の割合が小さく、やや深めの器形をもつ。体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。無調整である。（図40－３）

壺

図示資料は全て欠損品で口縁部資料１点（図23－３）、体部資料１点（図13－１）、底部資料１点（図43－９）の計３点のみである。

３は残存部から長頸のものと考えられる。調整はロクロ調整のみである。口縁部はラッパ状に外反し、口唇部上下端が三角形に突き出している。

１は残存状態から体部上半は球形を呈すると考えられる。１同様長頸と考えられる。頸部にはロクロ調整でのかすかな高まりがみられ全周している。内外面ともロクロ調整のみである。

９は低い高台がみられ、付高台と考えられる。外面には浅い手持ちヘラケズリがみられる。

甕

図示資料は２点のみで、口縁部破片資料である（図18－１、43－10）。内外面ともロクロ調整のみが観察される。１は体部から「く」の字状に外傾し口唇部にいたっている。口縁部周縁上方は丸くおさまり、下方は三角形に突き出し端部は平坦となっている。10は外反気味に外傾しながら口縁端部にいたる。口唇部上方は三角形に突き出し、下方は丸くおさまっている。

〈出土土器の組み合わせと年代について〉

土器類は前述したように多種にわたるが、ここでは住居等で出土している土師器Ｂ類、赤焼土器・須恵器の共伴関係について検討し、年代についても考えてみたい。良好な共伴関係のみられる住居跡には10号・11号住居跡がある。

10号住居跡の資料は床面直上のものが多く厳密な意味合いでの共伴とは言い難いが、床面にほぼ接していることもあり、大きく共伴関係としてとらえている。器種には土師器坏ａ・ｂ・ｃ、土師器甕ａ、須恵器坏ｂ、須恵器甕がある。

11号住居跡の資料はカマド部と貯蔵穴状ピットからのものである。器種には土師器坏ｂ・ｃ土師器甕ａ・ｂ、赤焼土器ｂがある。

両住居跡を比較すると器種構成で互いに欠損するものがみられるが、共通するものもあり大きくみて同様のものと考えられる。これらの中で土師器は製作に際しロクロを使用しており、土師器編年での第七型式「表杉ノ入式」に相当するものであり、平安時代全般にわたり製作・使用されたと考えられているものである。(註３)従って、共に出土している赤焼土器・須恵器につい

ても表杉ノ入式期に属するものと考えられる。

近年、表杉ノ入式の土師器坏は技法・形態の相違・変化を時間的変遷の中で把えうる可能性が提示されている。阿部義平・桑原滋郎各氏は成形・調整技法の点から分類し、製作技法の手数の省略化により変遷するとしており(註4)、このことは再調整から無調整へ変化して行くものと把えられる(註5)。また、水入・佐内屋敷遺跡の報告では土師器坏を形態的特徴から大きく三類(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)に分け、Ⅰ・Ⅱ類は前型式の国分寺下層式の終末期の形態に近似すること、Ⅲ類がロクロ技術の進展の結果として把えられる器形のものとし、Ⅲ類はⅠ・Ⅱ類より新しい特徴を示すものだとし、器形の面から新旧について述べ、各類の組み合わせの中で年代にまで言及している(註6)。また、再調整はⅠ・Ⅱ類に多用され、Ⅲ類ではほとんどのものが無調整となる傾向を指適している。ここでⅠ類とした土器の特徴は口径に対して底径、器高の占める割合が大で丈が高いもの、Ⅱ類はⅠ類同様、口径に対して底径の占める割合が大で、器高の占める割合が小で扁平な感があるもの、Ⅲ類は口径に対して底径の占める割合がⅠ・Ⅱに比して小さく、胴・口縁部が大きく開き気味のものである。さらに、南小泉遺跡での報告では土師器坏を形態的特徴から大きく4類(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ)に分けている(註7)。分類基準は上記遺跡とほぼ同じであるが、Ⅰ類がⅡ類に、Ⅱ類がⅠ類に、Ⅲ類はⅢ類となるが底径の違いからⅣ類を加えている。また、住居跡出土の各類の組み合わせの違いから、Ⅰ類とⅣ類との間には時間的差異が認められるとし、Ⅰ類はⅣ類よりも古い様相を示すものとし、各土器類の組み合わせから年代にまで言及している。

以上の例から当遺跡住居跡出土土器を観察すると、土師器坏は水入・佐内屋敷遺跡でのⅢ類に、南小泉遺跡でのⅢ・Ⅳ類に類似し、10号住居跡出土の須恵器坏は南小泉遺跡での須恵器坏Ⅳ類に類似するものである。ロクロ技術の進展の結果としての器形群としては把えられるが、土器類の構成要員(土師器坏ではⅢ類に類似するものが主体を占め、Ⅳ類に類似はするが器形が埦的なものがみられる等)としては違いがみられる。同様な土器構成をみてみると、安久東遺跡第1～3号住居跡のものがある。灰釉陶器埦が伴出しており、埦の年代から11世紀の年代を与えている。しかし、灰釉陶器自体の編年体が流動的な現在では年代設定に難があるものと考えられる(註8)。当遺跡1号掘立柱建物跡柱穴内より赤焼土器坏が出土しているが、11号住居跡出土の赤焼土器と形態的に類似するものである。この建物跡は県内でよくみられる灰白色火山灰を含む層を切り込んで構築されているもので、この灰白色火山灰は各論考により10世紀前半頃の年代が求められている。これらから、10号・11号住居跡の年代は10世紀前半以前のものと考えられよう(註9)。また、10号・11号住居跡は近接しており、新旧関係が考えられたが明らかにすることは出来なかった。

〈瓦〉

出土した瓦は300点ほどである。住居跡や土壙からの出土もあるが、多くは表採や耕作土中からのものである。全て破片資料で全容を知り得るものはない。種類としては軒平瓦・平瓦・軒丸瓦・丸瓦がある。これらの瓦は製作技法等の特徴から細分が可能である。

軒平瓦

陽刻の均整唐草文軒平瓦である。顎部のみの残存で瓦当面も右側半分が欠損しており、細部については不明な点が多い。瓦当面は従来知られている均整唐草文様（緻密に配された渦巻で構成されるもの）とは意匠が異なり、瓦当面中央に花を1ヶ配し渦巻と花を交互に配した左右相称の文様構成をもつものである。復元からの推定ではあるが、渦巻が8ヶ（時計回り・反時計回り各4ヶ）、花が7ヶ（上向きのもの3ヶ・下向きのもの4ヶ）配されている。全体的な文様構成として流麗さがみられるものである。顎面には縦位方向の縄叩き目が施こされ、その上にややくずれた鋸歯文が施文されている。顎部幅は8cm程で断面は三角形を呈する。瓦側端部はほぼ垂直に面取りが施こされている。瓦凹面には粗い布目痕・縦位方向のナデ調整がみられる。

平瓦

瓦凸面の叩き圧痕の相違から大きく下記のグループに分けられる。

1：凸面に格子叩き目がみられるものである。確認できるものは全て斜格子で、格子目は菱形を呈する。叩き目は全体的に浅く、格子目の凹面は平坦となっている。瓦凹面には糸切り痕・布目痕が観察され、布目は緻密に織られたものを使用している。模骨痕と判断されるほぼ均等な幅をもつ凸凹が観察されるが、明確な段となっているものは少なく扁平となっているものが多い。また、粘土板の合わせ目や縦位方向のヘラケズリが観察されるものがある。側端部には面取りが施こされるが、一面のみの面取りで先端部が鋭角となるものがあり特徴的である。瓦質は緻密で硬質のものが多い。瓦最大厚は1.7～2.9cmと様々である。

2：凸面に平行叩き目がみられるものである。瓦の長軸に対し横位・斜位方向に走るもので、横位方向が主体を占める。縦位方向のナデ調整により叩き目が消されているものがある。凹面には糸切り痕・布目痕が観察され、布目は緻密なものが使用されている。模骨痕と判断される凹凸面が観察されるものもあるが、大半は扁平な面となっているものが多い。縦位方向にナデ・浅いケズリが調整としてみられる。側端部には面取りが施こされ、二面にわたるもの、一面のみで先端部が鋭角になるものがある。瓦最大厚は1.9～2.7cmを計り、瓦質は緻密で硬質のものが多いが薄手の瓦に軟質なものがみられる。

3：凸面に縄叩き目がみられるものである。瓦の長軸に対し縦位・斜位方向に走るもので、縦位方向のものが主体を占める。縄目圧痕の大きさに違いがみられ細分が可能である。叩き目

がスリ消されるものが一部にみられる。凹面には糸切り痕・布目痕がみられ、布目は織目の緻密なもの・粗いものの二種がみられる。模骨痕と考えられる凹凸面が一部のものに観察されるが(a)、大半のものは扁平な面をもつものである(b)。縄目状の圧痕が剝離面に観察されるものがあり粘土板の合わせ目と考えられる。調整としてはナデ・浅いケズリがみられる。側端部には面取りが施こされ、二面・三面にわたるものが多くみられる。瓦最大厚は 1.6～ 3.3cmを計り様々である。瓦質は緻蜜で軟質・硬質のものがあり、硬質のものには自然釉のかかるものが多くみられる。

軒丸瓦

小破片であるため特徴等については不明であるが、瓦当外縁部には蓮弁・間弁の一部が残存している。瓦当部上面にはナデ・ケズリ調整がみられ、側端部には二面の面取りがみられる。凹面にはやや粗い布目痕・粘土紐の合わせ目が観察され、縦横位方向のナデ調整・縦位方向のナデツケがみられる。瓦質は緻密で硬質である。文様については不明である。

丸瓦

瓦凸面の叩き圧痕や形態の相違から下記のグループに分けられる。

1：凸面に平行叩き目がみられるものである。瓦の長軸に対し縦位・横位方向に走る。凹面には布目痕が観察され、糸切り痕のみられるものもある。布目は緻密に織られたものを使用している。側端部には二面の面取りが施こされている。瓦最大厚は 1.6～ 2.0cmを計りほぼ均一である。瓦質は緻密で硬質である。上下端部が欠損しており瓦形態については不明である。

2：凸面に縦位方向のヘラケズリ調整がみられ、叩き圧痕については不明なものである。凹面には糸切り痕・布目痕が観察され、布目は緻密なものが使用されている。側端部には二面の面取りがみられる。瓦最大厚は 2.4cmを計る。瓦質は緻密で硬く、自然釉もみられる。瓦下端部が残存しており、行基式瓦であることが確認されている。

3：凸面に縄叩き目がみられるものである。ナデ・ケズリ調整により縄目が磨り消されている。凹面には布目痕が観察され、織目の緻密なもの・粗いものの二種があるが、布目の粗いものが多数を占める。粘土紐の合わせ目が観察されるものが多い。側端部には二面の面取りがみられる。瓦最大厚は 1.6～ 2.1cmを計り、瓦質は緻密で硬いものが多い。瓦形態の判明するものは玉縁式瓦である。

以上が今回の調査で出土した瓦の種類ごとの特徴である。軒平・軒丸瓦は一種類、平瓦・丸瓦は三種類に分けることができた。また、昭和56年度調査地区の報告で出土瓦の分類を行なっており、軒瓦の出土はないが、平瓦は5類に丸瓦は4類に分けている。今回出土した瓦はこの分類にあてはまるものが大半であるが、あらためて分類基準を略述してみる。

平瓦１類：凸面に格子叩き目がみられ、正格子と斜格子に分けられる。

２類：凸面に平行叩き目がみられる。

３類：凸面全体にヘラケズリが施こされる。叩き圧痕は不明。

４類：凸面に縄叩き目がみられる。

５類：凸面に縄叩き目がみられ、ナデ調整により一部叩き目が磨り消される。

丸瓦１類：凸面に格子叩き目がみられる。

２類：凸面に平行叩き目がみられる。

３類：凸面にナデ調整がみられる。叩き圧痕は不明。

４類：凸面に縄叩き目がみられる。

以上が平瓦・丸瓦の分類基準としたものである。その後の瓦観察の結果、平瓦５類は４類の範疇に入り、丸瓦３類は一部ヘラケズリ調整がみられることが確認され、分類基準は一部補訂となる。その結果、現段階では平瓦・丸瓦とも４種の分類となる。今回の出土瓦を上記の分類に対比してみると、下記のように分けられる。

平瓦１→平瓦１類　　平瓦２→平瓦２類　　平瓦３→平瓦４類

丸瓦１→丸瓦２類　　丸瓦２→丸瓦３類　　丸瓦３→丸瓦４類

次に造瓦技法の点からみると、平瓦・丸瓦とも大きく二者に分けられる。平瓦では粘土板桶巻作りと一枚作りのものである。平瓦１・２と平瓦３の一部が前者に相当し、平瓦３の大部分が後者に相当する。前者の瓦凹面には模骨痕が観察されるが、明瞭なものは少なく全体的に扁平となっているものが多く一枚作りの瓦との区別がつきにくい面もあるが、前者は後者に較べて凹面の布目痕が緻密となっている特徴がみられる。丸瓦では粘土板巻作りと粘土紐巻作りの二者に分けられ、丸瓦１・２が前者に相当し丸瓦３が後者にあたる。丸瓦１・２が行基葺、丸瓦３が玉縁付きの形態をもつものである。

以上、種類別に瓦の特徴を述べたが、次に瓦各類の年代等について考えてみたい。

軒平瓦は瓦当面に陽刻の均整唐草文がつくものであるが、前述したように従来知られているものとは意匠が異なっている。文様の類似例として平泉高館出土の瓦(註10)と多賀城跡出土の塼(註11)がある。平泉高館出土の瓦は紙上での観察ではあるが完形品である。瓦当面には左右相称に花や渦巻が配され、文様は流麗である。当遺跡出土の瓦は欠損品ではあるが、花・渦巻の数、流麗さ等からみて同じ構成のものと考えられる。顎面には二本沈線による端部がくずれた鋸歯文が施文されている。瓦凸面には縦走する縄叩き目がみられ、中央部には後世のものと考えられる硯様のものが削り出されている。多賀城跡出土のものは塼側面にみられる。欠損品であるため全容は知り得ないが、花と渦巻がみられやはり流麗な文様となっている。塼上面には神獣らしい

ものが浮彫されている。

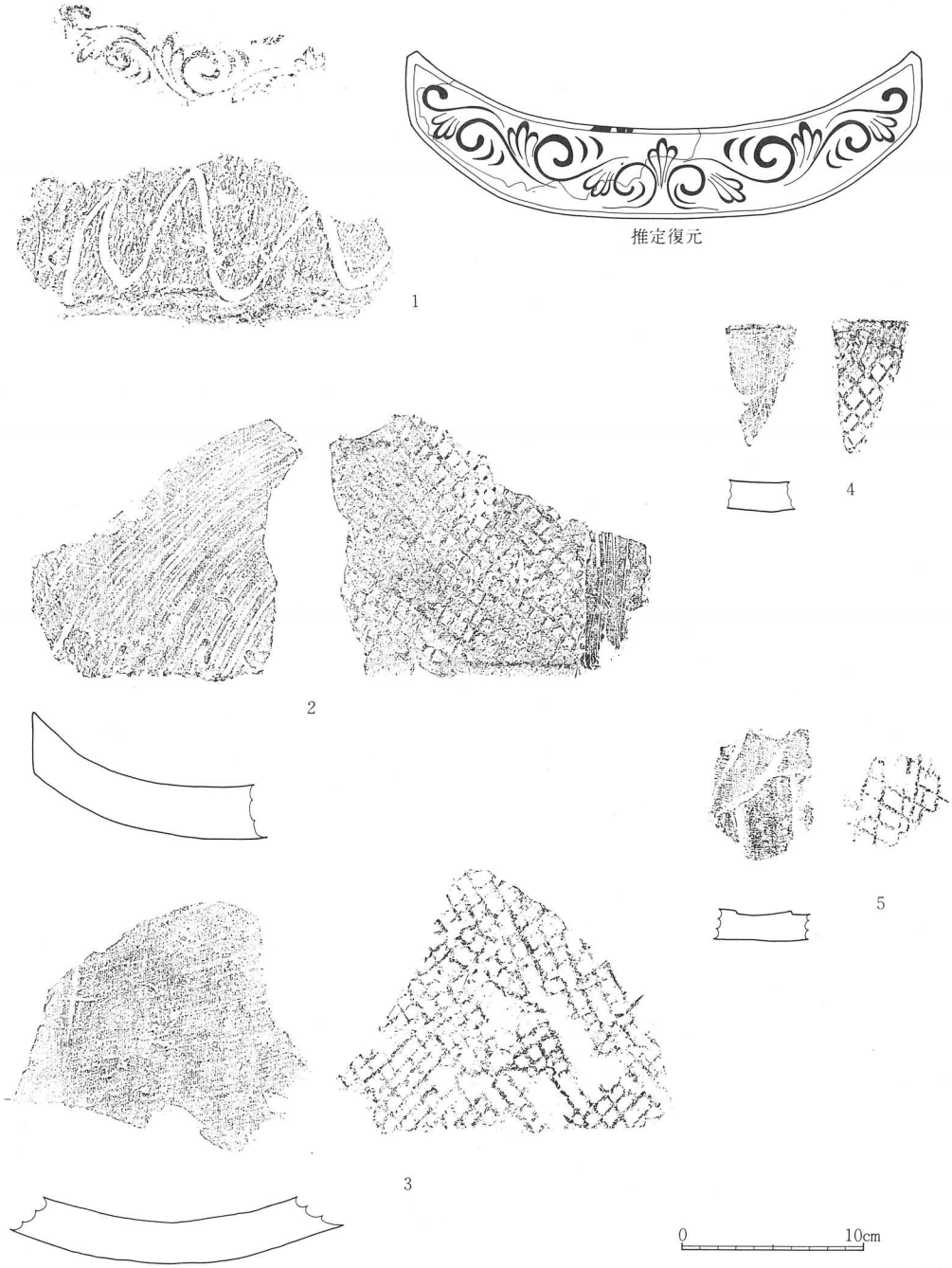
現在、同様の文様が知られる遺跡は当遺跡を含めて三ヶ所にすぎず、当遺跡では他に3点の表採資料があり、計6点の資料にとどまっている。平泉高館出土の瓦は、完形品であること、後に硯様のものに転用されていること、平泉遺跡群内での調査において瓦は少量の出土例しかみられないことなどから、断言は出来ないが搬入品である可能性も考えられる。このことから古代平泉の範疇の中で考えうるものか疑問が残される。また、多賀城跡出土の塼は土壙より出土しており、伴出する瓦には多賀城Ⅰ期・Ⅳ期の瓦が混在している。廃棄としての性格が考えられ、同様に所属時期については不明と言わざるをえない。このように、均整唐草文軒平瓦は現段階では類例が少なく、窯跡での共伴関係も不明であり、軒丸瓦との組み合わせと共に時期についても明らかにすることが出来ない。

軒丸瓦は瓦当面が欠損しており、文様・時期とも不明である。

平瓦・丸瓦は昭和56年度調査報告での分類にあてはまるものが大半を占めており、所属時期については同じ見解となるが、あらためて述べておく。平瓦1と同様の特徴をもつものには多賀城創建平瓦第4類(註12)・伏見廃寺跡(註13)・三輪田遺跡(註14)にみられ、大蓮寺窯跡のテラス状遺構(註15)からは平瓦1・2に類似したものが出土している。平瓦3aは多賀城創建期瓦の特徴がみられ、平瓦3bは多賀城Ⅱ期以降の特徴をもつものと考えられる。丸瓦1と類似するものには多賀城創建丸瓦第4類や伏見廃寺跡にみられ、丸瓦2は角田郡山遺跡(註16)にみられる。丸瓦3は多賀城跡など一般的にみられるものである。

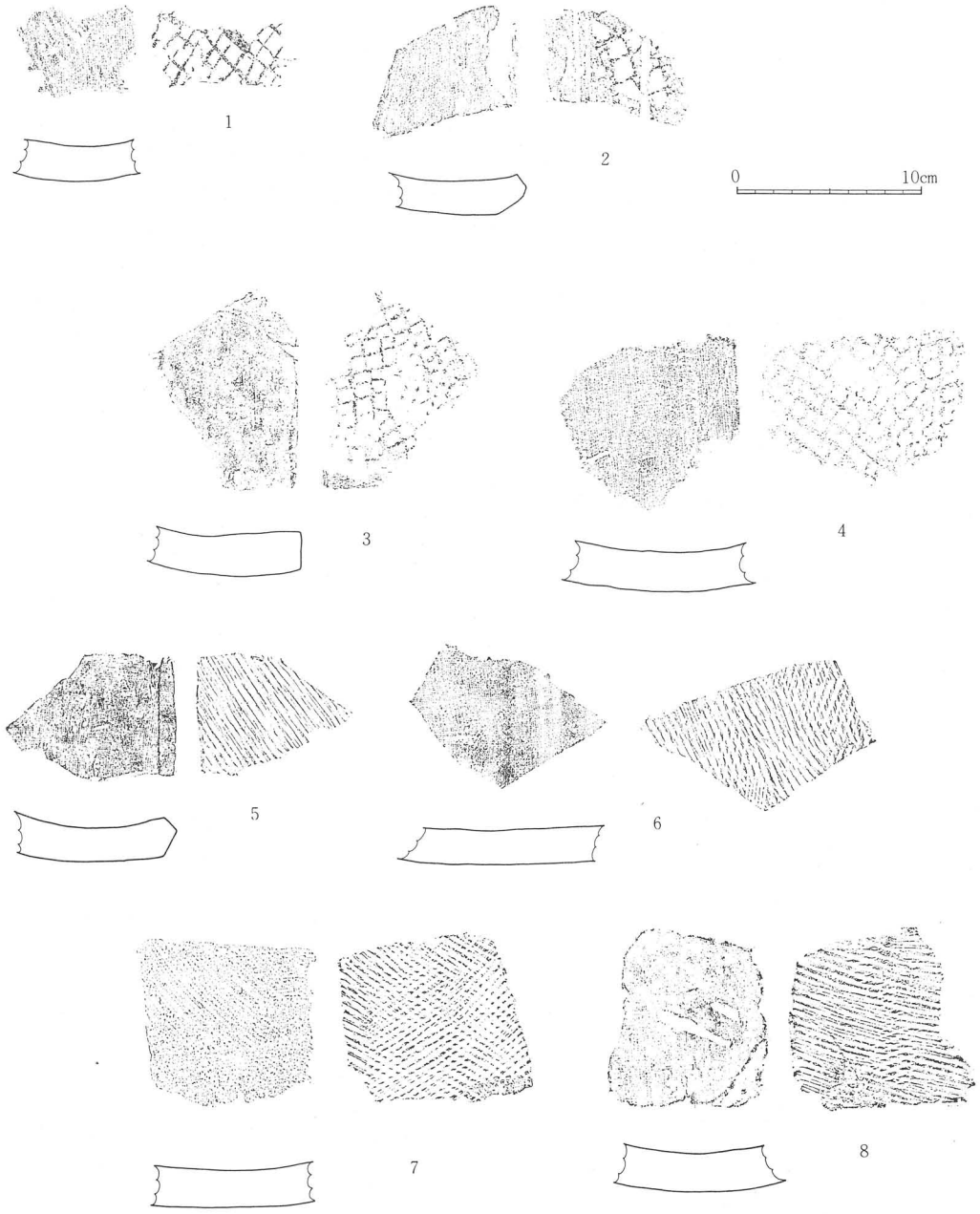
山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦の組み合わせは多賀城創建以前の指適がある。上述の組み合わせがみられる伏見廃寺跡や、ロクロ挽き重弧文軒平瓦を伴っている三輪田遺跡(註17)では多賀城創建期以前・多賀城創建期の可能性を指適している。また、大蓮寺窯跡の調査によってロクロ挽き重弧文軒平瓦に伴う平瓦がみとめられているが、この平瓦と叩き目圧痕をはじめとし胎土・焼成の同じ平瓦（平瓦2類・昭和56年度調査図12－5）がみられ、同窯の製品とみることができる。これらから、軒瓦の組み合わせではないが伴に出土している平瓦・丸瓦の例から、平瓦1・2、丸瓦1は多賀城創建期以前・多賀城創建期の可能性が考えられる。丸瓦2も造瓦技法の点から同様な時期が考えられる。平瓦3aは多賀城創建期に、平瓦3b・丸瓦3は大きく多賀城Ⅱ期以降のものと考えられる。

『歴史考古』第12号「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦(Ⅲ)」の報文で小田原案内の瓦窯址（大蓮寺窯跡地点と考えられる）として出土瓦の記述がある。……重弧文字瓦は、多賀城や陸奥国分寺など広く使用されている重弧文とその施文技法を異にし、弧線の断面が丸味を帯びている。……この宇瓦と同一様式のものが燕沢遺跡から発見されており……云々とあり、この重弧文宇瓦はロクロ換き重弧文軒平瓦と考えられる。また、当瓦窯からは単弁蓮花文軒丸瓦も発見されており注意される。



図・番	分　類	遺　　構	特　　徴	備　　考
48－1	軒平瓦	V区 17トレ 道　跡　？	瓦当面－均整唐草文　顎面－縄叩き目・鋸歯文　凹面－ナデ・布目(？)　色調－灰色・硬質	写図47－1
－2	平瓦1類	表　　採	凸面－格子目叩き(斜格子)　凹面－糸切り痕・模骨痕・布目(1㎝13本)　色調－灰色・硬質・最大厚 2.9㎝	写図47－2
－3	平瓦1類	48 号 土 壙	凸面－格子目叩き(斜格子)　凹面－糸切り痕・模骨痕・布目(1㎝14本)　色調－灰色・硬質・最大厚 2.4㎝	写図47－3
－4	平瓦1類	表　　採	凸面－格子目叩き(斜格子)・浅いケズリ　凹面－布目(1㎝14本)　色調－灰色・硬質・最大厚 1.7㎝	写図47－4
－5	平瓦1類	I区・表　採	凸面－格子目叩き(斜格子)　凹面－糸切り痕・模骨痕・布目(1㎝14本)　色調・灰色・硬質・最大厚 1.8㎝	

図48　軒平瓦・平瓦（1類）

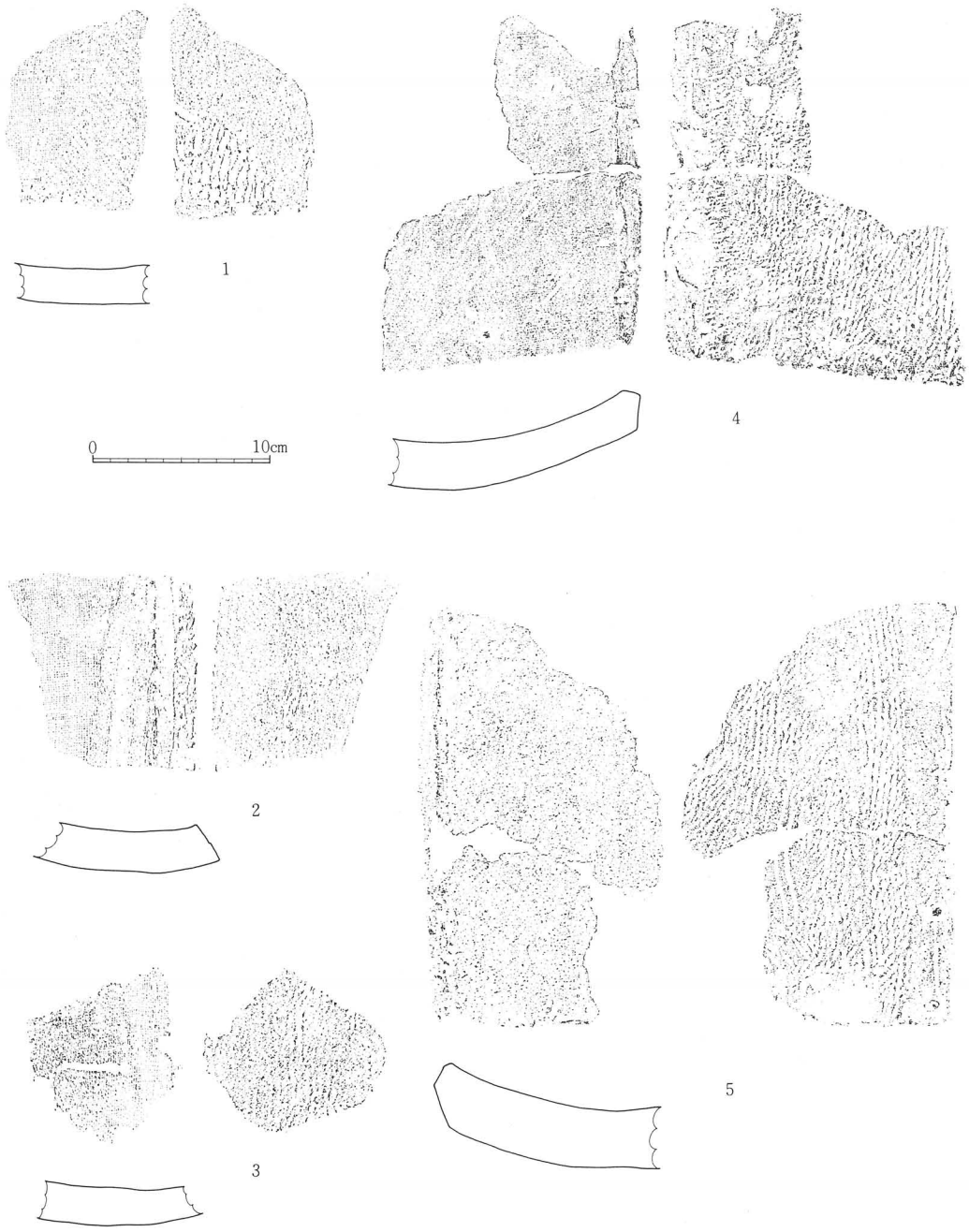


図・番	分　類	遺　　構	特　　徴			備　　考
49－1	平瓦1類	Ⅵ区 1　10トレ 層	凸面－格子目叩き(斜格子)	凹面－糸切り痕・布目(1cm14本)	色調－灰白色・硬質・最大厚 2.1cm	
－2	平瓦1類	48 号 土 壙	凸面－格子目叩き(斜格子)	凹面－糸切り痕・布目(1cm14本)・ケズリ	色調－灰色・硬質・最大厚 1.8cm	
－3	平瓦1類	Ⅵ区 1　17トレ 層	凸面－格子目叩き(斜格子)	凹面－布目(1cm15本)・ケズリ	色調－灰白色・硬質・最大厚 2.5cm	写図47－5
－4	平瓦1類	表　　採	凸面－格子目叩き(斜格子)	凹面－粘土板合わせ目・糸切り痕・模骨痕？・布目(1cm13本)	色調－淡黄色・軟質	写図47－6
－5	平瓦2類	Ⅰ　　層	凸面－平行叩き(斜位)	凹面－布目(1cm10本)・ナデ	色調－灰色・硬質・最大厚 2.1cm	
－6	平瓦2類	Ⅵ区 1　17トレ 層	凸面－平行叩き(斜位)	凹面－布目(1cm12本)・模骨痕？	色調－褐灰色・硬質・最大厚 2.0cm	
－7	平瓦2類	Ⅲ区 包 含 層	凸面－平行叩き(斜位)	凹面－糸切り痕・布目(1cm9本)	色調－褐灰色・硬質・最大厚 2.1cm	写図48－1
－8	平瓦2類	Ⅵ区 1　17トレ 層	凸面－平行叩き(斜位)	凹面－布目(1cm12本)・ナデ	色調－灰色・硬質・最大厚 2.2cm	写図48－5

図49　平瓦（1・2類）

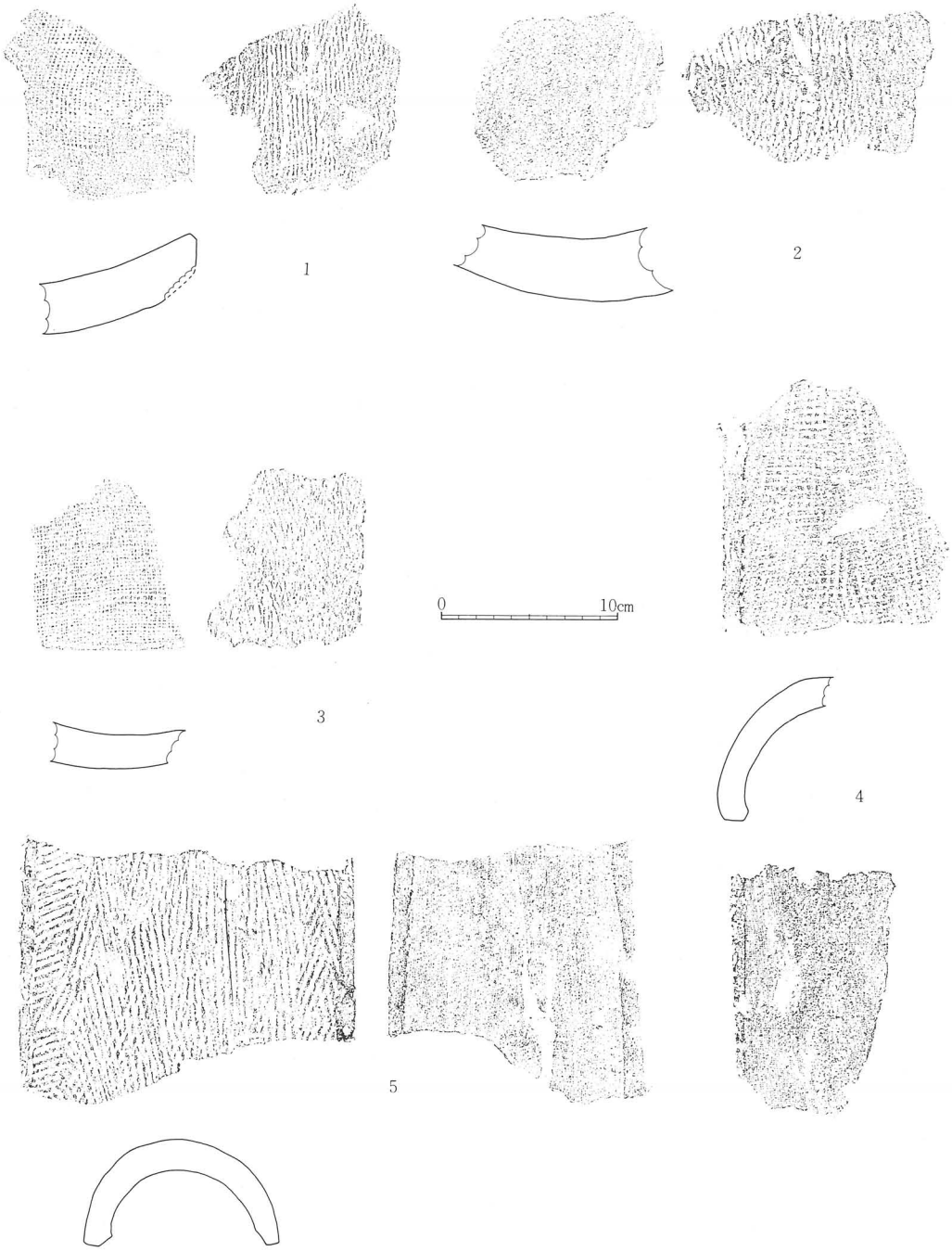
図・番	分　類	遺　　構	特		徴	備　　考
50－1	平瓦2類	Ⅲ　　区	凸面－平行叩き(横位)	凹面－糸切り痕・布目(1cm11本)	色調－灰白色・硬質・最大厚 2.7cm	写図48－2
－2	平瓦2類	14　号　住	凸面－平行叩き(横位)	凹面－糸切り痕・布目(1cm10本)	色調－灰白色・硬質・最大厚 2.1cm	写図48－4
－3	平瓦2類	表　　採	凸面（平行叩き(横位・斜位)	凹面－糸切り痕・布目	色調－灰黄褐色・軟質・最大厚 2.2cm	写図48－3
－4	平瓦2類	表　　採	凸面－平行叩き(横位)	凹面－布目(1cm10本)	色調－灰白色・軟質・最大厚 2.4cm	
－5	平瓦2類	表　　採	凸面－平行叩き(縦・斜位)	凹面－布目	色調－明黄褐色・軟質・最大厚 1.9cm	

図50　平　瓦（2類）



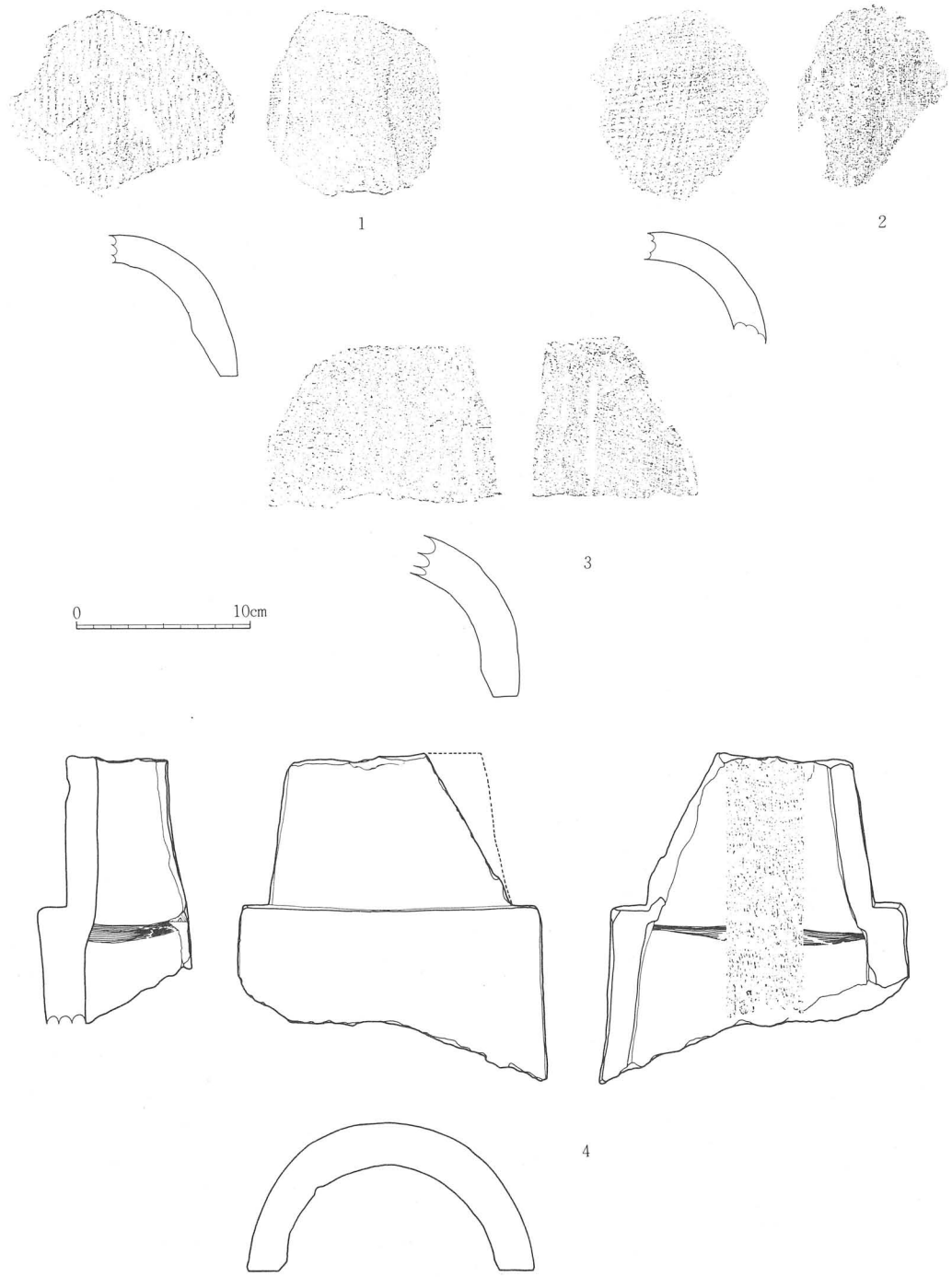
図・番	分　類	遺　　構	特		徴	備　　考
51－1	平瓦4類	10　号　住	凸面－縄叩き目(縦位)	凹面－糸切り痕・横骨痕・布目(1cm 9本)	色調－灰白色・硬質・最大厚 2.1cm	
－2	平瓦4類	10　号　住	凸面－縄叩き目(縦位)	凹面－横骨痕？・布目(1cm 7本)	色調－灰色・硬質・最大厚 2.2cm	
－3	平瓦4類	V区・10トレ	凸面－縄叩き目(縦位)	凹面－横骨痕・布目(1cm 9本)	色調－灰白色・硬質・最大厚 1.9cm	
－4	平瓦4類	12　号　住	凸面－縄叩き目(縦位)	凹面－糸切り痕・布目(1cm 8本)・ナデ、	色調－橙色・軟質・最大厚 2.6cm	写図49－2
－5	平瓦4類	12　号　住	凸面－縄叩き目(縦位)	凹面－不明　　両面に釉	色調－赤褐色・淡黄色・硬質・最大厚 3.4cm	写図49－3

図51　平　瓦（4類）



図・番	分　類	遺　　構	特		徴	備　　考
52－1	平瓦4類	表　　採	凸面－縄叩き目(縦位)	凹面－ナデ・布目(1cm5本)	色調－黄褐色・硬質・最大厚 2.6cm	
－2	平瓦4類	方形周溝	凸面－縄叩き目(縦位)	凹面－布目、両面に釉	色調－灰白色・硬質・最大厚 3.5cm	
－3	平瓦4類	方形周溝	凸面－縄叩き目(縦位)	凹面－布目(1cm6本)	色調－灰色・硬質・最大厚 2.2cm	
－4	丸瓦2類	4　号　住	凸面－平行叩き(横位)	凹面－布目(1cm11本)	色調－灰白色・硬質・最大厚 1.7cm	写図50－2
－5	丸瓦2類	11　号　住	凸面－平行叩き(縦・横位)	凹面－糸切り痕・布目(1cm9本)	色調－灰色・硬質・最大厚 1.7cm	写図50－1

図52　平瓦(4類)・丸瓦(2類)

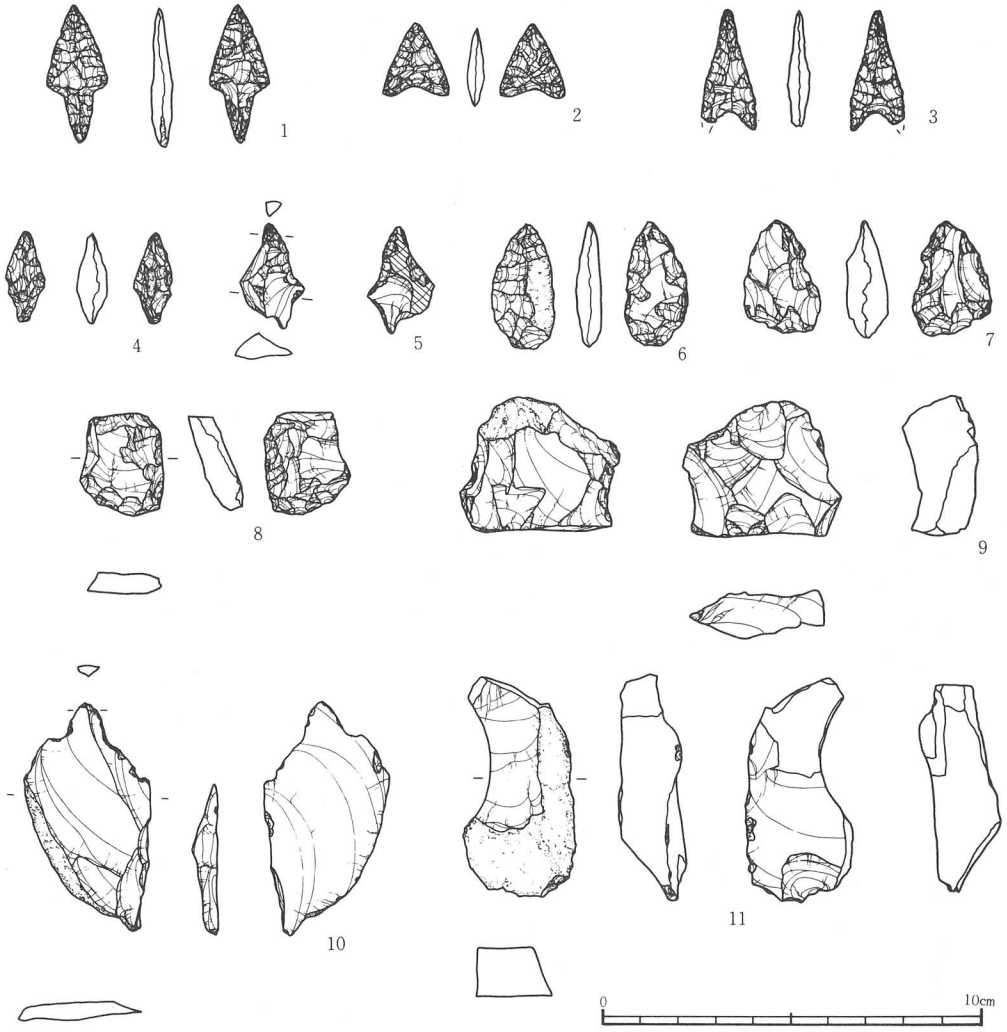


図・番	分　類	遺　　構	特		徴	備　　考
53－1	丸瓦2類	Ⅰ　　区	凸面－平行叩き(縦位)	凹面－布目(1cm10本)	色調－灰色・硬質・最大厚 2.0cm	
－2	丸瓦2類	方形周溝	凸面－平行叩き(横位)	凹面－布目(1cm10本)	色調－灰白色・硬質・最大厚 1.8cm	写図50－3
－3	丸瓦3類	表　　採	凸面－ケズリ(縦位)	凹面－糸切り痕・布目(1cm10本)	色調－灰色・硬質・最大厚 2.5cm	写図50－4
－4	丸瓦4類	10　号　住	凸面－ナデ	凹面－布目(1cm7本)	色調－灰白色・硬質・最大厚 2.5cm	写図50－7

図53　丸瓦（2・3・4類）

〈石製品〉

20点程の出土量である。多くはⅢ区包含層からの出土である。遺構内出土のものもあるが明らかに遺構に伴うものは少ない。種類として石鏃・剥片・石斧・敲石・砥石などがある。



図・番	地区	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
54 － 1	表採	石鏃	37	16	6			
－ 2	表採	石鏃	21	18	5			
－ 3	Ⅲ区	石鏃	31	15	6			
－ 4	表採	石鏃	24	11	8			
－ 5	Ⅲ区	石鏃	29	18	7			
－ 6	5号住	剥片	33	17	7			
－ 7	5号住	剥片	31	21	12			
－ 8	Ⅲ区	剥片	28	22	8			
－ 9	12号住	剥片	36	42	12			
－ 10	Ⅲ区	剥片	62	32	8			
－ 11	6号土墳	剥片	55	28	13			

（単位　mm・g）

図54　出土石製品（石鏃・剥片）

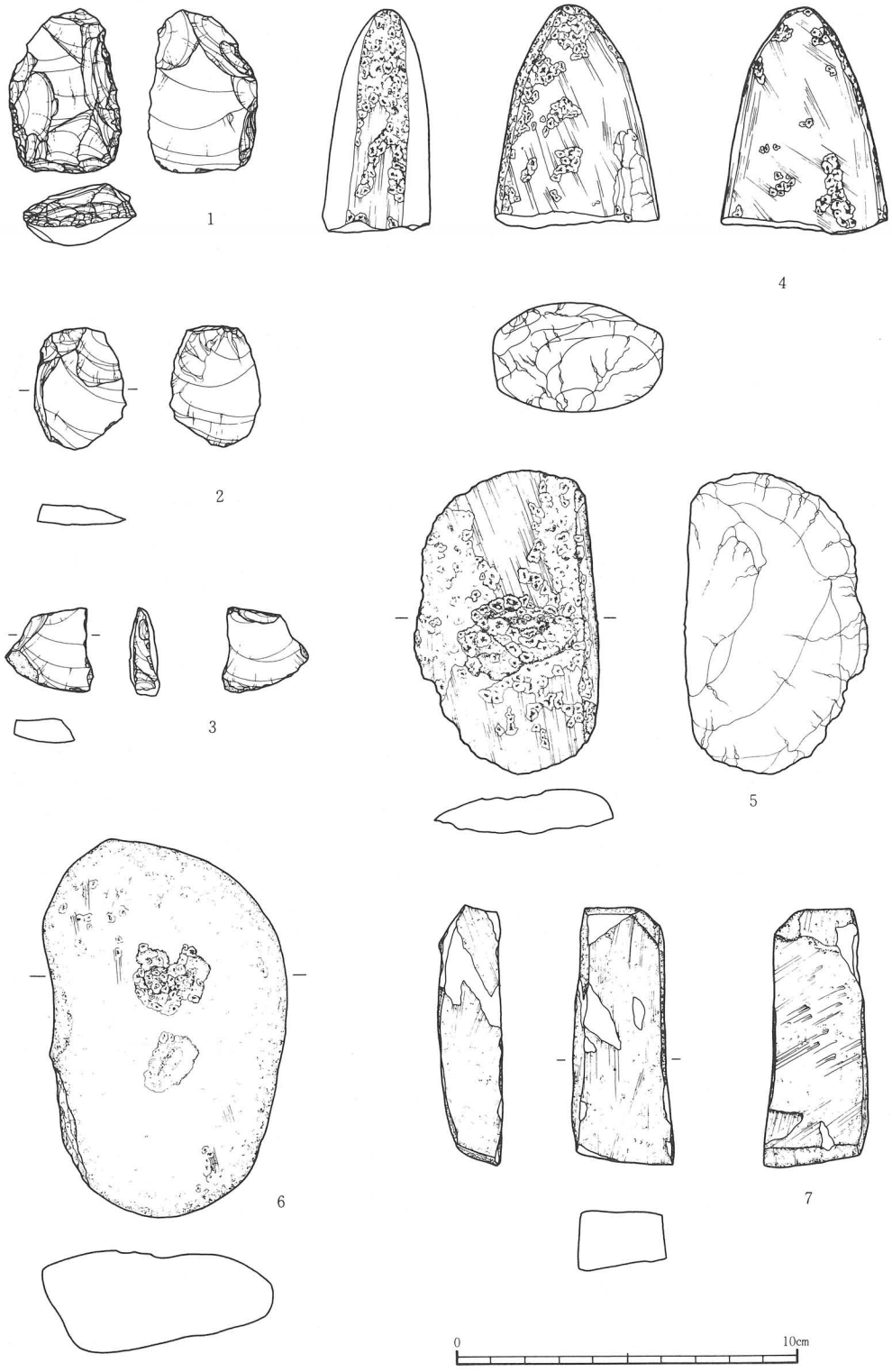


図55　出土石製品（剥片・石斧・敲石・砥石）

図・番	地区	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
55 － 1	5 号住	剝片	49	31	16			
－ 2	5 号住	剝片	36	26	6			
－ 3	5 号住	剝片	26	25	7			
－ 4	10 号住	石斧	65 ＋	50	32			貼床・7層中
－ 5	8 号土壙	敲石	89	54	12			
－ 6	6 号土壙	敲石	110	68	30			
－ 7	Ⅲ区	砥石	75	25	18			

（単位 mm・g）

図55　出土石製品観察表

〈陶硯〉

1点のみが確認されている。海部が欠損しており全容は不明であるが、陸部からみて四角形を呈すると考えられる。陸部中央部に陵が一本みられ左右を分けており、二面硯である。表面には自然釉がみられ、あまり擦られた形跡がなく使用頻度は少ないと考えられる。陸部裏面には四角形に成形された脚が二ヶ残存している。貼付と考えられる。全体成形はヘラケズリである。（図18－2）

〈施釉陶器〉

緑釉陶器が1点出土している。底部周辺の破片資料である。底面からの立ち上がりは低く、破片端部に浅い凹面がみられ口縁部へ立ち上がる変曲点と考えられ、これらから器種は皿と考えられる。高台はかるく外方へ張り出し、内側は内反気味である。高台接地面は丸くおさまっている。調整はロクロ調整のみが観察される。器面内外には緑がかったオリーブ色の釉がみられ、内面にはハケ塗りの痕跡が観察される。胎土は密で灰白色を呈している。（図40－2）

また、灰釉陶器に類似するものが数多く出土している。破片資料で器種を知り得るものはないが、類似する点のみで断定にはいたらなかった。

〈金属品〉

多くの金属品が出土しているが、形状等全体を知り得るものは鉄釘のみである。方形周溝遺構の南辺溝より一括して出土したものである。全長の確認されるものは少ないが、6～10cm程のものが多い。断面形はほぼ正方形を呈し、厚さは最大部で0.5～0.9cmを計る。釘の頂部を屈曲させ頭としている。身尻にかけて細くなっている。（図34－2～7）

Ⅶ．発見遺構について

1．住居跡

11軒確認されている。遺存状態が全体に不良で規模等を把握できないものが多い。出土遺物から所属時期をみると、古墳時代（塩釜式期）1軒・平安時代（表杉ノ入式期）6軒で残りの4軒が時期不明となっている。また、12号住居は平安時代に属するものであるが推積土状況や

出土土器から塩釜式期の住居が重複していたものと考えられる。

住居の位置関係をみると、台地上のグループと丘陵斜面のグループがみられる。大きくみると古墳時代のものが前者に、平安時代のものが後者に分けられる。また、住居跡の軸方向(東・西辺）をみると前者はN－16°～25°－Wにおさまり、後者はN－1°～10°－Eと軸方向のまとまりに違いがみられた。これらから、時代不明とした住居も位置・軸方向から古墳時代と平安時代に分けることが可能とも考えられる。このように調査区内での狭い範囲ではあるが時期によって住居の居住構成に特徴がみられる。

○古墳時代の住居跡　〈5号，1号・6号・12号旧〉

5号住居のみが確実なもので、他の3軒は上記の状況から推察されたものである。12号住のみがⅢ区の緩斜面に、他はⅠ区の平担面に位置している。住居間の重複はみられない。台地上に位置する住居（5・1・6号住）は台地頂部に並ぶかのように分布している。詳細を知り得たものは5号住のみであるため特徴等は割愛するが、当住居は確認時においてロクロ使用の土師器等が散乱状態で検出され堆積土中央付近まで確認されている。多くのものが細片であることからも廃棄としての性格をもつものと考えられる。これらから、住居廃絶時から埋没までかなりの時間が経ていることが推察された。仙台市内において塩釜式期の住居跡は安久東遺跡3軒、中田畑中遺跡1軒、伊古田遺跡2軒、下の内遺跡で1軒が発見されているにすぎない。規模は一辺2.5～5m程のものである。仙台周辺では清水遺跡、今熊野遺跡、宮下遺跡、西野田遺跡があげられる。規模は一辺4～6m程のものが大半であるが、宮下遺跡では一辺9mを超えるものが確認されている。全体として平面形は方形を基調とするが、西野田遺跡では円形を基調としたものがみられる。炉跡は多くの住居跡で検出されている。このように、当遺跡の5号住居跡は規模の面からみて大形に属することは判断されるが、確実なものが1軒のみであるためからも集落構成については不明であり、出土土器の組成にも欠落があり、特徴等をみい出すことが出来なかった。

○平安時代の住居跡　〈4号，7号，10号，11号，12号，14号，8号・9号〉

6軒の住居が確実なもので、他の2軒は推察されたものである。住居跡の位置をみると調査区北側に片寄っており、Ⅰ区の台地上には1軒も確認されず古墳時代の住居跡とは場の設定に違いがみられる。住居間の重複はみられないが、建物跡と二軒重複関係がみられ両者とも切っている。隅然の結果とも考えうるが、11号→7号→9号→4号住と一直線上に住居跡が並ぶかのように位置している。他の住居跡を含めての関連は調査範囲が狭いこともあり明らかではないが、軸方向がほぼ同一であること、住居構築場所としてより良好と思われるⅠ区台地上に存在しないことなどから、意識的な配置構成が考えられる。近接する住居跡があり細かくみると時間差が存在するが、出土遺物から大きく1つのグループとしてとらえられよう。

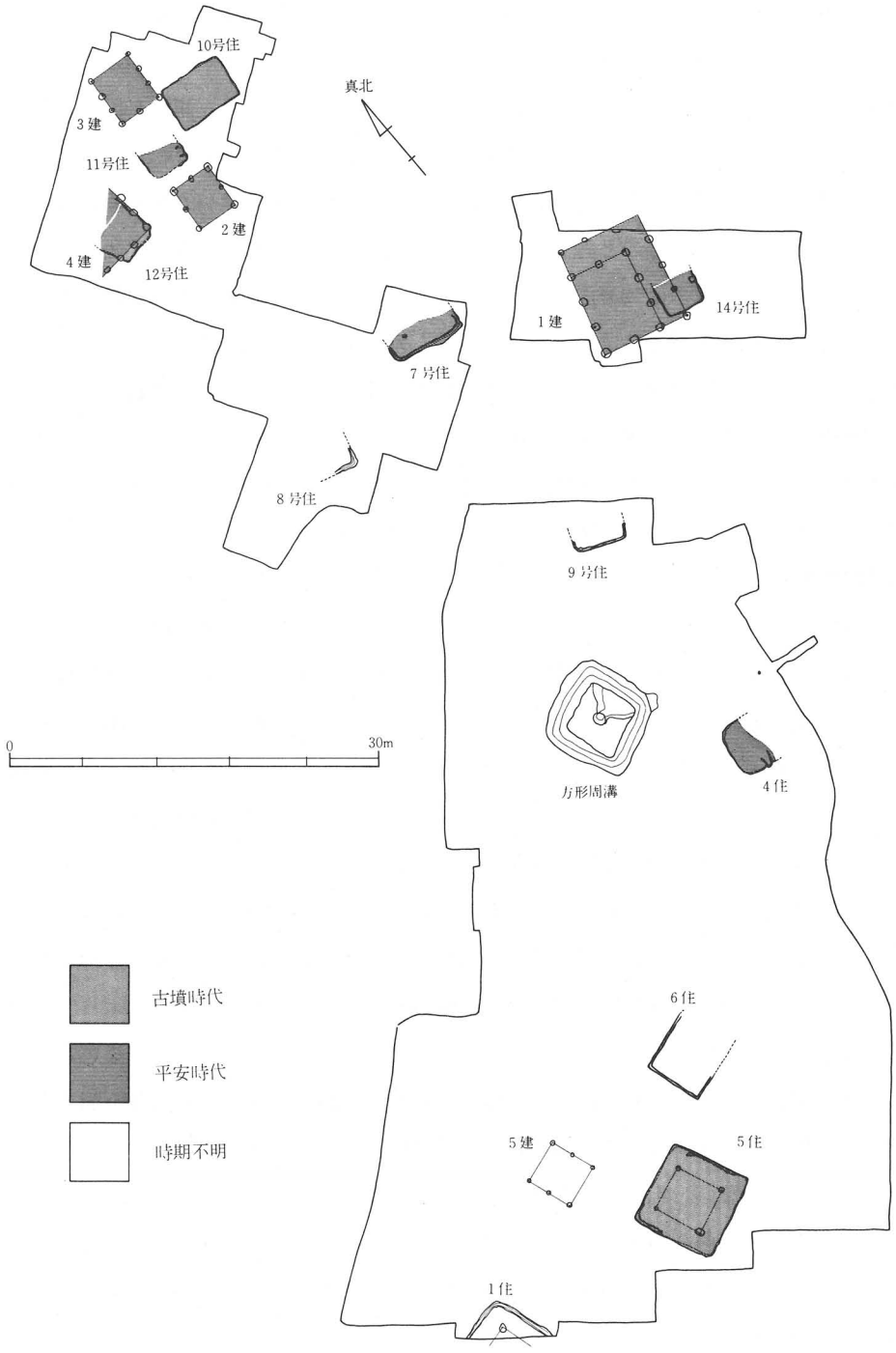


図56　住居跡・建物跡・方形周溝遺構配置

住居跡の構造は削平のため大部分が不明となっている。平面形は方形を基調し、周溝が確認されたものは７・８・９号住のみで、柱穴も７・８号住で各１基検出されたのみである。カマドを確認したものは４軒あり、南壁に附設されたもの１軒（４号住）、東壁に附設されたもの３軒（11・12・14号住）がある。カマド構築に瓦が使用されるものがあり、11号住では丸瓦２類が、14号住では平瓦２類がみられる。住居跡と瓦には所属時期に違いがあり瓦はかなりの時間を経てから再利用されたものと考えられる。他の住居跡でも各類の瓦片が出土している。住居跡の全容を知り得るものは10号住のみであるがカマドは附設されず中央部に焼け面がみられた。炉跡と考えられ、床面からは土師器坏に附着した反故紙（漆紙文書）が出土している。これらから10号住は工房跡とも考えられ、他の住居跡も含めて性格を考える上で貴重である。

住居跡の年代は出土遺物・掘立柱建物跡に切られていること、灰白色火山灰等から10世紀前半以前と考えておきたい。また、建物跡とは重複関係があり時間的な差は存在するが軸方向がほぼ同一であることなどから強い関連をもつものと考えられる。

２．建物跡

北側の傾斜面に４棟（１号～４号）、台地部に１棟（５号）の計５棟の掘立柱建物跡を確認した。平安時代の住居跡と重複する建物跡が２棟みられる。傾斜面に位置する建物跡の桁方向はN－２°～14°－Eにおさまり、台地部の５号建物跡がN－19°－Wと桁方向に違いがみられる。

１号～４号建物跡は桁方向から大きく１つのグループとしてとらえた。２号・３号建物跡は桁方向が同一で、さらに直線上に並ぶかのように位置している。規模の確認されるものは全て南北棟で、２間×２間・２間×３間・３間×４間で間仕切りまたは廂をもつものがある。柱穴掘り方の形状は円形が主体を占め、方形のものは若干みられるのみである。規模は径40～70cm程で全体的に小規模であるが、方形の柱穴は円形に較べて大形である。柱度跡は10～20cm程で円形である。これらの建物跡群は上述のごとく傾斜面に位置しており、場所によっては地山面での確認ではあるが１ｍ弱程の比高差がある。住居跡と同様に地形に順じていない建物配置が考えられる。調査の状況から発掘範囲外に延びる可能性が高く全体的なものは不明であるが、建物配置に規格性が存在するものと考えられる。建物跡の性格は確認数も少なく現在のところ不明と言わざるおえない。年代は各建物跡が同時期である確証はないが、住居跡を切っていること、灰白色火山灰を含む層を切り込んでいるものがあることから10世紀前半以降であると考えられるが、住居跡出土土器と類似するものが柱穴内より出土しており、上記の年代からさほど下らないものと考えられる。

５号建物跡は他の建物跡と場を違えており、柱穴の規模も小さい。古墳時代の住居跡とほぼ同軸方向であり、柱穴内より塩釜式期の壺破片が出土している。これらから断定はしがたいが塩釜式期の建物跡とも考えうる。

３．方形周溝遺構

方形に溝が巡ぐり台状部中央に土壙が位置しており、形態としては従来知られる方形周溝墓に類似するものである。土壙内からの遺物はなく、周溝内より土師器・須恵器片、瓦片、鉄釘が出土している。全て堆積土中からのもので底面からの出土はない。鉄釘は周溝南辺部上層の黒色土中に一括して出土したものであり後世のものとも考えられる。時期は周溝部より出土している土師器・須恵器片より平安時代と考えておきたい。性格は不明と言わざるおえないが形態等から墓跡としての性格も考えうるものである。

４．土壙

65基の土壙が検出されている。時期の判明するものはごく少数であるが、出土遺物から弥生時代・平安時代のものが確認されている。詳細はⅤ(4)で記したが、６号土壙からは弥生土器片・剝片石器・礫・炭化物が出土しており、状況から弥生時代に属するものと考えられた。性格については明らかに出来なかった。２号・５号・７号・13号・54号・63号土壙では焼面又は焼土が確認されている。特に２号土壙は底面全面に焼面が検出されている。同様な遺構がみられる遺跡に上新田・岩切鴻ノ巣・南小泉遺跡があり、「土器焼成施設」としての性格があたえられている。２号土壙からは出土遺物がみられなく上記の性格をもつものとは断言し得ないが「焼成遺構」としての性格は考えられる。時期としては灰白色火山灰が上層にみられることからも10世紀前半以前の年代が考えられる。その他として、55号・58号土壙からは多量の遺物が出土している。完形品になる土器はなく、出土状況にもまとまりはみられない。これらから廃棄としての性格が考えられる。

Ⅷ．墨書文字について

今回の調査によって墨書は３種類、計10点確認されている。昭和56年度の調査では「宗」と判読可能な墨書文字が確認されており、当遺跡では４種類11点の墨書が出土していることになる。全て土師器坏の体部に書かれている。判読できないものもあるが全て文字と考えられる。

墨書の種類には「宋」（図41－１～８）・「天」（図43－２）・「？」（図23－１）がある。図23－１は土器が欠損し、さらに摩耗しているため判読不能である。

この中で特異なものとして「宋」がある。筆の入れ方・ぬき方からみて上下については問題はないが、くずし文字と考えられ判読不明となっている。この墨書された土師器坏は小ピットからの出土で、10個体の坏が確認されている。そのうち９個体が重なり合い、８個体に上記の墨書が書かれていた。このような出土状況（完形品の土器が９枚重なり合っている・判読不明のくずされた文字）から小ピットは呪術的性格をもつものとも考えられる。同一筆跡であるかは検証し得なかったが、筆の入り方・文字の太さには違いがみられた。土器表面が摩耗し墨が

かすれた部分はあるが、全体的に流麗な筆のはこびである。

他に「天」・「宗」の墨書があるが、一文字であり、同種の文字の例もみられなく、現時点では意味合いについては不明と言わざるをえない。なお、年代は土師器坏の器形の特徴から、平安時代でも後半のものと考えられる。

図57　墨書文字書体

Ⅸ. ま と め

今回の調査で得られた成果は次のとおりである。

○燕沢遺跡は台ノ原・小田原丘陵東端部の台地に位置する。調査地点は遺跡北西部の馬背状に延びる台地平坦部とそれに続く傾斜面である。遺構は台地平坦部・緩斜面で確認され、住居跡11軒・掘立柱建物跡６棟・方形周溝遺構１基・土壙65基・溝跡８条・溝状遺構14条・ピット多数が発見されている。遺物には縄文土器・弥生土器・土師器・赤焼土器・須恵器・緑釉陶器・陶硯・礫・石器・砥石・鉄釘・漆紙文書がある。これらの遺物・遺構から大きく下記の時期に分けることができる。

１期（縄文時代）：遺構は確認されていないが、Ⅲ区遺物包含層から早期・前期の土器片や石器が出土している。遺跡南西部の台地上からは縄文土器片が数多く表採されており遺

構の存在も考えられる。

2期（弥生時代）：土壙（6号）が1基確認されている。弥生土器片・石器・礫が出土しているが時期は不明である。表採品であるが桝形囲式の土器片がある。昭和56年度調査の1号土壙からは石庖丁が1点出土している。

3期（古墳時代）：塩釜式期の住居跡が確認されている。Ⅰ区南側の台地頂部とⅢ区傾斜面に位置し、不確定なものを含めて4軒確認されている。Ⅲ区遺物包含層より若干量の同時期の土師器も出土している。状況からⅠ区南側の台地上に集落の場の存在が考えられる。

4期（奈良時代）：遺構は確認されていない。出土瓦の分類で多賀城創建期以前・多賀城創建期に比定される瓦（平瓦1・2・3a、丸瓦1・2）があり、4期を設定した。

5期（平安時代）：住居跡・掘立柱建物跡・土壙・ピットが確認されている。調査区中央部から北側の斜面に立地するが、さらに北側へ遺構が広がるものと考えられる。出土遺物の多くはこの時期のものであり、漆紙文書や墨書土器もみられる。住居跡と掘立柱建物跡を主体とすると二時期に細分される。

5a期：住居跡群で構成される。出土遺物や灰白色火山灰の検討から10世紀前半以前の年代が考えられる。

5b期：掘立柱建物跡群で構成される。住居跡を切っており、灰白色火山灰を含む層を切り込んで構築された建物跡があり10世紀前半以降の年代が考えられる。

○出土遺物を歴史時代に限定してみると、瓦は奈良時代から平安時代にかけてのものがみられるが、土器類は平安時代でも後半のものが主体を占めており、両遺物の時期にギャップがみられる。今後の調査で奈良時代に位置づけられる土器が発見される可能性もあるが、遺構群の広がりとともに課題となるものである。また、墨書された土師器坏が重なり合った状態で確認されたが、以前の調査で同様なものが検出された報告がある。墨書の有無の確認はないが、今回の発見を含めて遺跡の性格を考える上で一助となるもの(註18)と考えられる。

○当遺跡は縄文時代から平安時代にわたる遺跡であることが再確認されたが、中心をなすものは平安時代の遺構群である。性格として、従来言われてきた寺院跡・官衙遺跡かとの結論は出し得なかったが、規則性のみられる遺構や出土遺物、特に漆紙文書の発見は一般集落からの出土もみられるが多くは官衙遺跡からのもので、これらから官衙施設としての考えを一歩進め得るものであり(註19)、官衙（国家的施設）としての性格の一端をうかがいみることが出来たものと考えられる。さらに、遺構の広がりは台地上や斜面にとどまらず北側の沖積地面に延びているものと判断され、広範囲にわたる遺構群の存在が考えられる。

X．付　　章

1．10号住居跡出土の漆紙文書について

東北歴史資料館　吉　沢　幹　夫

今回出土した漆紙文書は全体で6.0×5.0cmほどの大きさであるが、一枚の紙が3段にコの字状に折りこまれていて、土器面に接していた部分は複雑に折れ曲がるしわくちゃの状態である。上面の部分もしわがあるが下面ほどではない。ただし、気泡の抜けたような小さな凹みが多数存在する。この漆紙文書を肉眼でみても右側上方に墨痕が認められる。これをさらに赤外線テレビカメラを通して読むと次のようになる。

□　婦　□　　□

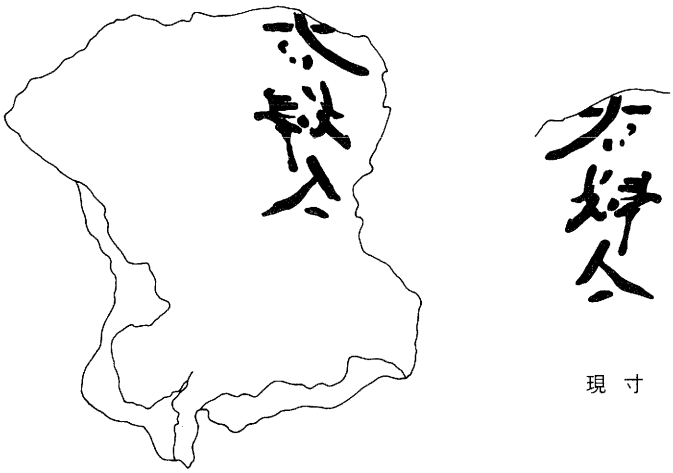
右カ　　人カ　　合カ

字の大きさは約1cm画で細めの筆跡である。第3字より下方については墨痕らしきものもあり、また、第1字の上方も欠けており、現在、目にしている部分が行のはじまりであるのか終りの部分なのかについては決定することができない。

文字は左文字、すなわち紙背から文字を見ていることになる。しかし、肉眼でも墨痕が見られるほど紙質部分の残りは薄いと考えられ、表面に触れると墨が飛ぶおそれがある。第1字は当初「式」あるいは「弍」かと思われたが、第2字目の「帰」が明らかに左文字であることがわかるため、第1字は「右」ではないかと考える。第2字は「婦」と読んだが、ヨの上に竹あるいは艹かんむりがあるようにも見えた。しかし、凹みのための陰影と思われる。第3字は「人」と見える。「人」の字は存在するが、これ単独では1字となるものではない。従って第3字は「人」と次の字の頭が見えているのか、あるいは「合」などの可能性もありうるが、「人」の下部の墨痕は確認できない。

さて、婦人と読むとすれば、名例律婦人有官位条、獄令決大辟条、犯徒応配居役者条などに見られるように、婦人という語は古代でもすでに存在していた。ただし、古代の文献や木簡などからは「婦人」の用例は今のところほとんどなく命婦や節婦など某婦という用い方がなされている。従って、第3字は「人」よりも「合」の可能性が高いことになる。第3字を「合」とすると、右婦合……となり、文章の面から考えて婦の合計を示すという意味になる。とすれば、書式から考えてこの行の右側には婦の歴名があるはずであるが、この漆紙文書では墨痕はない。このことはこの行に至る前文がないということであるから、この行が文のはじめか、あるいは歴名の位置が異ったところにあるということを示すものといえよう。ただし、第3字を「合」と確定するわけではない。

ところで、この漆紙の出土は燕沢遺跡の性格を考えていくうえで、貴重な資料となる。漆紙文書は下窪遺跡や小染川遺跡のように必ずしも官衙や寺院とは考えられないところからも出土しているが、遺構など総合的に考えて燕沢遺跡を官衙・寺院跡とみる見方を強めることになろう。もしそうであれば、今後の漆紙文書の出土が期待できるわけである。



漆紙文書実測図

2．燕沢遺跡の灰白色火山灰

東北大学農学部　庄　子　貞　雄
山　田　一　郎

燕沢遺跡の火山灰の１次鉱物組成を表１に、火山ガラスの形態を表２にしめした。比較のため、志波姫町掘口の御駒堂遺跡にみられた灰白色火山灰についてもしめした。御駒堂遺跡の灰白色火山灰は厚さ30cmに及ぶ所もあり、基準にするのに好都合なものである。

軽鉱物含量は、燕沢遺跡の火山灰も御駒堂遺跡のものも同様96％と高い。次にその組成をみると、無色火山ガラスが大半で、少量の斜長石、風化粒、石英が含まれている。この組成は御駒堂遺跡の灰白火山灰と比較すると、石英含量がやや高いのを除き極めて類似している。また、火山ガラスの形態は燕沢遺跡の火山灰はスポンジ状》顆粒状》扁平状〉繊維状の順となり、ほぼ御駒堂の灰白色火山灰と同じ結果である。

一方、重鉱物組成をみると、燕沢遺跡の火山灰と御駒堂遺跡の灰白色火山灰にはかなりの違いがみられる。御駒堂遺跡の灰白色火山灰の重鉱物含量は、シソ輝石》磁鉄鉱〉普通輝石》角閃石の順であるのに対し、燕沢遺跡の火山灰は磁鉄鉱〉シソ輝石》角閃石〉普通輝石〉ジルコ

ンである。ジルコンはテフラ中に含まれることは極めて稀である。また、角閃石含量も宮城県内の他の灰白色火山灰に比べ、高い値いである。

以上のことから、燕沢遺跡の火山灰は、灰白色火山灰に他の堆積物が若干混じったものであると考えられる。

表1　灰白色火山灰の1次鉱物組成 (0.1～0.2mm部分)

	重鉱物組成(粒数%)					軽鉱物組成(粒数%)				重鉱物含量(重量%)
	シソ輝石	普通輝石	角閃石	磁鉄鉱	ジルコン	黒色火山ガラス	斜長石	石英	風化粒	
燕沢遺跡	39	4	10	46	1	71	14	5	10	4
御駒堂遺跡	58	21	1以下	22		76	15	1以下	8	3

表2　火山ガラスの形態 (粒数%)

	スポンジ状	繊維状	扁平状	顆粒状
燕沢遺跡	53	9	10	29
御駒堂遺跡	72	5	1	22

参　考　文　献

(註1)　石　田　　茂　作：「仏教の初期文化」岩波講座『日本歴史』　1934年

伊　東　　信　雄：「燕澤古瓦出土地」仙台市史3「燕沢古瓦出土遺跡」『仙台の文化財』宝文堂

(註2)　渡　部　　弘　美：『燕沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第39集　1982年

(註3)　氏　家　　和　典：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会　1957年

(註4)　阿　部　　義　平：「東国の土師器と須恵器」『帝塚山考古学』　1968年

(註5)　桑　原　　滋　郎：「ロクロ土師器杯について」『歴史』第39輯　東北史学会　1969年

(註6)　森　　貢　喜：『水入遺跡』・『佐内屋敷遺跡』宮城県文化財調査報告書第71集　1982年・第93集　1983年

(註7)　渡　部　　弘　美：『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第55集　1983年

(註8)　土岐山　　武：『安久東遺跡』宮城県文化財調査報告書第72集　1980年

(註9)　白　鳥　　良　一：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所　1980年

(註10)　原　田　良　雄　編：『東北古瓦図録』雄山閣　1974年

(註11)　宮城県多賀城跡調査研究所：『多賀城跡』昭和53年度発掘調査概報　1978年

(註12)　進藤秋輝・高野芳宏・渡辺伸行：「多賀城創建瓦の製作技法」『研究紀要Ⅱ』宮城県多賀城跡調査研究所　1975年

(註13)　佐々木　　茂　禎：「宮城県古川市伏見廃寺跡出土の古瓦」『歴史考古』第19・20合併号　1971年

(註14)　丹　羽　　茂：『三輪田遺跡』古川市文化財調査報告書第4集　1980年

(註15)　古窯跡研究会：「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」『陸奥国官窯跡群Ⅱ』　1976年

(註16)　新庄屋　　元　晴：『角田郡山遺跡』角田市文化財調査報告書第3集　1980年

(註17)　進　藤　　秋　輝：「多賀城系古瓦の二系統」『研究紀要Ⅴ』宮城県多賀城跡調査研究所　1978年

(註18)　註1に同様・仙台市史3

(註19)　平川南・後藤勝彦・白鳥良一：「宮城県下窪遺跡の漆紙文書」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所　1980年

興　野　　義　一：「大木式土器理解のためにⅠ～Ⅳ」『考古学ジャーナル』　1967～1968年

岡田茂弘・桑原滋郎：「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調研究所

木　村　浩　二他：『郡山遺跡Ⅰ～Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第29・38・46集　1981～1983年

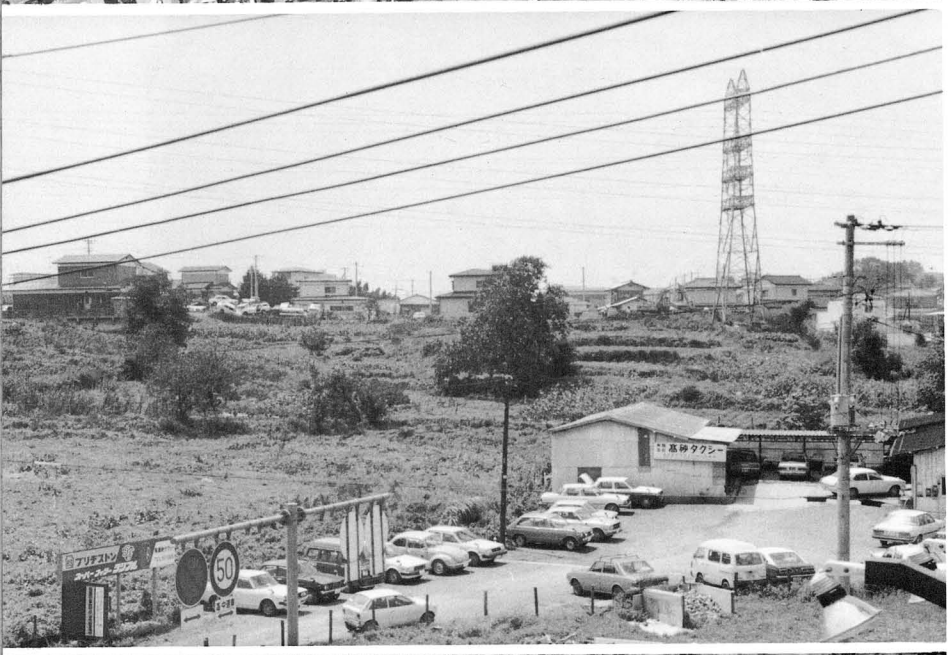
宮城県教育委員会：『亀岡遺跡発掘調査報告』鳴瀬町文化財調査報告第１集　1977年
岩渕康治・田中則和：『安久東遺跡発掘調査概報』仙台市文化財調査報告第10集　1976年
青沼一民・長島栄一：『中田畑中遺跡』仙台市文化財調査報告書第53集　1983年
篠　原　　信　彦他：『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第69集
1984年
丹羽茂・小野寺祥一郎・阿部博志：『清水遺跡』宮城県文化財調査報告書第77集　1981年
宮城県教育委員会：『今熊野遺跡』宮城県文化財調査報告書第33集　1973年
宮城県教育委員会：『宮下遺跡』名取市文化財調査報告書第１集　1975年
丹羽茂・柳田俊雄・阿部恵：『西野田遺跡』宮城県文化財調査報告書第35集　1974年
石　田　　広　美他：『山田水呑遺跡』日本道路公団・山田遺跡調査会　1977年
宮城県教育委員会：『宇南遺跡』宮城県文化財調査報告書第59集　1979年
塩　野　　博：「土器（土師器）製作遺跡について」『月刊文化財』　1979年

写　真　図　版

図版１　遺跡周辺航空写真（昭和32年、○印 燕沢遺跡）

図版 2
遺跡航空写真

① 調査対象地区
② 56年度調査区



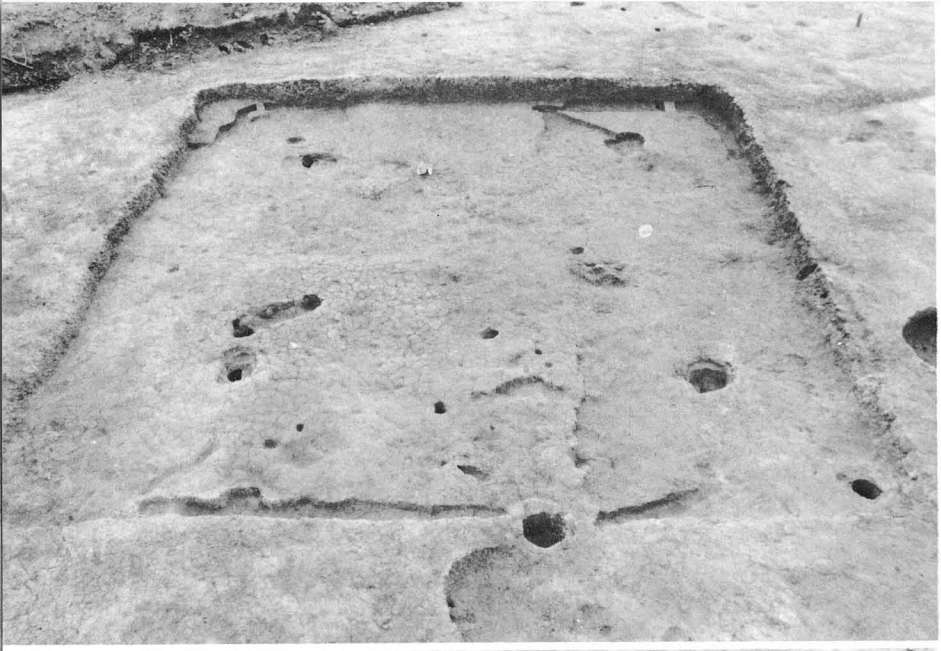
3
遺跡遠景（北より）

4
1号住居全景

図版 5
1 号住居断面

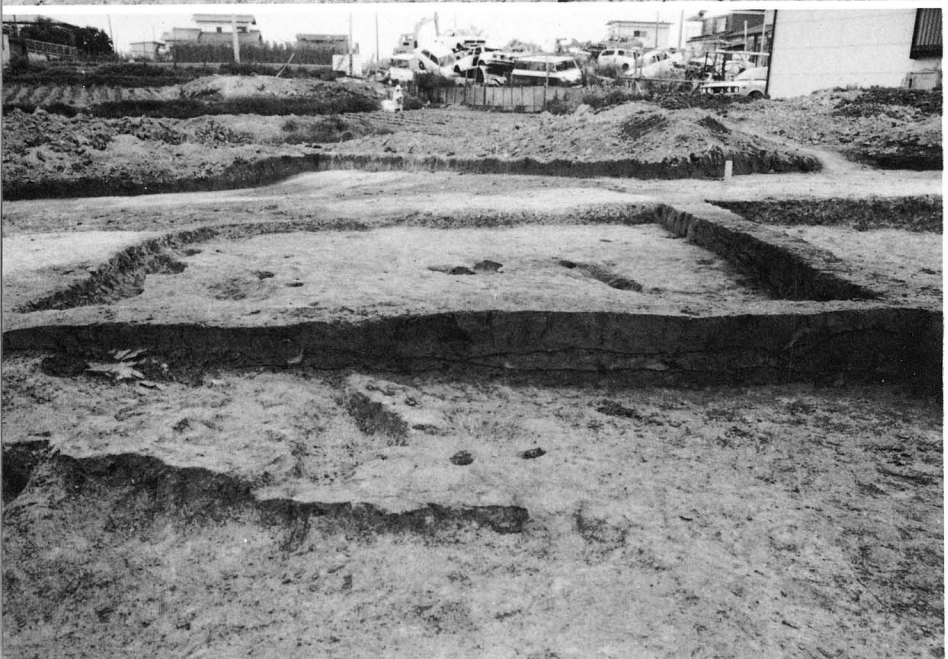
6
4 号住居全景

7
4 号住居断面



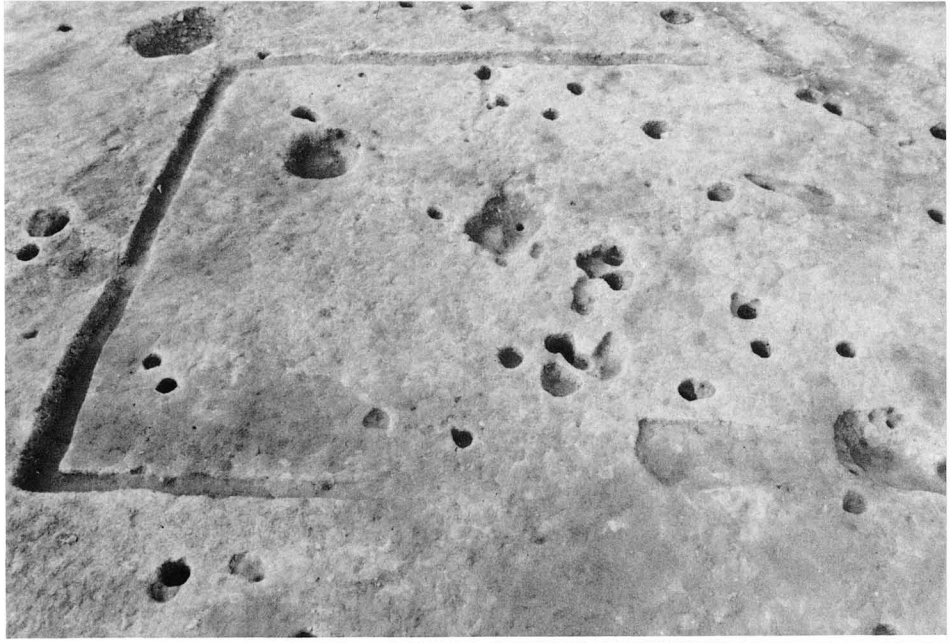
図版 8
5 号住居全景

9
5 号住居遺物出土状況

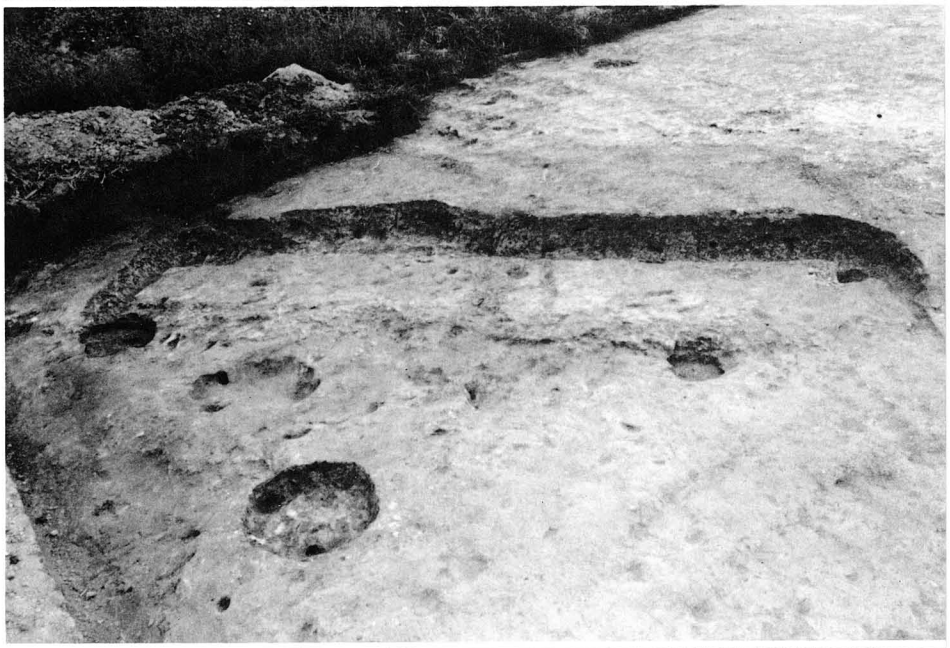


10
5 号住居断面

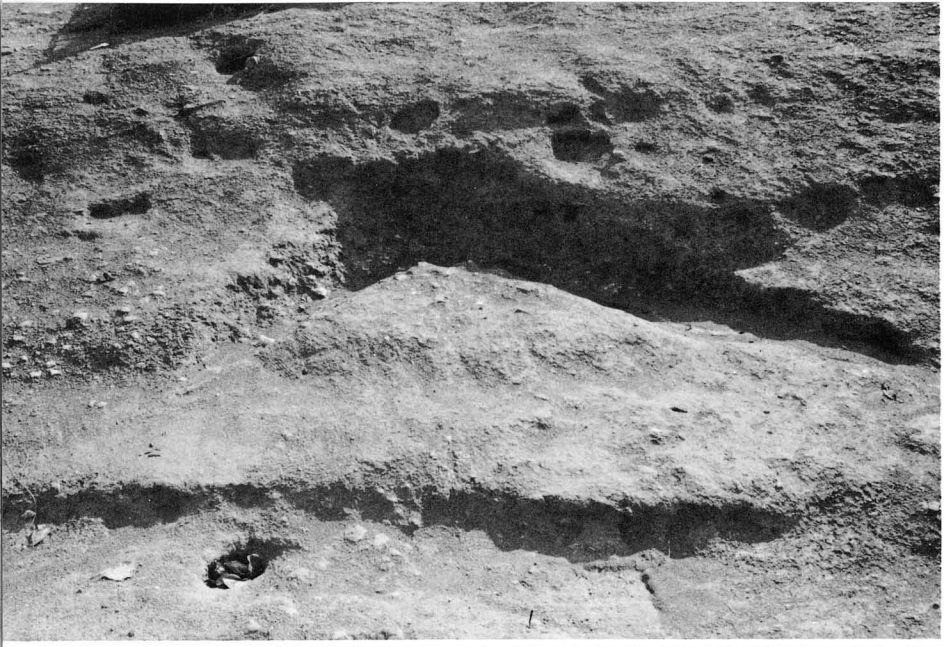
図版11
6号住居全景



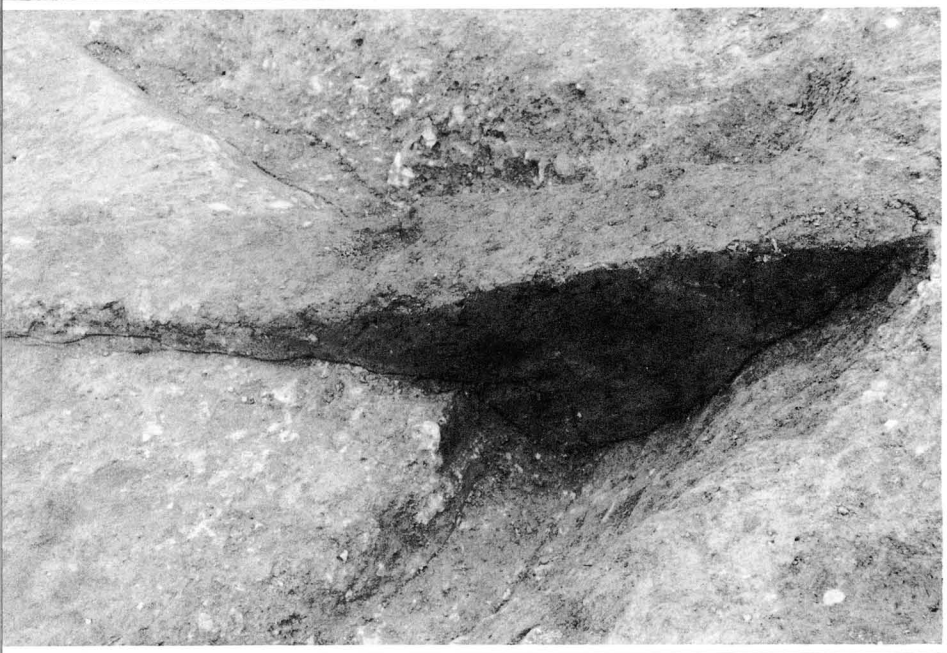
12
7号住居全景



13
7号住居断面



図版14
8号住居全景

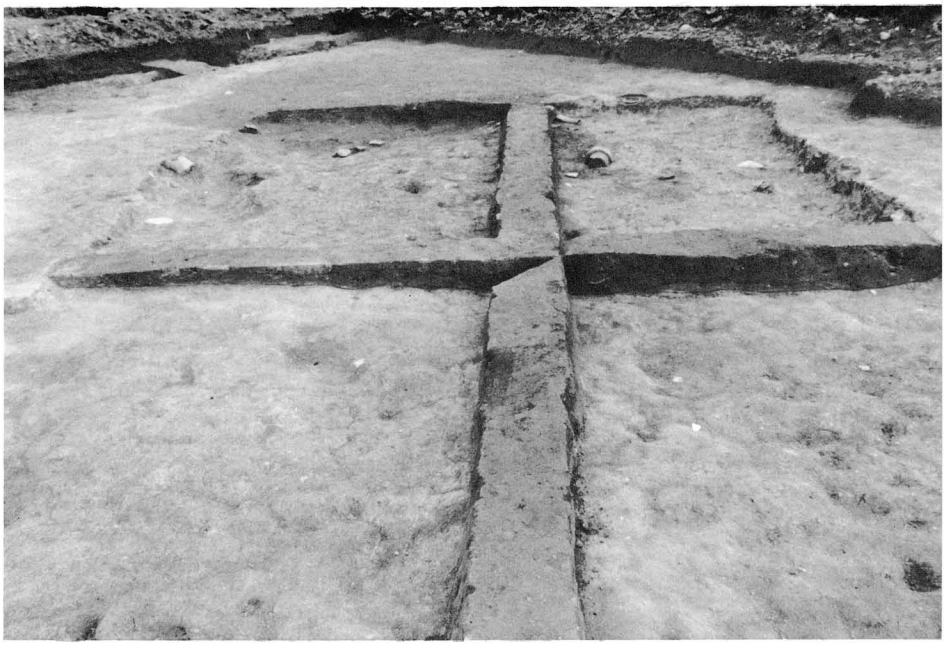


15
8号住居断面

16
9号住居全景

図版17
10号住居全景

18
10号住居断面



19
11号住居カマド全景

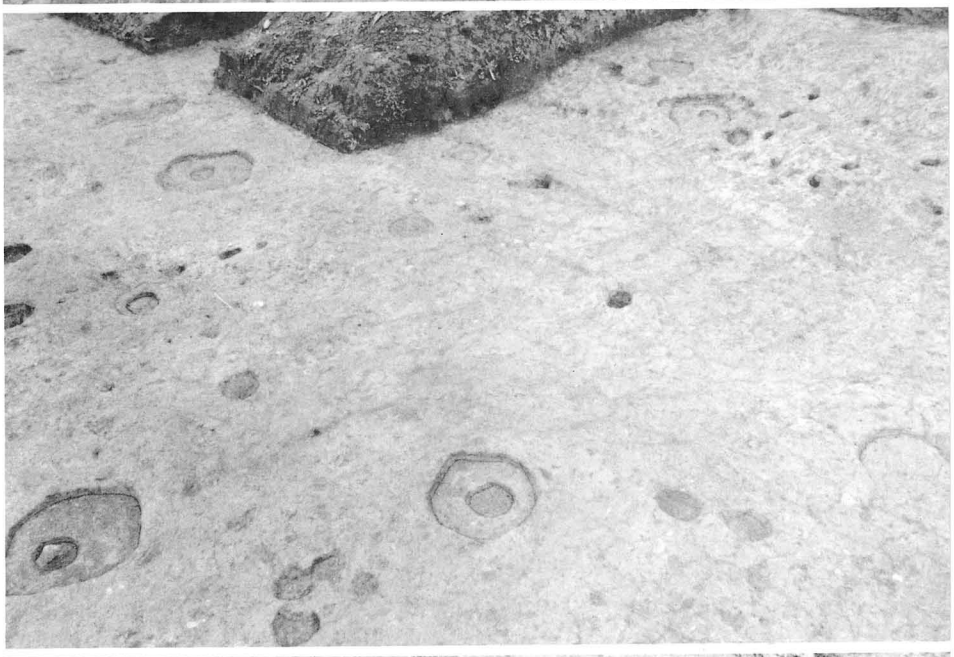
図版20
12号住居全景

21
14号住居全景

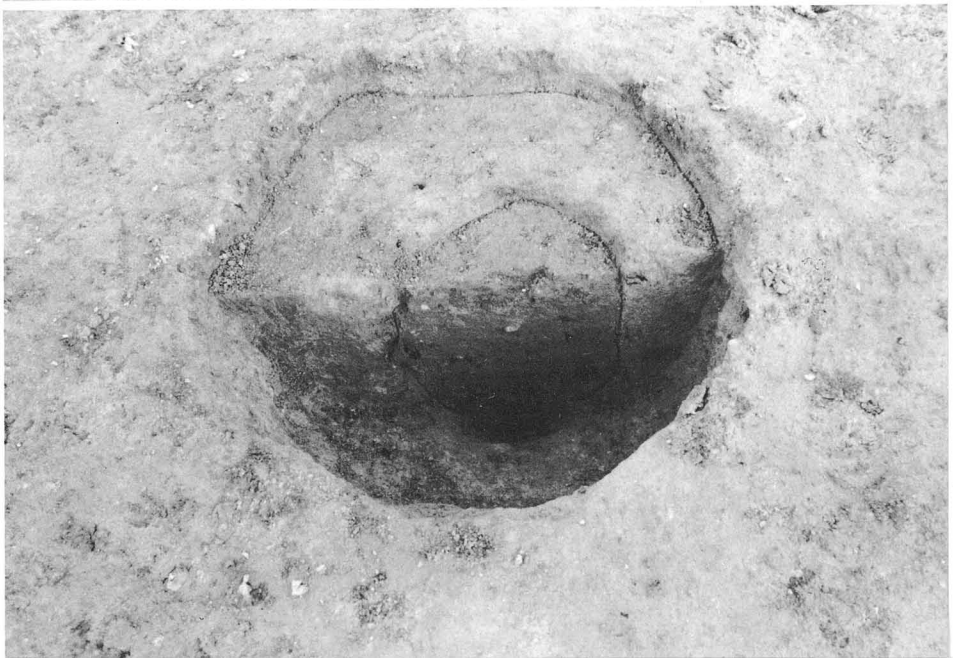
22
1号建物全景

図版23
1号建物 P. 4

24
2号建物全景



25
2号建物 P. 2

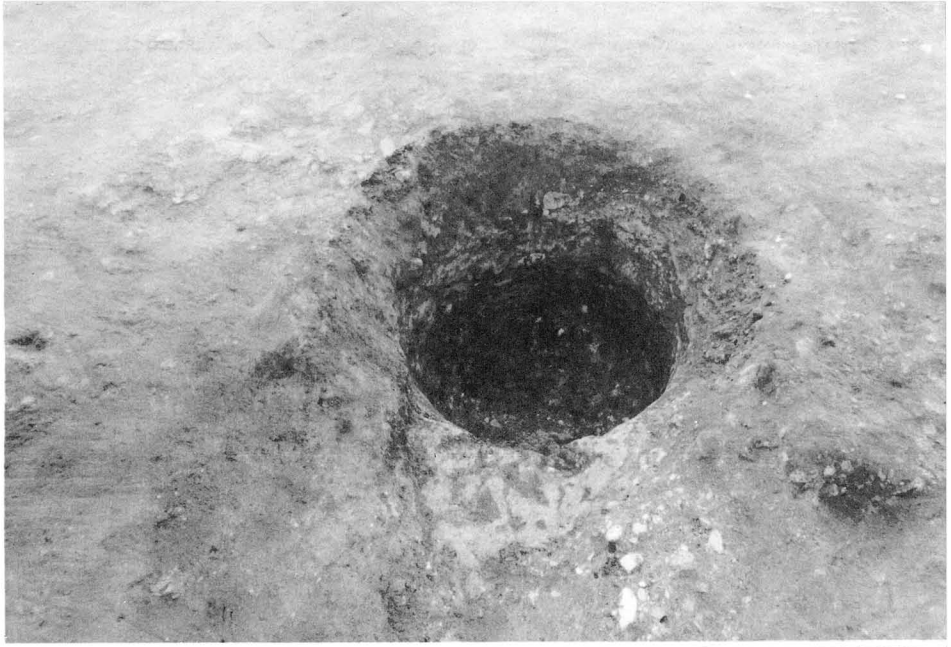


図版26
3号建物全景

27
4号建物全景

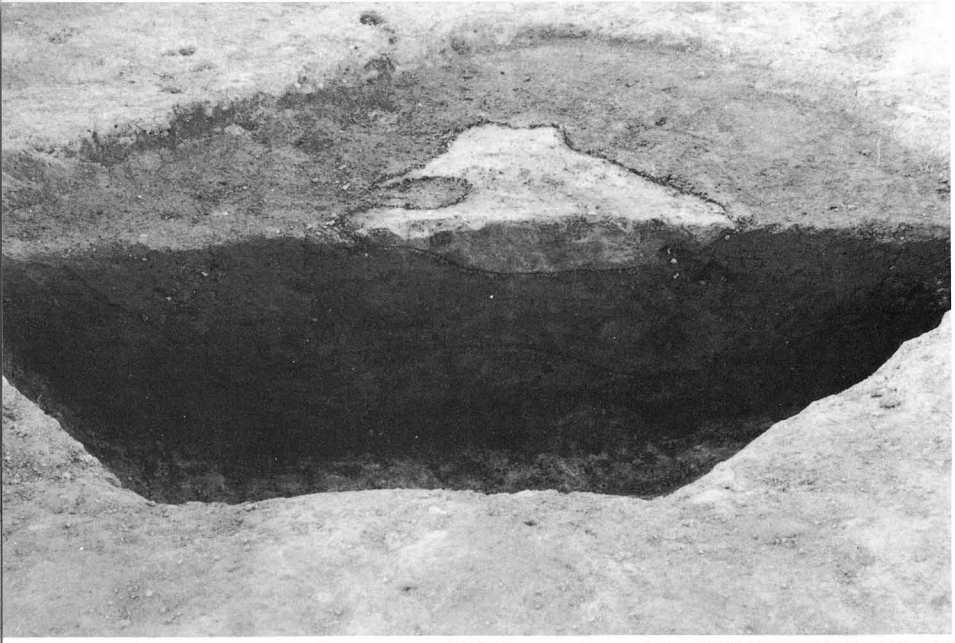
28
方形周溝全景

図版29
方形周溝内土壙全景

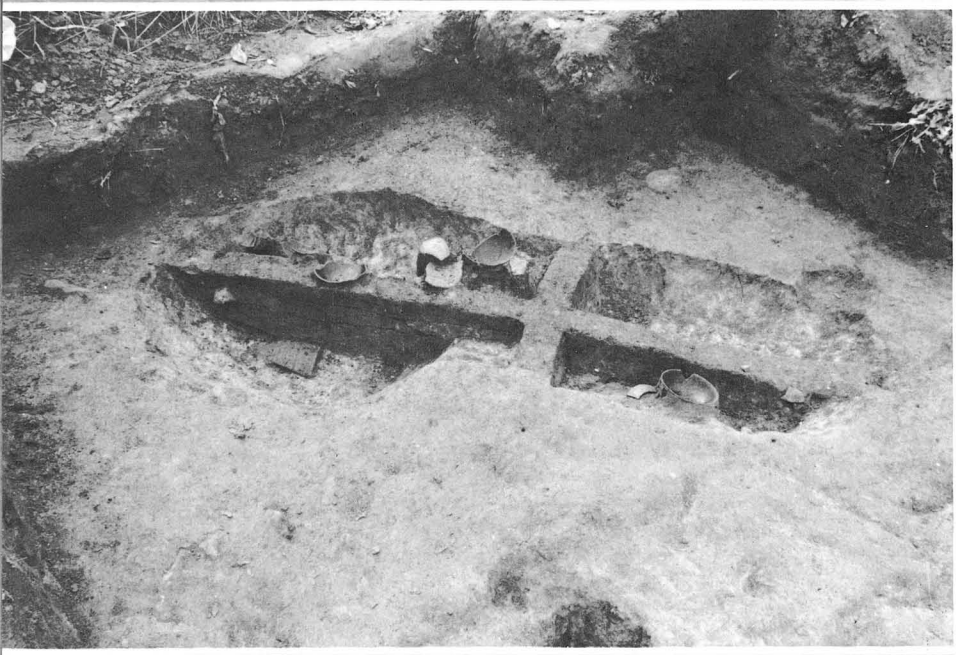


30
方形周溝断面

31
2号土壙全景



図版32
7号土壙全景



33
55号土壙遺物出土状況

34
3号溝状遺構全景

図版35
4号溝状遺構全景

36
Ⅴ区7トレP232
墨書土器出土状況

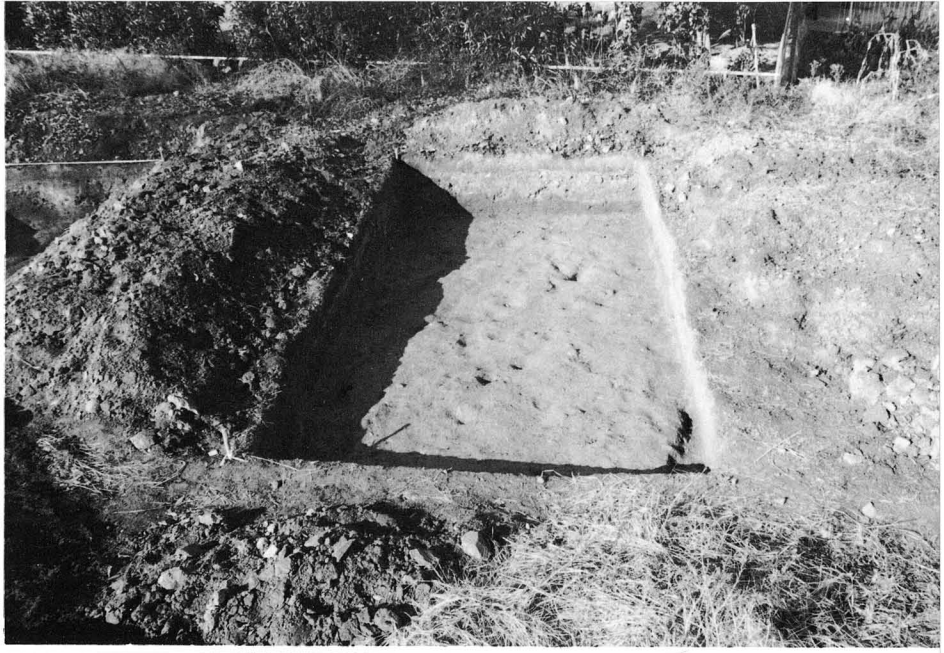
37
Ⅰ区中央部全景

図版38
Ⅰ区西側全景

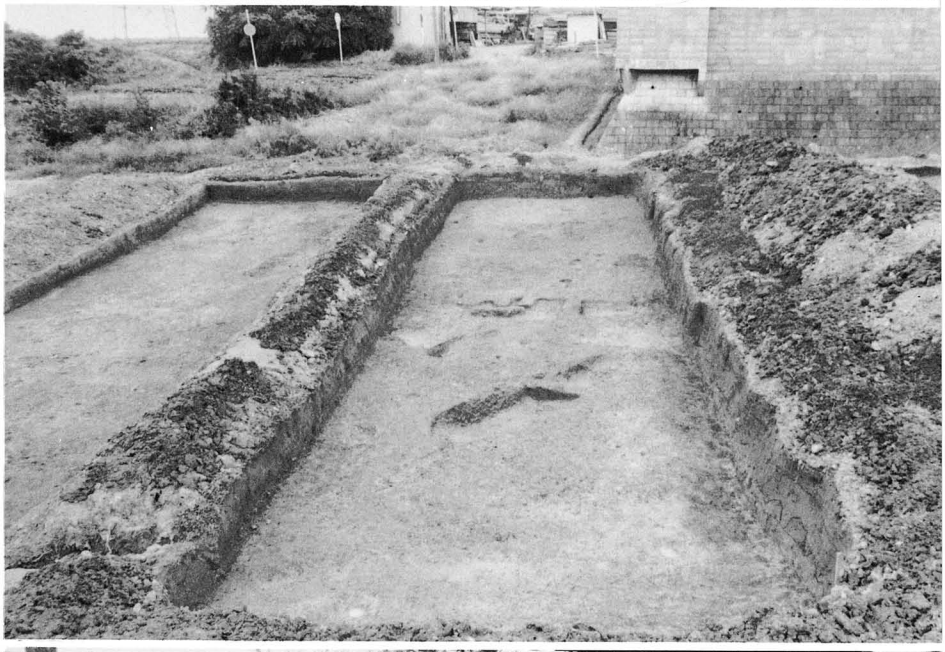
39
Ⅰ区東側全景

40
Ⅲ区全景

図版41
Ⅳ区D—14トレンチ



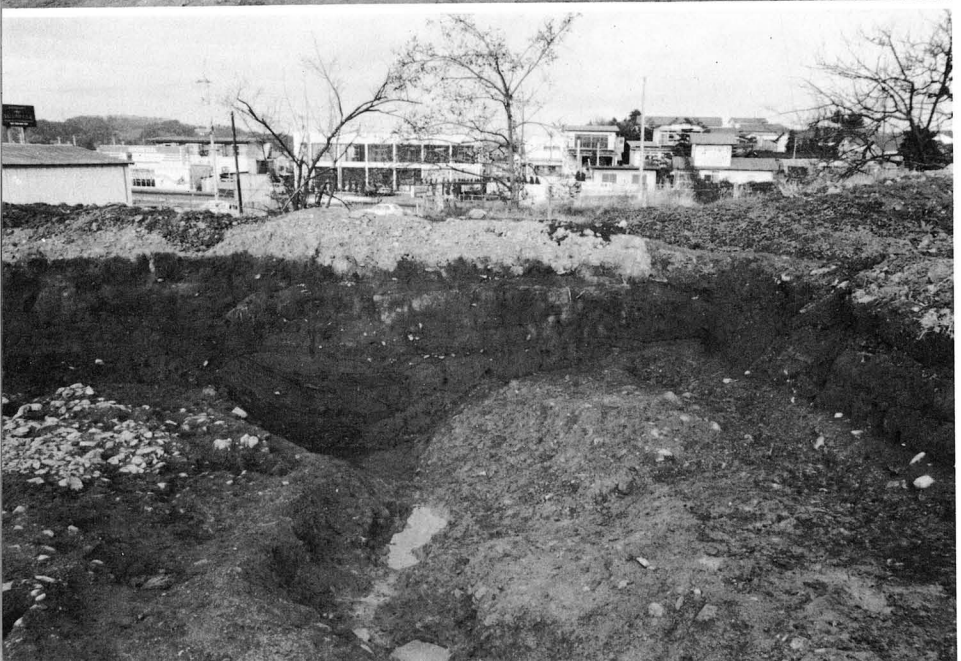
42
Ⅴ区9・10トレンチ



43
Ⅲ区南壁

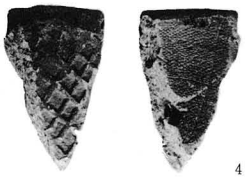
図版44
Ⅲ区遺物包含層

45
Ⅴ区17トレ北壁北側

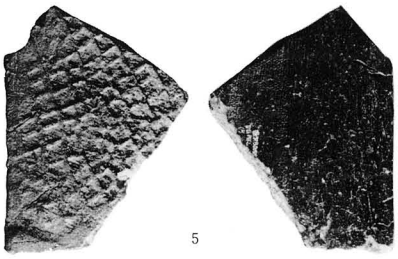


46
Ⅴ区17トレ北壁南側

1



4



5

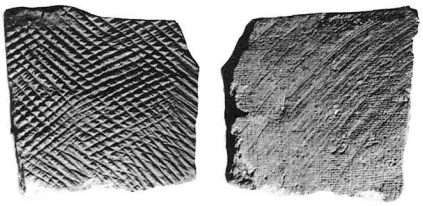
2

6

3

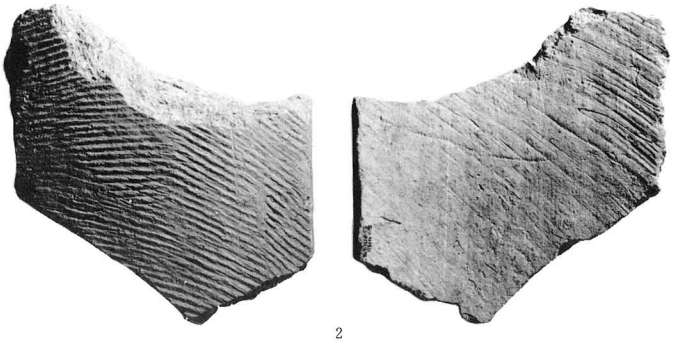
1　図48－1
2　図48－2
3　図48－3
4　図48－4
5　図49－3
6　図49－4

図版47　出土遺物(軒平瓦・平瓦)

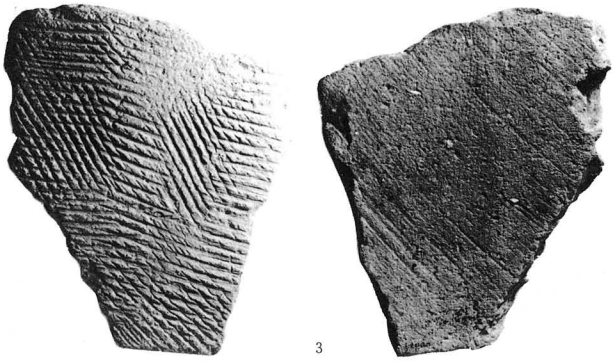


1

5



2



3

6

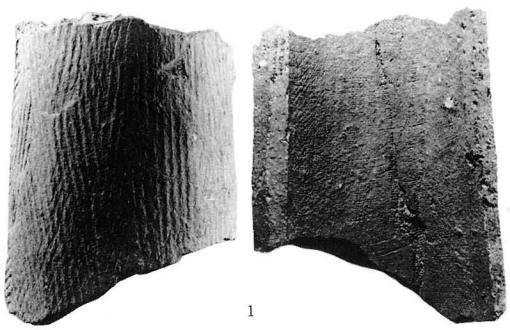
4

1　図49－7
2　図49－8
3　図50－3
4　図50－2
5　図49－8
6　表　採

図版48　出土遺物（平瓦）

1　Ⅴ区12トレ１層
2　図51－４
3　図51－５
4　方形周溝１層
5　Ⅰ区１層

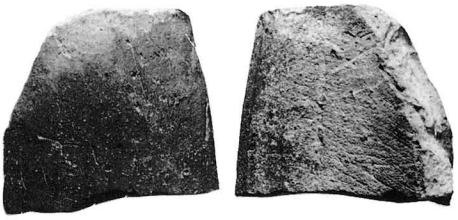
図版49　出土遺物（平瓦）



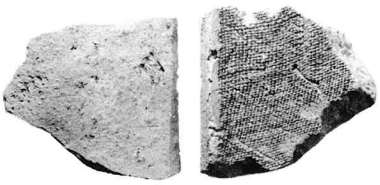
1

2

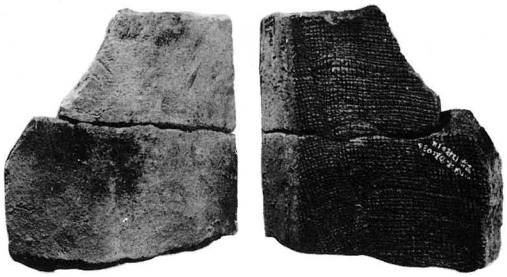
3



4



5



6

7

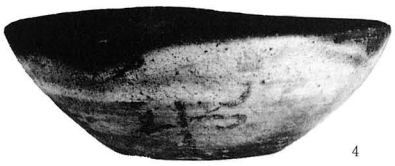
1　図52－5
2　図52－4
3　方形周溝1層
4　図53－3
5　表採
6　12号住
7　図53－4

図版50　出土遺物（丸瓦）

1

2

3



4

5

6

7

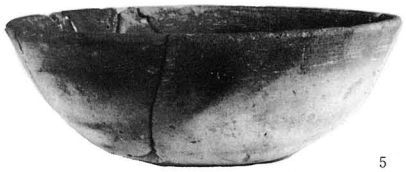
8

9

1	図41－1	6	図41－6
2	図41－2	7	図41－5
3	図41－7	8	図41－4
4	図41－3	9	図41－9
5	図41－8		

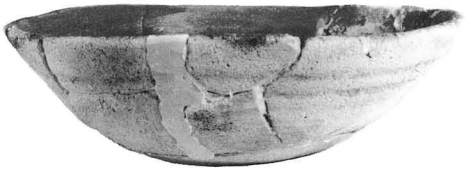
図版51　出土遺物（土師器）

1



5

6

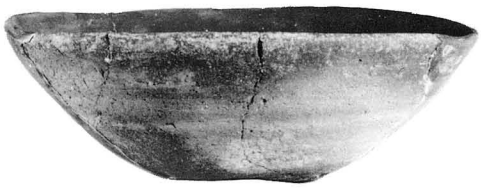


2

7

8

3



9

4

1　図43－2
2　図22－1
3　図43－1
4　図37－3
5　図37－1
6　図43－5
7　図36－5
8　図36－8
9　図42－1

図版52　出土遺物（土師器）

1

2

3

4

5

6

7

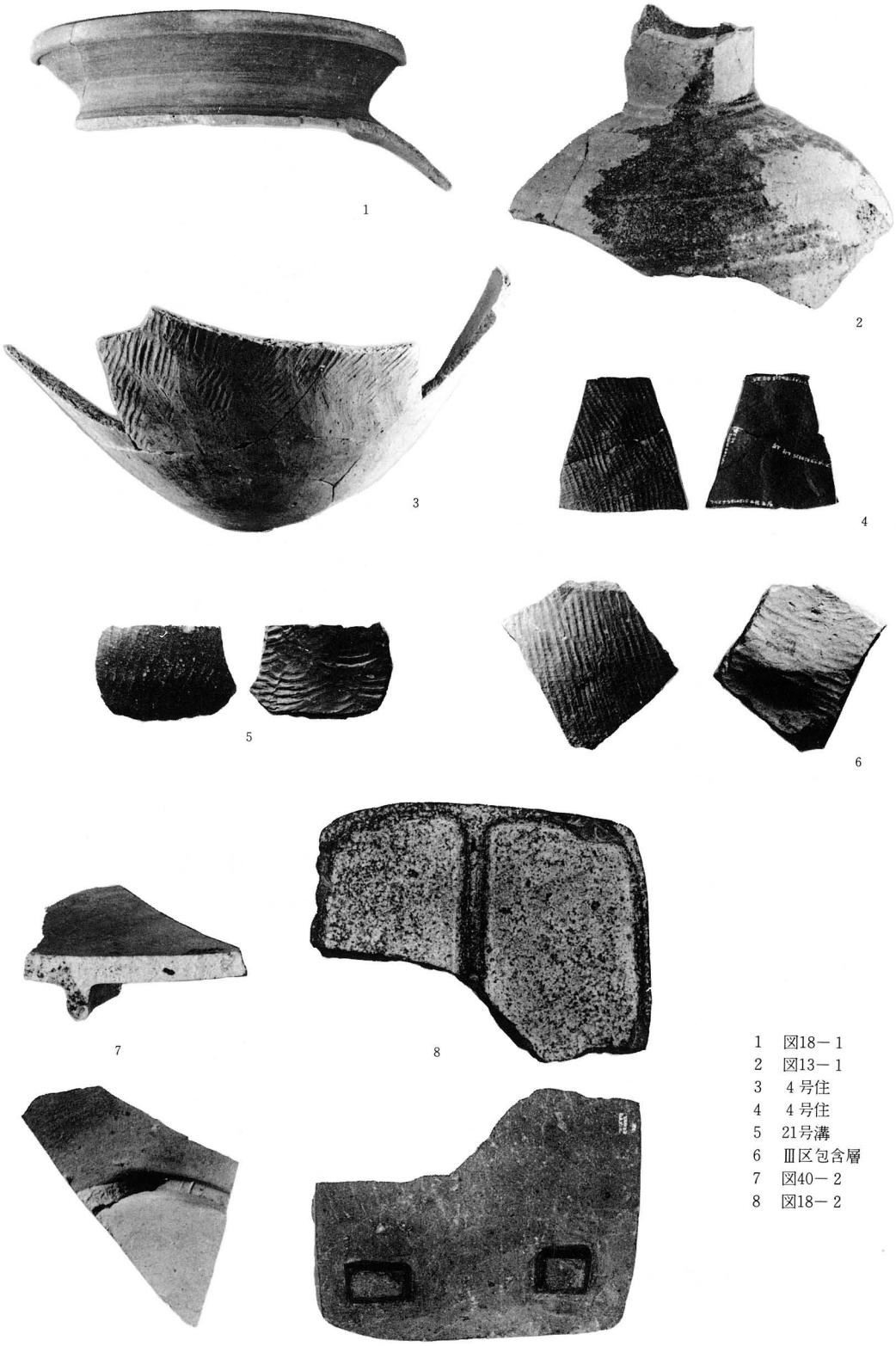
8

9

10

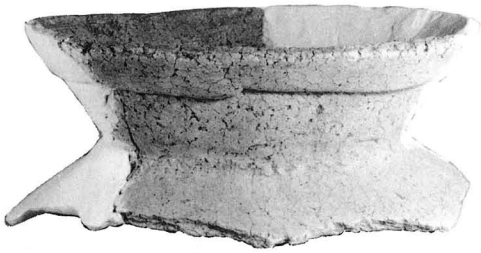
1	図20－2	6	図36－3
2	図45－3	7	図21－2
3	図20－4	8	図7－2
4	図17－8	9	図43－8
5	図37－4	10	図40－3

図版53　出土遺物（土師器・赤焼土器・須恵器）



1　図18－1
2　図13－1
3　4号住
4　4号住
5　21号溝
6　Ⅲ区包含層
7　図40－2
8　図18－2

図版54　出土遺物(須恵器・緑釉陶器・硯)

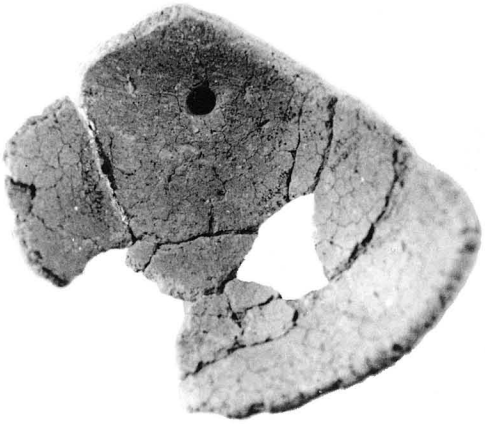


1

3

2

4

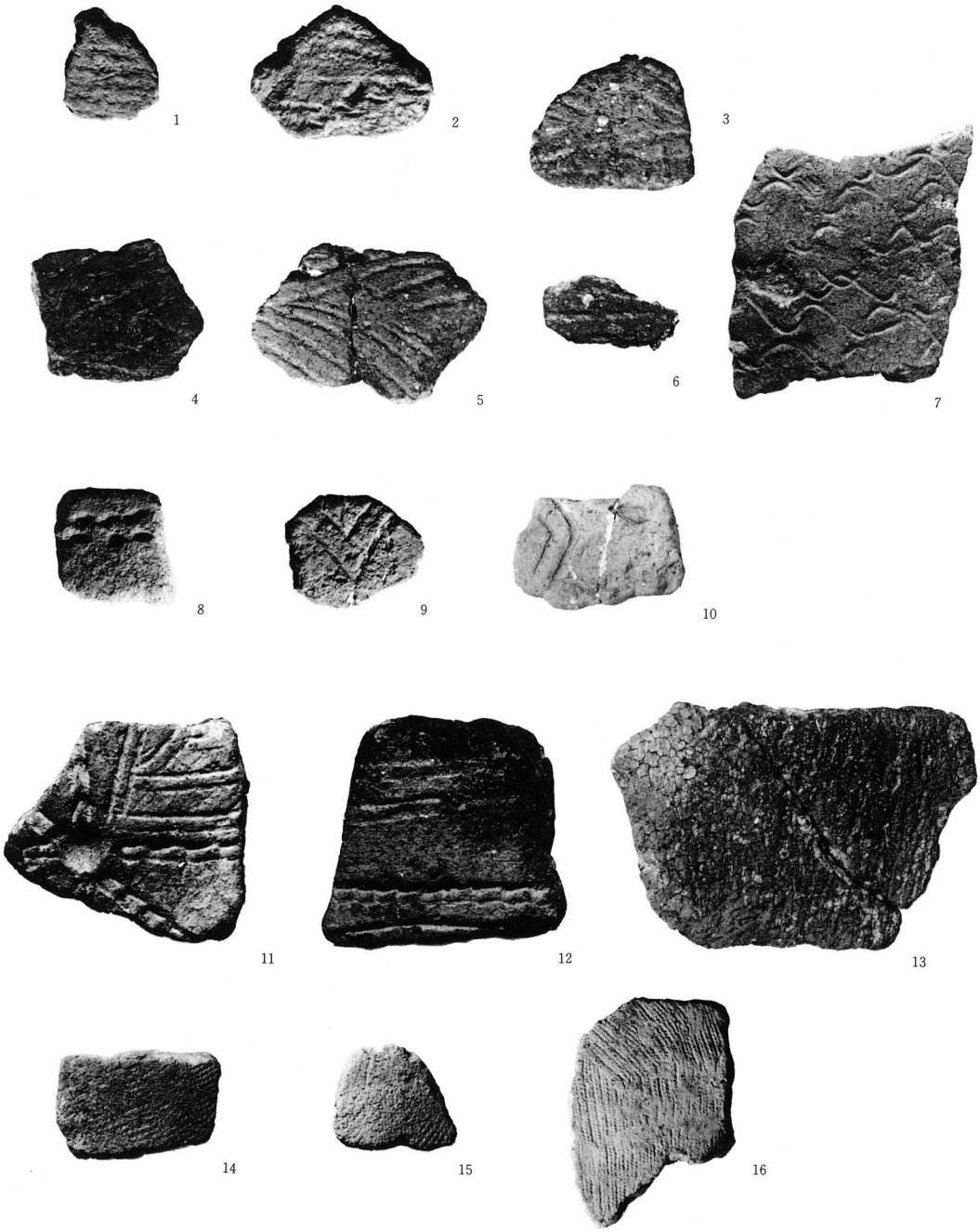


5

6

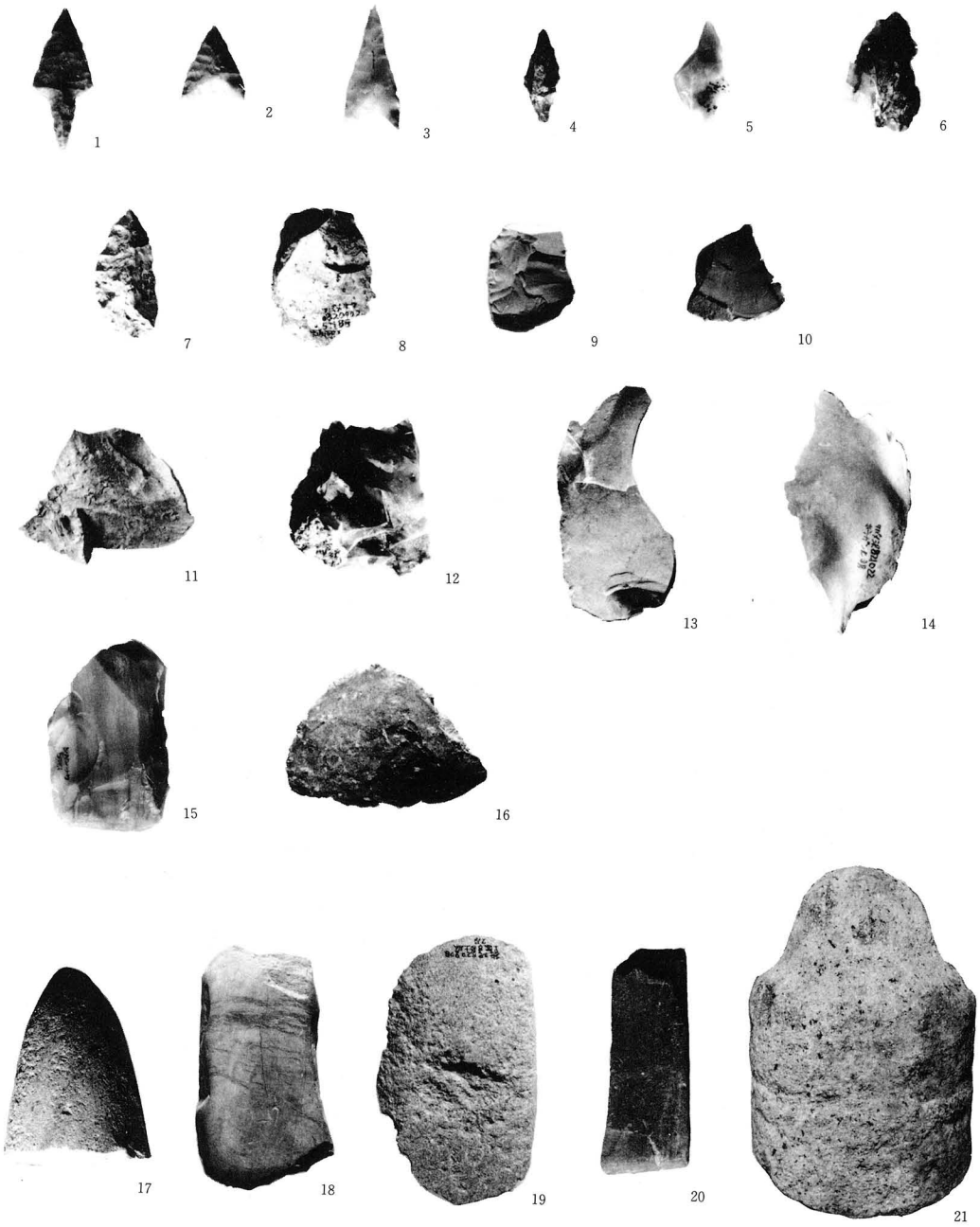
1　図23－5　　4　図10－5
2　図10－4　　5　図10－2
3　図44－2　　6　図44－7

図版55　出土遺物（土師器）



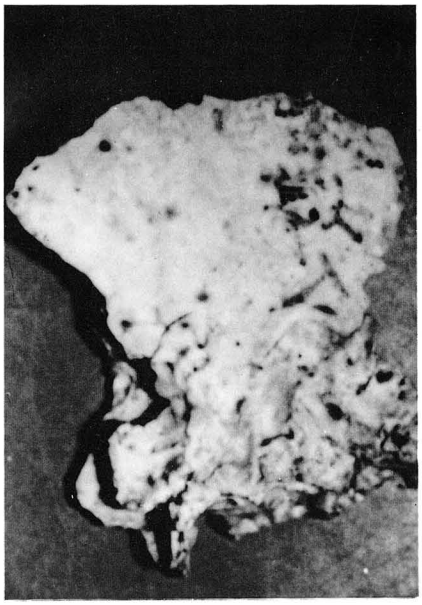
図版56　出土遺物(縄文土器・弥生土器)

1	図46－2	5	図46－9	9	図46－5	13	表　採
2	図46－1	6	図47－2	10	図46－6	14	図47－4
3	表　採	7	図46－3	11	図46－8	15	図47－5
4	図46－10	8	図46－4	12	図46－7	16	図47－3

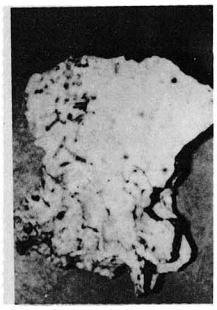


1	図54－1	7	図54－6	13	図54－11	19	図55－5
2	図54－2	8	図55－2	14	図54－10	20	図55－7
3	図54－3	9	図54－8	15	図55－1	21	Ⅰ区
4	図54－4	10	図55－3	16	6号土壙		
5	図54－5	11	5号住	17	図55－4		
6	図54－7	12	図54－9	18	Ⅲ区包含層		

図版57　出土遺物（石器・礫・砥石）



赤外線テレビカメラによる撮影



図版58　出土遺物（釘・漆紙文書）

職　員　録

社会教育課

課　長	永野昌一
主　幹	早坂春一

文化財管理係

係　長	大沢隆夫
主　事	岩沢克輔
〃	山口　宏

文化財調査係

係　長	佐藤　隆
教　諭	渡辺忠彦
〃	佐藤　裕
主　事	田中則和
〃	結城慎一
教　諭	成瀬　茂
〃	菅原和夫
〃	青沼一民
主　事	柳沢みどり
〃	木村浩二
〃	篠原信彦
〃	佐藤　洋
〃	金森安孝
〃	佐藤甲二
〃	吉岡恭平
〃	工藤哲司
〃	渡部弘美
教　諭	渡辺　誠
主　事	主浜光朗
〃	斎野裕彦
〃	長島栄一
〃	荒井　格
派遣職員	高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第1集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集　仙台城（昭和42年3月）
第3集　仙台市燕沢善応寺横沢穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集　南小泉遺跡－範囲確認調査報告書－（昭和53年3月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）
第22集　経ヶ峯（昭和55年3月）
第23集　年報1（昭和55年3月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集　史跡陸奥国分寺昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集　年報2（昭和56年3月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ－昭和55年度発掘調査概報－（昭和56年3月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年3月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ－昭和56年度発掘調査報告書－（昭和57年3月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ－昭和56年度発掘調査概報－（昭和57年3月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年3月）
第41集　年報3（昭和57年3月）
第42集　郡山遺跡－宅地造成に伴う緊急発掘調査－（昭和57年3月）
第43集　栗遺跡（昭和57年8月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭－茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書－（昭和58年3月）
第46集　郡山遺跡Ⅲ－昭和57年度発掘調査概要－（昭和58年3月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ－昭和57年度発掘調査報告書－（昭和58年3月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年3月）
第50集　岩切畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
第52集　南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）
第53集　中田畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第55集　南小泉遺跡－青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年3月）

第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年３月）
第57集　年報４（昭和58年３月）
第58集　今泉城跡（昭和58年３月）
第59集　下ノ内浦遺跡（昭和58年３月）
第60集　南小泉遺跡－倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書－（昭和58年３月）
第61集　山口遺跡Ⅱ－仙台市体育館建設予定地－（昭和59年２月）
第62集　燕沢遺跡（昭和59年３月）

仙台市文化財調査報告書第62集

燕　沢　遺　跡

昭和59年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　㈱　東北プリント
仙台市立町24－24　TEL63－1166